

# 私的 日本古代史考

～建国の真相はいかにあったのか?!～  
(別作最終版)

堂 本 彰 夫

2022年5月

## 目 次

○「別作最終版」作成に当たって	1
1. 真実の歴史（古代史）を知るためには？	2
(1) とにかく、まずは、「記紀」に頼らざるを得ない！	
(2) しかし、頼れないところも厳然とある?!であれば、受け止め方（解釈） を変える必要がある！	
(3) では、どのようにすればよいのか？	
2. そこにある、誰（何）かの「作為（嘘）」?!	10
(1) 誰（何）による、どんな「作為（嘘）」か？	
(2) その「作為（嘘）」には、明確な構図がある?!	
(3) その「構図」の背後にあるものは？	
3. 「記紀」（国史）編纂のシナリオ?!	21
(1) 基本的な枠組み（「神代」と「人代」の二重構造？）	
(2) 「二重構造」の意味とその関係（からくり？）	
(3) そこにおける重要人物の創作（捏造？）と関係づくり	
4. 史実としての、建国の大まかな流れ?!	57
(1) 前史（「倭国大乱」まで）	
(2) 「倭国大乱」とその後の動き?!	
(3) 「倭の五王」による「倭国制覇」?!	
5. 改めて見えてくる真実?!	64
(1) 二つの「倭国」、二つ（以上？）の王権（勢力）の攻防（「北部九州」 と「近畿大和」への二極分化?!）	
(2) 近畿大和王権（勢力）の勝利（倭国→日本国）	
(3) 何故、「記紀」は、真実を書かなかったのか？	
6. 「歴史の勝者と敗者？」、その存在と実相?!	85
(1) 勝者？としての藤原氏、中臣氏、息長氏、秦氏、賀茂（直）氏?!	
(2) 敗者？としての物部氏、蘇我氏（武内宿禰系）、和珥（邇）氏／多（太）氏、 大伴氏、そして、賀茂（臣）氏?!	
(3) そこにおける三輪（大神）氏、尾張氏／海部氏、賀茂（臣）氏の位置づけ?!	
7. これから期待されること?!	117
(1) 虚心坦懐な史実解明と再構成	
(2) とりわけ重要な課題の洗い出し	
(3) 鍵を握る、幾つかの有望な知見・アプローチ	
8. 参考図及び参考文献 ※再掲	131

## ○「別作最終版」作成に当たって

さて、いよいよ、私のこれまでの「古代史の旅」も、一応、現時点での最終のところまで来た！この間、本当にアットランダムに、知っていること、新たに知り得たこと、それこそ多種多様に書いてきたものである！だが、やはり、それらを、一つの大きな真実の束として、コンスタントに書き進めて（提示して）いくことは出来なかった！そんな思いで、一杯でもある！

もちろん、その原因は、思いつくままに、その都度のHP上にアップしていったからであるが（ある意味それしか出来なかった？）、それでも今は、曲がりなりにも、自分なりの成就感は得ており、そして、同時に、それらについて、どのような整理・総括が出来るのかも、少しだけ見えるようになっている？！

そこで、今回、改めて、先の「試作版→修正試作版」を下に（もちろん、「新たな真相解明に向かって」も加えて！）、その「別作最終版」を作ることにした！ただし、そこでは、単なる、その焼き直しということではなく、一つの大きなストーリー展開として、それらを再編し、しかも、自分なりのオリジナリティを出そうと決意している次第でもある（新たな知見、思いも手伝って！）。

すなわち、ここで、私自身の興味・関心あるいは問題として提起したいことは、ほとんど、先の「試作版→修正試作版」（＋「新たな真相解明に向かって」）に書きなぐってはいるが、それらを踏まえて、本当に、「最終版」として相応しい内容構成にしてみたいということである！言い換えれば、改めて、ここで目指したいことは、可能な限り総合的、かつ史実整合的に、それらを、一つの大きな「仮説体系？」としてまとめてみたいということである！

ということで、本稿は、「私的<sup>1</sup>日本古代史考～建国の真相はいかにあったのか?!～（別作最終版）」と銘打つ、先の「試作版→修正試作版」（＋「新たな真相解明に向かって」）に新たな知見を加えた、別立ての「最終版」、その意味での「完結版」ということになる！したがって、標記タイトルの論稿としては、先の「修正試作版」（＋「新たな真相解明に向かって」）と、この「別作最終版（完結版）」のペア（対）でもって、一つの全体（作品？）をなすということである！

末尾に、まだまだ、かなりの思い込みや錯誤（不十分な理解や手続き？）を行っていることは確かであろうが、私なりに提起したいことが、かの「史実解明」にさらに近づいているものであれば、これほどの喜びはない！何とも不遜？で、長年取り組まれている人達には、甚だ失礼だとも思うが、これが、今の私の「精一杯の形？」なのである！重ねて、寛大なるご理解を頂ければ幸いである！

※なお、これまでの、私のHP (<http://www.gakuyou.jp>) 上での論稿は、「堂本彰夫エッセイ集『第三部 古代史の旅（総集版）』」「続『古代史の旅』（総集版）」「新『古代史の旅』（総集版）」「私的<sup>1</sup>日本古代史考（試作版→修正試作版）」「堂本彰夫の古代史問答」、「新たな真相解明に向かって（総集版）」となっています。

## 1. 真実の歴史（古代史）を知るためには？

### (1) とにかく、まずは、「記紀」に頼らざるを得ない！

ということで、これから、私の、これまでの「古代史の旅」の総仕上げ（「最終版」）を成していこうと思うが、とにかく、ここでは、これまで、多くの先達のみなさん達の様々な研究・論究がなされてはいても、一つの大きな歴史の流れ（真実？の束）を理解（解釈？）するためには、やはり、まずは「記紀」（ここでは、主として、と言うよりは、実際上は、まさに「正史（自国の歴史の公式陳述）」としての『日本書紀』のことである！以下、この標記の時は、そのような意味合いで使用していく！）に頼らざるを得ないということである！

何故なら、一応？「記紀」は、我が国の建国史（国史？）を書き記すことが目的であったものだからでもあるが、もう一つの理由は、ある意味唯一、始発から当時までの歴史（8世紀初頭まで。ちなみに、『古事記』は7世紀初頭／推古記まで！）を、まがりなりにも、「通史」として描いているという理由からでもある（所謂「古史古伝」と呼ばれるものもあるようであるが、ここでは、一応視野外に置いている）！

要するに、その間の歴史全体が描かれているということであるが、ある特定の、その意味で断片的な史実（時期、事績や事件等）を示す史料（「金石文」等を含む）は多々あるにしても、それらは、歴史（古代史）全体を俯瞰（説明）できるものではないということである（たとえ、それらが、個々には重要なものではあっても！）！もちろん、普通はそうであろうし、歴史記述（研究？）とは、一面では、そうしたものの積み重ねから成るとも言えるであろう！

しかるに、一方で、その通史的な（全体的な）歴史叙述（書き物）の欠点（限界？）は、当然ながら、本当に、それらのすべてが真実であったのかどうかの確認（実証？）は難しい（出来ない？）ということである！あまりにも膨大と言えば、まさにそうなのであるが、だからこそ、そうだと思えば、そうであるということになるし、逆に、そうでないと思えば、そうでないということにもなる！それは、ある意味、どうしようもないのである！

ただ、これに関わっては（余談ではあるが？）、あまりにも無邪気に（失礼だが！）、「記紀」に書かれていることを真実だとして、そこから事実の解釈や事件・事績等の説明（再構成？）を行っている人や論考（多くは、かの「読物」の類い？）を見かけるが、その功罪（それが及ぼす影響）について、その人（論考）自体はどのように捉えているのであろうか？そこが、気になると言えば、気になるところではある？！

さらに、これもまた当然、その功罪（それが及ぼす影響）については、最終的には読む／受け取る側の責任とはなるが、それが、公的な機関（テレビ局等）を介して無神経に？行われているのであれば（多くは、そのように行われている？）、

かなりの危惧、と言うより憤り？も覚える?!

と言うのも、その場合は、単なる趣味・教養、ましてやエンターテインメントでは済まされないからである?!何故なら、それは、一国の歴史の真実に関わるからである!絶対に、おろそかにしてはならないものなのである!したがって、そこでは、嘘?や、まだ確定していないことについては、それなりの配慮が必要であるということである(もちろん、「言論の自由」や「表現の自由」等との兼ね合いもあるが?)!

**(2)しかし、頼れないところも厳然とある?!であれば、受け止め方(解釈)を変える必要がある!**

いずれにしても、その叙述の信憑性はともかく、我が国古代史(建国史)については、まずは、「記紀」の記述に頼らざるを得ないということであるが、しかし、そこに、まさに頼れないところが厳然とあるということになれば、必然的に、その受け止め方(解釈)のスタンスは変わっていかなければならない!それを踏まえたものとならなければならない!そういうことになる!

そう、それは、既に、信じる、信じないというような次元を超えた話(論議)とならざるを得ないということであるが、「記紀」には、その頼れないところ(嘘?)が、絶対にあるということである!

では、一体どこが、どういう理由(証拠?)で頼れないのか?ここでは、幾つかの重要な証拠?を確認しておきたい!頼れないという証拠は、それで十分であるということである!

### ○時代設定(時期)の信憑性

まずは、時代設定(時期)の信憑性である!例えば、神武期についてであるが(BC.660年頃。『日本書紀』の記述から、そう割り出されている!)、その時代(時期)は、確か「弥生時代前期(否、以前は「縄文時代晩期」とされていた?)」頃である!しかも、そもそも、その時期、近畿大和(「奈良盆地」)には、そうした形跡(「神武東征(即位)」を思わせるようなもの)はあり得ない!つまり、そこは、まだ「湖(奈良湖)の底」(あるいは、ほとんどが「沼(湿地帯)»)であったからである(考古地質学の知見より)!

建国の起源を「古くみせる」ためであろうが、既に、それ自体が、頼れない話(時代の誤魔化し!嘘?)となっていることは明らかなのである!ちなみに、確か?3世紀前後頃には、その湖の陸地(盆地)化が進み、人々(移住者、開拓者達?)が、その周辺に集住し始めたということ自体は事実であるようである(「唐古・鍵遺跡」等→稲作、鉱山開発等?)?!

そして、そこに、これも、当時は湾であった河内平野方面(「河内湾→河内湖/潟」)から「奈良湖?(→盆地)」に至るルートで、船で往来することのできる「海人族」が参入・進出したであろうことは、容易に想像できることである!

したがって、そういうことが、例の「神武東征（即位）」に投影されていると言えるのでもある（ただし、「神武東征」自体は、それらに関わる、幾つかの複合話？）?!

### ○年齢のあり得なさ

次に、人間（登場人物）の年齢（寿命）に関わる部分である！すなわち、「神代」ならまだしも（「神」は超然的な存在？）、「人代（生身の人間！）」の叙述に、冷静に受止めれば、生物学的にはまったくあり得ない年齢（寿命）が示されているということである（何人かの天皇、そして、「武内宿禰」）！

尤も、これについては、何か（人物なり、時期）を無理矢理？挿入したのために、そのようなあり得ない年齢となっているということ、そこで話は終わるのであるが（その限りにおいては、誰にも疑義はないということか？）、問題は、それはそれで史実ではあった（原因は、「挿入」にあった！）としても、歴史（国史）の記述としては、それ自体が、捏造、操作されている？つまり、全幅の信頼は寄せられないものとなっているということは、明らかかなはずなのである！

ただし、この「年齢」については、いわゆる「二倍年暦（年に二度、春と秋に年を数えること）」のことは考慮する必要はある（そのこと自体は、事実であった！）！とは言え、それが、ある天皇、ある人物だけに適用されているとしたら（そうされている？）、それはまた、おかしいのである！

何故なら、たとえ、その時期、その天皇（人物）だけに、言わば素直に？それ（二倍年暦）が採用されているとしても、記紀編纂者達は、そのことを考査（調整）して、年齢（寿命）を記さなければいけなかったはずである？また、そうできたはずである?!そうでなければ、そのことが矛盾（嘘？）だということが、簡単に露見してしまうからである（「長寿」といっても程があるのである！）！

したがって、もし、それを承知で書いているのであれば、逆に、それが意図的な嘘だということを、暗に示していることにもなる?!矛盾（嘘？）は矛盾（嘘？）として、ある意味平気で（大胆でさえある？）、そう書いているのであれば、それにはまた、別な理由があるはずなのである?!

例えば、それほど神秘的（神的）な存在であった（人間離れしていた？）?!あるいは、逆に、その矛盾（嘘？）に気がついて欲しい！そういったメッセージが、一方では、あったのかもしれない?!単に、古い言い伝え、「旧記」等の記述を、そのまま転写したわけではないということでもある?!

### ○「干支2運」の繰り上げ操作?!

次が、上記とも関わるが、他の関係文献（特に百済系文書）との明らかな（意図的な？）齟齬があるということである！その最大の（目立つ？）ものが、有名な「神功じんぐう皇后」（「氣長足姫／息長帯比売おきながたらしひめ」／「仲哀天皇」の正后／「応神天皇」の母親）の事績の部分であるが、それは、まさに「干支2運」

(120年。一運は60年)の繰り上げ操作であるということである(このことは、絶対に真実である!しかも、他にも干支運の操作はある!)!

多分、それによって、「神功皇后」を、時代的にはそぐわない、かの『魏志(倭人伝)』に記載されている「卑弥呼または台与(邪馬台国女王)」(おそらく台与?)に見立てようとしているということであるが、そこに何があるのか?

と言うより、ここでは、「記紀」自体が、そうした歴史の改竄(干支運の改変等)をしていること的事实(証拠?)を、冷静に受止めるべきだということであり、それらを踏まえて、そこに、どのような意図があるのかということが、まさに冷徹に?解明されなければいけないということである!

○「書き物」には、本当のことが書いてあるかどうかは、基本的には分からない?しかも、実証できない!

とは言え、そこに何らかの(大いなる?)作為(嘘や捏造?)があったとしても、言い換えれば、過去の全てが、たとえある書物等を書いてあったとしても、所詮それらは書き物でもあるので(本当のことが書いてあるかどうかは、基本的には分からない→実証できない!)、分かるはずはないのである!だから、その分からなさは、「作為(嘘や捏造?)」とは別に、ある意味自然なこととも言える?!

つまり、知らなかった!知る由もなかった!というような理由も、あるのではないかということであるが、とにかく、それらが、すべて「記紀」の作為(嘘や捏造?)であるのか、あるいは、もともとそのように伝わっていたことを、そのまま転用(借用)したのか(だから齟齬を生んでしまった?)、それについても、一応は、目配りしておく必要があるということではあるのである!

ということで、「記紀」の叙述が、基本的に、絶対の真実を書き記したのではない!その意味で、「(無条件には)頼れない!」ということは、誰の目にも明らかなことであり、そこに、誰(何)かの「作為(嘘や捏造?)」があることも、限りなく想定しておかなければならない!少なくとも、重要な事項、場面のそれには、そうした受け止め方(スタンス)が、絶対に必要だということであるわけである!

しかも、その「記紀」の編纂(公表?)には、必要以上の注力(監視の目?)が注ぎこまれたことも事実であるようである!例えば、それ(この場合は『日本書紀』)に関わる「焚書坑儒」(良からぬ書き物を焼き捨てること)のようなものもあったのであり、一方で、熱心な「日本(書)紀講義」のようなものを、時間を掛けて、何度も行っていた(これらも事実である!)!まさに、『日本書紀』(の中身)の定着(普及)に必死であったということである?!

それほどまでの監視と取り締まり、そして、一方で、新たな?歴史の創作・流布(強要?)に躍起となっていたということであるが、些細なミスや内容の矛盾は、自らの主張(思惑?)や利害を侵さない範囲では見逃したとは言える

であろうが、一方で、意図的な「作為（嘘や捏造?）」の部分は、むしろ赤裸々に、その不整合（矛盾?）を書き記しているということでもある?!

**(3)では、どのようにすればよいのか?**

**○まずは、その「意図的な作為（嘘や捏造?）」の部分を顕在化させること!**

では、改めて、それについて、「どのようにすればよいか?」ということになるわけであるが、当然、まずは、その「意図的な作為（嘘や捏造?）」の部分を顕在化させることである!ただし、これについては、その断片は、これまでに多々抽出されているわけであるので、それを、一人でも多くの人々が参画、協力して、いかに、それらをうまく集積させていくかであることは言うまでもない!

ちなみに、そこには、件の「邪馬台国所在地論争」や「倭国大和説/九州説論争」のような大きな障壁?があり、たとえ、その「意図的な作為（嘘や捏造?）」が発見されていたり(そのこと自体の認識はあるということ!)、その証明(解釈?)もなされていたりしていたとしても、その意味するところは、大いに違ってくることもある?!つまり、そこにおける史実?自体も違ってくるということになる?!例えば、邪馬台国や倭国(の中心)がどこ(どちら)にあったのかということ、それらは大きく異なるということである?!

**○「記紀」の作成意図(作成主体/背景等を含む)を明確にする!**

そこで、次には、可能な限り、そういう事態を回避するためには、改めて、「『記紀』の作成意図を明確にする!」ということである。そして、特に、ここでは、その作成主体や背景を明らかにし、その認識共有を進めていくことが必要であるということである。すなわち、そのことによって、その史実?の意味、確からしさが、より精緻になっていくということである!

ただし、このことについては、現在は、『日本書紀』の作成(と言うよりは、最終的な仕上げ作業?)は、「藤原氏」による(「不比等」に始まり「桓武」で成就?)、そして、『古事記』のそれは、「多氏(「太安万侶」→「多人長」?)」によるということであるが(※『日本書紀』の方は、ほぼ間違いない!)、そのことを、さらに検証し、それに基づく「記紀」の解釈、そして、それを受けた「史実解明」への努力を、たゆまず続けていくということが必要だということである!

**○頼れない要素は多面的である!そのことを、常に意識しておくことが重要!**

とにかく、以上のように、それらは、ある時の、ある政権の「国史作成」としては、ある意味当然なのでもあるが、「記紀」には、厳然として頼れないところがあるのであり、しかも、その要素は多面的であるということである!したがって、常に、そのことを意識して、その解釈/解読に努めなければいけないということである?!その意味で、それらが、本稿の出発点でもあるというこ



とである（ただし、それが、十分であるかどうかは、まだまだ怪しいが）！

○ 何（誰）かの意図（作為）で、「分からなくされている？」ということであれば、そのこと自体が問題なのである！

ところで、何故、そこなのかということについては、端的に、その部分が、通説とはかなり違う、否、何（誰）かの作為によって暈されている（隠されている？）ということにあるが、本論考の直接の目的は、それについて、誰が、何のために、どのように暈して（偽って）いるのか？私なりの解明（類推？）に挑戦してみたいということなのである！

繰り返しになるが（かなり？鳥澁がましくもあるが）、自らの祖先、自らの国のルーツが如何にあったのかということは、これからの時代、国が如何にあればよいのかということと同様に、今、そこに生きる人間の一人として、知っておかなければいけないことだと考える！もっと突っ込んで言えば、「分からない」のではなく、「分からなくされている？」ということに、かなりの憤り（情けなさ？）を覚えるとともに、では、一体、真実はどうなっていたのかという、私なりの問題意識があるということである。

要するに、諸般の事情で「分からない」のは（学問的な理由も含めて！）、ある意味当然であり（何せ古い時代のことであり、しかも、それについての、100%明確な文字史料もないわけであるので！）、それはそれで仕方がないのであるが（ただ、それは、徐々に解明されればよいだけのことでもある！）、何（誰）かの意図（作為）で、「分からなくされている？」ということであれば、やはりそれは、そのこと自体が問題だということなのでもある！

しかも、ある意味そこを解決？しなければ、いつまでたっても、史実には届かない？そして、いたずらに（無駄に？）時間や労力を費やしてしまうということでもある（その代表的なものが、「邪馬台国所在地論争（九州説対近畿大和説）」であり、「九州（倭国）王朝対近畿大和（日本国）王朝論争」である！）?!それは、単なる学問研究の問題ではなく、自国の歴史を正しく認識するという時の、言わば出発点とならなければならないものだからである！

ということで、それを最初に（公的に？）示したものが、まさに「記紀」、とりわけ『日本書紀』（720年）ということになっているわけであるが、その『日本書紀』、それ自体が、本当に正しく、それまでの我が国の歴史を記しているのかと言え、答えは、「否」なのである?!

すなわち、彼ら（記紀編纂者達）が、本当によく分からなかったもので、史実が不分明ということであれば（もちろん、そういう部分も多々あるであろうが?!）、それはそれでよいのであるが、逆に、意図的（作為的）に、事実を曲げたり、暈したり、あるいは創作？したりしているのであれば、そこを正しく？問わなければならない！そういうことなのである！

○私が出来ることは、多くの研究者・著作者の言質を踏まえた、私なりの考察と、さらなる問題提起である?!

なお、ここでは最後となるが、私自身は、「記紀」それ自体を直接読んでいるわけではない!すべてが、他の人達の紹介・解釈によって、こういうことを言っているということである!だから、その解釈／解読については、あまり大きな口は叩けない!まさに、「他人の禪で相撲を取っている」ということであるが(だから、かなりの揺さぶりも受ける!)、しかし、可能な限りの確からしさを、常に自らに問いながら、これまで論究してきたことは、ここでは名状しておきたい。

そこで、一つだけ、そうした命題あるいは謎解きに参入させてもらえることができるとしたら、近年、ほぼ定説となってきたと思われる、「記紀」、とりわけ『日本書紀』編纂における、藤原氏(不比等)の介在(陰謀?)、そして、その介在(陰謀?)によってもたらされた、まさに「日本古代史」の真相の捏造、改竄、あるいは発明?が、本当にあったのかどうか?

そして、そのことも含めて、そこに示されている史実?の、何が、どのように問題なのかということに対する、多くの研究者・著作者の言質を踏まえた、私なりの考察と、さらなる問題提起ではないかと思っているのである。厚顔無恥、笑止千万と、無視あるいは嘲笑を受けることになること必定ではあるが、やはりここにきて、一度くらいの挑戦は果たしてみたいという一念なのである。

もちろん、これには、「そもそも、藤原氏(不比等)が、そうした捏造・改竄あるいは発明をしているとしたら、どこが、何故そう言えるのか」という問いと、「もしそうであるとしたら、何故、そのようなことをしたのか」という問いの双方の答えが、多くの人の共通理解とならなければならない!

何故なら、当然そこに共通理解がなければ、いつまでたっても、自家の論証や、それとは直接的には結びつかない、単なる歴史事象の「ピースづくり(ごっこ?)」に墮してしまうからである。ただし、そのこと自体がまったく無意味であるということ、主張しているわけではない。要は、上の譬えからすれば、共通のパズルの枠組み、少なくとも、その外枠だけは確かなものにすることが必要だということである。

ちなみに、これらのことについては、私が最も依拠している「関裕二氏」等によって、当時の海外文献も含めて、多種多様な文献・資料を用いて、改竄と創作を加え、現(編纂当時の)政権の正当性・正統性が描かれているということが、随分と解明されてきているように思われる。本論考は、基本的にその枠組み(成果)に依拠しながらも、まだまだ納得できない、あるいは不確かな史実ピース?を、他の部分(著作者)からも引き寄せ、さらなる枠組みの確定に向かおうとするものでもある。

とにかく、以上のことは、これまでの「記紀」の理解に、かなりの変更をもたらすであろうが、それでは、改めて、何が、どのように問題となるのか？すなわち、何（誰）かの作為のために、掴めない真実があるとすれば、一体、その偽られた真実とはどういうことなのか？そして、それは、どのように偽られているのか？そういうことになるのである？！

もちろん、それらについては、私がそれを指摘するまでもなく、専門の研究者も含めて、過去幾多の人々によって、それこそ 200 年？以上も前から、連綿として、その真相解明に向けた研究・調査、そして著作が続けられてきている！私は、そうした先人のみなさん達の、それこそ血の滲むような努力は、直接的には分からないし、これもまた当然であるが、それらの内容や成果物等についての見識も、ほとんど持ち合わせているわけではない！だが、やれるだけのことはしたい！まさに、そういうことなのである！

## 2. そこにある、誰(何)かの「作為(嘘)」?!

### (1) 誰(何)による、どんな「作為(嘘)」か?

以上、まずは、史実(古代史)解明に当たっては、「記紀」に頼らざるを得ないということ、しかし、一方で、その「記紀」には、頼れない部分も厳然としてあるということであったが、改めて、そのほとんど(意図的なもの?)は、藤原氏(不比等)の作為(野望?)と考えられる?!

ただし、それは、一方では、その当時の政権勢力(勝者?)を担った、あるいは加担・同調した幾つかの氏族・勢力の暗黙の了解と駆け引きの中で生まれたものでもあった?!そして、その、当時の政権勢力(勝者?)に同調・加担した幾つかの氏族・勢力とは、「中臣氏」「息長氏」「秦氏」「賀茂氏(の一部?→「賀茂直氏」)」であり、さらには、それに、「天武」の正后(「天智」の娘)であった「持統」が乗ったものでもあった(担ぎ上げられた?実子「草壁皇子」のため?)?!

そう捉えると、かなりの謎が解けてくるのではないかということでもあるが、そうなれば、そこには、藤原氏(不比等)の作為(嘘)に乗じて(同調・加担して?)、上記のような、幾つかの氏族・勢力の主張や思惑が取り込まれたことは言うまでもないことである(しかし、一方では、反対・批判勢力の抹殺・排除を伴う?このことは、現在、多くの人の共通理解にもなりつつある?)?!

以下、そうした「作為(嘘?)」について、言わば「現時点での四つのトピック」という形で、改めて提示しておきたい!

### ○「天武」の発意(ため?)と見せかけて、自家(天智系→藤原氏)の正統性を発現させた?!そして、「持統」が、それに乗った?!

そこで、まずは、「記紀」の作成においては、『天武』の発意(ため?)と見せかけて、自家(天智系→藤原氏)の正統性を発現させた?!そして、『持統』が、それに乗った?!ということである?!

端的に、それは、「中臣(藤原)鎌足」の子(ではないとも言われているが?)の「藤原不比等」の作為に乗っかって、自らの血統(存在→「天照大神」?を祖とする皇統譜!)を創り上げた「持統」(彼女が、天皇になっていたかどうかはともかく?そうではなかったという説もある!)との共同作業があったということである?!もし、そうだとすれば、これは、ある意味とんでもない発見?ともなる?!

と言うのも、通説の言う?、「国史(『日本書紀』)」の作成が、当初「天武天皇」の発意(ため?)であったことは事実であったが、状況(勢力関係)が変わり、かなりの紆余曲折を経て(つまり、「天武」の治世からかなり後の720年の完成!)、結局は、誰のために、何のために書かれたものなのかが見えにくくなってしまっている?!そういうことにもなるからである(ただし、今でも、素直に?『日本書紀』は、天武天皇のために書かれたものとしている(信じている?)人も、いるに

はいるようではあるが?)?!

そこに、何があったのか?とにかく、そこに、藤原不比等(及びその同調・加担者)の作為(嘘や捏造?思惑?)があったということは明らかだということであり、そのこの部分の新たな捉え直しがなされなければ、「記紀」(『日本書紀』)が示す?我が国の建国史は正しく見えてこない?そういうことになるということである(だから、これは、これまでの定説(通説?)を根底から覆すものかもしれないのであり、その意味で、「とんでもない発見?」ともなるのである?)?!

まさに、そこに、誰かの作為(介入/歴史の横取り?)があったことは間違いないということであるが、もちろん、それは、「記紀」(この場合は『日本書紀』)編纂の黒幕(首謀者?)であった「藤原不比等」のものであったということである(余計なことではあるが、名前からして不遜?「不比等」→比べられる人物はいないという意味?)?!

ちなみに、このことについては、例の「関裕二氏」の、夥しいほどの著作物(列挙不能!)に示されている通りであるが、そこでの全てを真実と受け止めるかどうかは別として(今は、私としては、一部納得のいかない部分もある!)、その事実は、おそらくあったものと言えるであろう!だから、「記紀」の解釈は、それ(「藤原不比等」の思惑、陰謀?)を押さえたものとならなくてははいけない!そういうことであるわけである!

そして、もちろん、これについては、彼を重用した「持統」の思惑が重なっていることは言うまでもない(多分?彼らは、「百済温祚系余氏」という王族であった?)?!まさに、「共犯?」ということである?!

**○ それに同調した、幾つかの氏族・勢力の意向・思惑があったことも間違いない?!**

次に、これは、半ば私自身のオリジナルな?主張となるが、それに同調、あるいは加担した幾つかの氏族・勢力、具体的には「中臣氏」「息長氏」「秦氏」「賀茂氏」(こちらは、「皇別氏族」とされている部分の「賀茂直氏」である!ちなみに、「賀茂氏(族)」は、大きくは、二つ、あるいは三つに分裂していた?)等の意向・思惑が絡んでいることも、ほぼ間違いないのではないかということである?!

たとえ絶大なる権力者になっていたとしても、「藤原不比等」唯一人、あるいは一部の、彼の取巻きだけでは、とても、あのような壮大な?歴史叙述(物語?)は出来ないということであるが、それ故に、一方で、彼ら(同調・加担氏族?)の描き方にも、一定の配慮(忖度?)がなされているのではないかということでもある(事実でもあったのであろうか?)?!

例えば、「中臣氏」には「天兒屋あめのこやね命」、そして「建御雷たけみかづち命」というような重要な祖先神の賦与、「息長氏」には、「天日矛ひぼこ」や「神功皇后」という女傑(女帝?)の存在や活躍話、「秦氏」(ただし、こちらは、か

なり微妙な立場ではあった?)には、「秦河勝<sup>かわかつ</sup>」という人物の献身話?、「賀茂(直)氏」には、「建角身<sup>たけつぬみ</sup>命(八咫鳥<sup>やたがらす</sup>)」の貢献話?、等々といった塩梅である?!

いずれも、ある意味勝者側?としての扱い方ということであるが、彼らが、「勝利?(政権獲得)」に間違いなく関与・貢献した氏族・勢力であったということである?!否、実は、彼らは、本来は、その勝利の主役?であったということでもある?!その意味で、最終的な藤原氏の勝利?は、彼らの存在・活躍?の延長線上にあった、あるいは、それらを踏み台にしたもの?そういうことでもあるわけである?!

なかでも、「中臣氏」は、まさに「藤原氏」を自らの籍(→「天兒屋命」の子孫)に入れる(ことに同意する?)ことによって、「祭祀職(神道)」の筆頭家の立場を得た?!ちなみに、そのことを、同じ「祭祀職(神道)」であった「斎(忌)部<sup>いんべ</sup>氏」が妬んでいた(→そのため、その後の「斎(忌)部広成」は、『古語拾遺』を著し、彼らの結託を暗喩的に糾弾した?)!

そして、「息長氏」と「秦氏」は、政権獲得のための有力なパートナーであった?!とりわけ、「息長氏」の場合は、「応神」や「継体」といった王権の立役者であったこともあり、「藤原氏」が、その氏族・勢力との関係づくりに意を強く用いたことは、ある意味当然なことであった?!

さらに、その「息長氏」と連動していた?「秦氏」の場合は、ある意味経済的(または文化的?)な支援が甚大であった(しかし、ひょっとしたら、例の「乙巳の変(645年)」の首謀者?は、「秦氏(河勝?)」であったかもしれない?←「関裕二氏」)?!そしてまた、その「秦氏」と密接な関係があったのが、「賀茂氏(の一部→賀茂直氏)」であり、京都(山城)での「秦氏」との協力関係は、そのことを如実に示している(→「上賀茂神社」/「下鴨神社」)?!

要するに、「中臣氏」は、「藤原氏」と一心同体?になり、政権を動かした?!「息長氏」「秦氏」「賀茂氏(の一部)」は、彼らの協力者・支援者(パトロン?)となった?!だから、藤原氏(不比等)は、そこを付度した?!そういうことである?!

少なくとも、そのような視点で、「記紀」、とりわけ『日本書紀』の叙述を解説(裏読み?)してみる必要があるということであるが、一方で、ここが肝心であるが、その関係、あるいはその関係の状況(経緯?)が、所謂「高天原神話」(「神武東征」等を含む)の「記紀神話」に投影されているのではないか?そういうことでもある?!そして、彼らの、個々の氏族神話(史実?)を大いに活用(借用?)して、(自分達の)「万世一系の皇統譜」を作成(創出?)した?そういうことでもある?!

○「敗者の側?」の憾み辛み、怨念?憂さ晴らし等も、同時にあった?!

とは言え、次に、もちろん、逆に、そうした動き・流れに負けた、ある意味ではこちらの方が正統な？「物部氏」「蘇我氏」、さらには、「和珥氏？→多(大)氏」「尾張氏」「海部氏」「紀氏」「斎(忌)部氏」等は、抹殺あるいは無視されているということである?!

すなわち、まさに「敗者の側？」（「物部氏」「蘇我氏」「和珥氏？→多(大)氏」「尾張氏」「海部氏」「紀氏」「斎(忌)部氏」等？）の憾み辛み、怨念、あるいは憂さ晴らし等が、一方であったということである?!さらにまた、その中で、「秦氏」、「賀茂氏(族)」等は、ある意味微妙な関係も有しており（彼らは、全員が「勝者側？」ではなかった?）、そうした氏族・勢力のあり様についても、正確に、視野に入れておかなければならないということである?!

ただし、そうは言っても、それらについて、直接明示されたものはなく（抹殺や報復を恐れて?）、別の文書や、時期を遅らせた告発書?を用意してのそれであった?!しかも、それらは、婉曲に示された?!例えば、前者では、「斎(忌)部氏」(忌部広成)の『古語拾遺』、後者では、「物部氏?」の『先代旧事本紀』等が、それである?!また、他ならぬ『古事記』は、「多氏」(太安万侶→多人長?)によるものでもある?!

以上、そこには、「蘇我氏」は当然であるが(645年に、本宗家が潰されている→「乙巳の変」!）、「物部氏」の没落(平城京遷都の際に、最後の大物・左大臣「石上(物部)麻呂」が置き去りにされ、そこで憤死している!)、「和珥氏/多(大/意宇/富)氏」への冷笑(「因幡の素兎」の話?)、「尾張氏」への無視・嫌がらせ(「天武」への助力の廉かどで!)等がある?!彼らは、その時々々の王権関係者・協力者(外戚等)であったが、最終的には、歴史の敗者?として描かれているということである?!

### ○だが、一部、それらとは違うものもある?!

最後に、だが、他方では、そうした「記紀」編纂の首謀者(藤原不比等)や同調・加担者達とは違った、実際に、その叙述を行った、いわゆる「文人達」(歴史家?4人いるらしいが?)の作為(思惑)が、一部?あったことも事実である?!その意味では、その編纂過程は、必ずしも一枚岩ではなかったということでもある?!

つまり、同じ「作為(思惑)」ではあっても、思いや利害が相反している場合もあるようなのである?!例えば、そのようには書きたくなかったが、仕方なく、表面上はそのように書かざるを得なかったというようなことである(身の危険や圧力があった?否、それだけは、文人としての矜持が許さなかった?)?!

その、最も顕著な(有名な!)部分が、例の「継体天皇(第26代)」の薨去記事に関わる部分の不可思議さであるが、「後世の人が、この矛盾に気づき、よく考えて真実を見つけ出すであろう?」というような、極めて意味深長な文言

を残しているのである！ある意味、何と言う「大胆さ？」であろうか？よく、こうした「記述」が許されたものである?!最終チェック者が、意図的に見逃したのか、たまたま見逃した(気づかなかった?)ものか、真相は分からないが、後者のケースは、ほとんど考えられないのではないかと!

このように、「記紀」においては、一部(それ以上?)、勝者側?ではない人々の思いや歴史叙述も紛れ込まされているようであり、その理解(解説)に当たっては、かなりの柔軟さが求められるということでもある!素人の私が言うのも、甚だ変ではある(申し訳ない)が、「記紀」、とりわけ『日本書紀』は、まさに奇々怪々な?書物なのでもある?!

**(2)その「作為(嘘)」には、明確な構図がある?!**

○「神話(高天原神話)」を創出し、自らを中心とした「万世一系の皇統譜」を作成(捏造?)した?!

では、改めて、その「作為(嘘)」の具体的な形(証拠?)とは何か?そこには、明確な構図があるのではないかとということであるが、それは、端的には、時代や人物をはぐらかし、自らに都合の良い話として再構成した!その最たるものが、「持統(天皇?)」を「天照大神」に昇華(昇格?)させ、彼女を祖神とした「万世一系の皇統譜」を作成(捏造?)したということである?!

持統を持ち上げ(唆し?)、持統・藤原体制(「百濟温祚系余氏」)の淵源性・正統性を、はるか古に遡って確立しようとしたということであるが、しかるに、この『日本書紀』の作為(嘘)ないしは構図については、「淡海三船」という人物(「天智系」の皇族→臣籍降下して、一文人となっていた!)の、歴代天皇への「漢風諡号(中国風の、死後の贈り名)」の賦与から、確かな?類推が出来るということでもある?!

それは、それこそ世間をあっと言わせるような仮説(珍説?)になるのかもしれないが、実は、彼(「淡海三船」)は、歴代天皇のうち、「神武」「崇神」「応神」、そして「神功皇后」という人物の漢風諡号に、いわゆる「神」という字を与えている(「記紀」掲載の全天皇の漢風諡号を一人で考案したということであるが、逆に、この4人にしか、「神」という字は与えていないということである!)!しかも、この「漢風諡号」の賦与は、あまり一般の人には知られていないと思われるが、「記紀」が編纂された、かなり後のことなのである(確か8世紀後半?)!

ということで、一方で、先に贈られていた「和風諡号」(○○天皇すめらみこと等)は、長い名(しかも難しい呼び名!)であるので、ほとんど使われなかったし、だから馴染みもない?ということにもなるだろうが、それはともかく、ここが重要であるが、この淡海三船という人物が、一人で(一度に?)、それぞれの天皇に名前を与えたということである!

ということは、そこには、彼なりの歴史(自国史)の受け止め方、総括の仕



方(哲学 or 主張?)が介在したのではないかということであり、各「漢風諡号」の意味と関係に、「記紀」の、ひいては我が国古代史の大きな枠組み(構図)が組み込まれているのではないかということである?!

○「高天原神話」に、「藤原氏」の役割(位置づけ→功績?)を忍ばせた!そして、そこに、現政権「百濟温祚系余氏」から見た「倭国」の歴史を綴った?!

ただし、そこで問題とするのは、その4人の名前(「神」)の関係性ということである!すなわち、その個々の熟語(諡号名)には、それ自体の意味(その人物の特徴等?)が込められてはいるのであろうが、その4人(の「神」)の関係性も、何らかの形(意図)で、同時に暗示されているのではないか?!そういうことである!

しかも、実在かどうかはともかく(ただし、それに仮構された人物は、絶対にいる!)、その個々の人物は、「記紀」の年代的には異なる時期の人物として描かれ(それ自体は事実?)、その関係性と言っても、単に、彼らが、ある重要な役割を果たした人物(天皇)であったため、死後、それを称える(あるいは畏れる?)

「神」という字が使われた?そして、最もその人物に相応しい熟語(意味)が賦与された?端的に、そういうことであったのではないかということではある?!

そこで、改めて何故、かの「淡海三船」が、全天皇の命名(漢風諡号)をしたのか?その辺の事情(動機等)は、まだよく分からないが、少なくとも、彼には、「記紀」(直接には『日本書紀』)の編纂方針やその過程がよく分かっており(史実も含めて?)、そこに示されている内容や人物の事績等を勘案して、表面的には(ツールとしては)漢籍等を利用し(彼は、かなりの文人であった!)、それぞれの天皇に、ある意味合いの諡号を与えた?!そう考えられるのである?!

そして、特に、その「神」を使用した4人の人物の関係性については、それ相当の意味のある熟語で示そうとした?!つまり、それらを見れば、彼らの歴史的役割(王権の創始者、継承者、新たな創始者?)が分かる?そういうことではなかったかということである?!したがって、その関係性は、実在の(仮構された?)人物や勢力の関係と見なすことができる?そういうことでもある?!

具体的には、それは、単純な時間軸ではなく、歴史(国史→『日本書紀』)編纂の基点が「応神」であって、その応神を祖神化(起点化)したものが「神武」、また、その両者に挟まって、「崇神」が、彼らを「崇める」、そして「神功(皇后)」が、「応神」の母(現政権の生みの親?)ということである?!

ちなみに、それは、おそらく「江南系」「伽耶・新羅系」「百濟系」の、それぞれの渡来集団のこと(王権?)と思われるが(ただし、淡海三船は、そのことまでは示唆していない?)、その詳細(真実?)は、残念ながら、現時点においては、首尾よく説明は出来ない?ただし、その「高天原神話」に、「藤原氏」の役割(位

置づけ→功績?)を忍ばせた!そして、そこに、現政権「百済温祚系余氏」から見た「倭国」の歴史を綴った?!そのことだけは、確かであろう!それにしても、実に壮大な舞台仕掛けであったわけである?!

### (3)その「構図」の背後にあるものは?

#### ○「陰陽(思想)」による、「歴史(史実)」の叙述?!

それともう一つ、ほとんど文脈は異なるが、改めて、そうした膨大な史実?の流れを、どのような観点で描くのか?言い換えれば、その「構図」の背後にあるものは何かということであるが、まさに、それは、記紀編纂側の大きな課題であったことは言うまでもない?!

しかるに、そこに採り入れられたのが、所謂「陰陽(思想)」による、「歴史(史実)」の叙述であろう?!ただし、その思想が、いつ、どのように我が国(倭国→日本)に入り込み、定着していったのかは、今の私には、よく分からない(もちろん、例の「陰陽道」が、「安倍晴明」らによって確立されていったということは了解している!)?!ただ、その思想(哲学)は、おそらく、例の「道教(神仙思想⇔風水思想)」と密接なつながりがあるとは見做される?!

しかも、その形が、具体的に、どこ(事績や建造物等)に、どのように採り入れられて(残って)いるのかは、少なからず分かるようではある!例えば、「伊勢神宮」の関係(内宮/外宮)や、そこにおける関係社殿の配置等である(坂本貴和子・渡辺英治『ロマンで古代史は読み解けない 科学者が結ぶ、地図と陰陽』 溪流社、2018年)!もちろん、平城京や平安京等の造都においても、然りである!

ということで、例えば「伊勢神宮」の具体については、上記書に委ねる他ないが、その思想(形)は、おそらく「記紀」のストーリー展開にも取り込まれているのではないか?それが、例の「高天原(系)」と「根の国(系)」の関係である?!前者は、「天(上)」であり、「善?」であるので「陽」?!後者は、「地(下)」であり、「悪?」であるので「陰」?!そういう構図となっているということである?!

すなわち、もし、そうであれば、「記紀」(の構想シナリオ)が、各地域・氏族の言い伝え等の集約・再構成であったとしても、その構想シナリオの根本(核)は、その新しい?「陰陽思想」から考え出されたものではないかということである?!したがって、「人代」はもちろんであるが、「神代」における逸話等も、そんなに古いものではなかった(創作された?)?そういうことではなかったかということでもある?!

いずれにしても、そうすれば、自分達の側の「善(陽)→正統性(正当性)」と、敗北者(陥れていった?)側の「悪(陰)→非正統性(正当性)」が、自動的に(摂理的に?)、しかも「好対照」に描けるということである?!まさに、これが、「記紀」(『日本書紀』)の作為の最たるものであったということである?!

ただし、その思惑は、枝葉の部分では、かなりの矛盾（破綻？）を来たすものとはなった?!

○その作為（嘘）に対して、反発した、反感をもった人達もいた！

とは言え、とにかく、「記紀」自体には、知られてはまずいもの、困る過去がある！それを払拭（糊塗）して、新たな皇統譜を創り上げようとした！しかも、それを、誰にも文句を言わせない！そういうことであるが、一方で、その作為（嘘）に対して、当然、反発した、反感をもった人達もいたわけである?!

すなわち、それを忌々しく思う者（氏族・勢力）もいたであろうし、他ならぬ「仲間（加担・同調者）」の中にも、「それだけは違う！」という者（言うなれば「面従腹背」の氏族・勢力？）もいたであろう?!「斎（忌）部氏」や「物部氏／尾張氏／海部氏」、そして、「和珥氏／多（太・富）氏」等がそれであるが、だからこそ、後に『古語拾遺』（忌部氏）や『先代旧事本紀』（物部氏系）、そして『意富氏家伝』（多（太・富）氏／和珥氏系？）等が編まれたのでもある?!

先に述べた「淡海三船」が、どのような立場であったのかどうかは、正直、かなり微妙ではあるが（一応は、政権の身内ではあったが、巖窟な人物でもあったらしい?）、実は、本体の『日本書紀』の、直接の執筆者（4人？）も、そうした一人（群？）であったようである?!

つまり、彼らは、立場上?、直接的には本当のことは書けなかった?しかし、記述の矛盾を示唆することによって（謎かけ?例えば、先述の「継体天皇」の薨去記事!）、そのことを示そうとした!歴史家（文人?）としての矜持か?それとも、何らかの抗議（恨み?）の意味か?残念ながら、そこまではわからない?!

○「秦氏」の介在?実は、それは、想像以上に大きい?!

さらに、これは、最近新たに抱き始めている、「秦氏」の介在（暗躍?）の事実?ということについてであるが、このことがうまく（正当に?）説明（解明）出来るならば、これまでの史実（定説・通説?）に、大きな修正（→真実?）を与えることになる?!と言うより、いくつかの、これまでの疑問が、ある意味大いに払拭できるということである?!

例えば、順不同ではあるが、全国に広がる「秦一族」（秦／羽田／波多／畑 等）、「豊前」（秦王国?）における蝟集、「宇佐神宮」を巡る「三輪氏→大神おおが氏」との確執?（秦氏の一族「辛島からしま氏」の存在）、「賀茂（直）氏」との友好関係（→「上賀茂神社」／「下鴨神社」）、そして、有力寺社の建立（太秦の「広隆寺」／「伏見稻荷大社」「松尾大社」等）、その氏寺「広隆寺」の怪?（「蘇我氏」または「聖徳太子」との関係を含む）、そして、「乙巳の変」（645年）への関与?（秦河勝）、さらにはまた、「ユダヤ教的要素」（神社の「神輿」、伊勢神宮への「ダビデ（籠目かごめ）紋」「16菊花紋」等の持ち込み?）等、数え上げれば切がないのである?!

ただし、彼らは、例の「乙巳の変」での後ろめたさ？もあって（時の正統な？権力者であった「蘇我入鹿」の弑逆？）、表（政治）の世界からは身を隠し、経済・文化の面で、大いに活躍（暗躍？）した（せざるを得なかった？）ということではある（←関裕二氏）?! そうであれば、ある意味、よく分かることである?!

### ○「邪馬台国（卑弥呼・台与）」の存在は無視できなかった！

ところで、ここで、とりわけ重要なことは、「邪馬台国（卑弥呼・台与）」は、後の「持統・藤原政権」にとっては、直接の祖先ではなかったということである！何故なら、もしそうであったならば、「記紀」において、そのことを、正々堂々と（正しく？）喧伝していたはずだからである（何せ、邪馬台国は、「親魏倭王」の国であった！ただし、逆に、そうであったから、つまり、隷属？していたから、名誉保持のために、そのことは記さなかったというような解釈？も、かつてはあったようでもあるが？←本居宣長？）?!

しかしながら、いずれにしても、後からも述べるとは思うが、卑弥呼・台与（『邪馬台国』）の存在については、「魏志倭人伝」に厳然と示されていたために、否定や無視は出来なかった（隠せなかった！）のであり、逆に、そのために、「神功皇后」という女傑？を虚構し、その存在（活躍？）には、最大限の配慮を示したのである?!

しかも、その「神功皇后」の事績とされていることは、「武内宿禰」（高良大明神？天日矛？住吉大神？）や「仲哀天皇」、そして、他ならぬ「応神天皇」と絡ませた史実の創作？であることは間違いないということでもある?! これらは、おそらく「息長氏」や「葛城諸族」のことを投影させているものと思われるが、まさに「記紀」の基点となっている「応神」の頃の状況の、苦心惨憺たる叙述であることは間違いないということである?! だから、矛盾や暈しも、色濃くなされているということである?!

### ○「邪馬台国」と「狗奴国」は、どちらも九州にあった?!

次に、ここでは、「『邪馬台国』と『狗奴国』は、どちらも九州にあった！」ということ付記しておきたい。これは、「魏志倭人伝」にある、両国が「北と南で接する！」という関係から、しかも、「狗古智彦→菊池彦？」という名の類縁性（同じ?!）から、「菊池秀夫氏」が推察・解明されているものであるが（←「背理法的証明」）、ある意味、見事であるとしか言いようがない?!

方位や名前との関係性だけではないかと、つまり、その間違いの可能性もあるのではないかと、反論される向きもあるかもしれないが、そのこと自体が間違っているという反証がない限り、このことは、真実として扱っていいのではないかと?!

そうなれば、まさに「邪馬台国」なるものは、決して近畿大和ではあり得ないのであり、そのことを踏まえた史実解明に向かうべきだということになる

(例えば「卑弥呼」や「台与」の所在!)?!ただし、別の勢力が、そこ(近畿大和)にいたことも間違いない!いわゆる、祭政都市「纏向」の存在である!

### ○大きくは、九州と近畿に、それぞれ倭人国家?が並立していた?!

こうして、大きくは、九州と近畿に、それぞれ倭人国家?が並立していたということになるが、例えば鉄の所有・支配?の問題等で、九州と近畿の抗争が出来し、最終的には、近畿の方が覇権を握った?!だが、その過程において(途中から!)、百済の王族(百済宗主家=沸流系余氏?→扶余・高句麗系であるが、母方は倭人系!)が、まずは九州に入り(藤→倭の五王時代?!→「大倭→倭国」)、やがて近畿にも進出し、倭国全体の覇者となった?!

そして、その後、その最終的な継承者?となった「藤原氏」が、倭国(倭国)皇統の正嫡?であった「物部氏」や「蘇我氏」を追い落とし、「魏志倭人伝」等に記されていた史実を活用(逆用?)して、自家に都合よく潤色・捏造し、「天照大神」(当時の「持統天皇」を昇華!)を祖とする「万世一系」の皇統譜を創り上げた?!そのような大きな枠組み(構図)が、そこにはあるということである?!

なお、一口に九州と言っても、北部・中部・南部があり(大まかではあるが!)、そしてまた、そこと、出雲や吉備(もちろん、播磨や河内も!)、そして、近江や大和あるいは東海・北陸の関係は、それこそ単純なものではなく、そこに、関係の勢力(氏族)の、まさに多種多彩に入り乱れた、勢力あるいは姻戚関係があったということである?!

### ○九州と出雲・近畿(大和・近江・越・東海)の関係、そこでの出雲と吉備、さらには近畿の関係をどのように解き明かしていくかが、我が国古代史解明の中核である?!

とは言え、大きくは、九州と出雲・近畿の関係、そしてまた、そこでの出雲と吉備、さらには近畿(大和・近江・越・東海)の関係、それらをどのように解き明かしていくかが、我が国古代史解明の中核であろうことは間違いない?!

ついでながら、大和(纏向)を、「魏志倭人伝」の「邪馬台国」とし、「箸墓古墳」を「卑弥呼」の墓とする、いわゆる「邪馬台国畿内説」であるが、そこには、「楼観や城柵(防御施設)がない」という(しかし、『魏志』にはある!これだけをもってしても、「邪馬台国畿内説」は成立しない?!)!しかも、この地は、3世紀初頭?に、突然に現れた、「政治と宗教に特化された人工都市」でもある!

そこで、「邪馬台国」が、「直接、東遷したのでもない!」「近畿にもない!」とすれば、改めてそれを、どのように受け止めればよいのか?!考えられるのは、二つの、別々な政治勢力の存在である?!そして、それらは、一部の九州勢力の移動や一部の近畿勢力の九州移動によって、いつの頃からか緊密に結びつくものとなり、その意味での「二朝並立状態」となった!そこに、百済の「檐魯制」が垣間見られるということでもある(ただし、それ自体は、例の「倭の五王」の時

からか?)?!

しかしながら、その「二朝並立状態」は、701年(「大宝律令」制定年)に解消され、「(九州)倭国+(近畿)日本国→(九州+近畿)日本国」となった?!そして、そのことを、「記紀」(「九州倭国」の末裔である?持統・藤原政権)は、「倭国=日本国」という形で、我が国の歴史とした(創り上げた?)?!そういうことでなかったか?!

末尾になるが、縄文と弥生の時代区分は、それなりにあるようであるが(近年は、弥生時代がかなり遡るようである!→紀元前10世紀頃まで?)、こと私の関心事は、「倭国→日本国」の建国史(古代史)であるので、その視野にあるのは、「倭(人 or 種)」(そんなに単純には括れないが?)が活発に動き出した2世紀頃から(→「倭国大乱」)、最終的な形が出来上がった?8世紀初頭頃までの建国状況であることは言うまでもない!

### 3. 「記紀」(国史)編纂のシナリオ?!

#### (1)基本的な枠組み(「神代」と「人代」の二重構造?)

##### ○「神代」の意味(示唆するもの?)?!

ということで、ここで、以上を受けて、改めて、言わば「編纂のシナリオ?」とも言うべき、「記紀」(事実上は『日本書紀』)の基本的な枠組みを確認(推測?)するとともに、そこにおける「神代」の意味(示唆するもの?)を捉え直して見ることとしたい!何故なら、そこに、「人代(人間の歴史)」とは違った、別の、何か特別な作為(目的)があるのではないかと思われるからである!

というのも、そもそも何故、「人代」に先行させて、わざわざ「神代」というものを設定する必要があったのか?穿った見方を敢えてすれば、「人代」だとて、例えば「あり得ない年齢」、「荒唐無稽な動きをする人物」が描かれ、まさしくそれは、「神(代)」のような扱いがなされているのではないか?!

そしてまた、単に、古い時代のことは分からないので、その部分は、まさに「神」、言い換えれば、人知(智)の及ばない何物(者?)かが、自らの祖国・祖先を創造したというような、特異な「始祖発生伝説」(民族伝承には、そうしたものがよくある!例えば、「鳥」、「卵」、「狼」、「熊」、「犬」とかである!それらは、「トーテム」と呼ばれる!)というものを、提示すればよかったのではないか?!

もちろん、そこには、そうしたものと関わる森羅万象を畏怖・崇拜する「アニミズム(自然・精霊崇拜)」の考え方が導入されてはいる?!そして、そこには、実の(生身の?)人間のあり様が、一面では、生き生きと映し出されているようにも思われる?!

しかも、一方では、生きた人間が、死後「神」とされ(→「祖霊神」あるいは「怨霊神」等)、篤く信仰の対象ともされるので、「人」と「神」の関係は、ある意味連続的なものとなってもよいが、「記紀神話」には、あまりにも明確なストーリー(人間関係)があり過ぎて(特に「伊弉諾」/「伊弉冉」神以降!）、それらが、単なる祖先からの言い伝え(の寄せ集め?)だけでは、到底説明出来ないものとなっていることも明らかなのである?!

すなわち、その「神話(神代)」は、単なる「創作話(お伽話 or ファンタジー?)」、あるいは「非科学的な空想話」ではなく、あくまでも史実に基づくものとしているのではないか?!何故なら、まったくの作り話では話にならないからでもあるが、そこに、何らかの(明らかな?)、現政権の正統性(正当性はともかく?)の淵源があったとするわけであるからである!

要するに、記紀編纂者達は、荒唐無稽で、神秘的な話として、言い換えれば、誰もが否定(反発?)出来ないような形で(結局はそういうことになる?)、「記紀神話(神代)」を創出し、彼らの「(創られた?)正統性・正当性?」を、その物語(「万世一系の皇統譜」)に託すことにしたということである?!特に、「高天原

神話」とは、そういうものであった?!

そして、そこでは、当時の関係氏族・勢力との関係、さらには、その関係氏族・勢力の言い伝えや言い分等が採用（取捨選択?）され、それらが、互いに都合よく再構成（借用?）された?そういうことでもあったのではないか?!そうでないと、あのような壮大な歴史物語?は創れない?!要は、最初から、ある一つの枠組み（構想イメージ）があったのではないかということである!そして、そのための題材（元ネタ?）が必要でもあった?!

だが、自分達（記紀編纂の主体側）には、直接、それがなかった!だから、話の元ネタは、すべて他からもってきた?あるいは、どこかの地域・氏族の書き物、言い伝え等を利用した（『風土記』は、そのための情報収集でもあった!）?!そしてまた、驚くなかれ?、『旧約聖書』（←景教/唐に伝わっていたネストリウス派キリスト教）も活用した（例の「聖徳太子」の別名とされている「厩戸皇子」の誕生逸話は、まさにそれである?!ちなみに、「伊弉諾/伊弉冉」は、「アダムとイブ」?）?!

その意味で、物凄い情報収集と創作意欲、そして文才?があったとも言えるわけであるが、利用できるものは、すべて利用した?そういうことでもある?!そしてまた、一方で、その利用（借用?）については、それらをもたらした氏族・勢力の意向（思惑?）も勘案した?例えば、「聖書」の活用（借用?）は、「秦氏」からのそれであった（秦氏は、ユダヤ系氏族の末裔だった?）?!

いずれにしても、「人代（神武以降）」はともかく、そうした「神話（神代）」に託されたものは、ある意味史実でもあったということである?!ただし、繰り返すように、それは、あくまでも都合のいい史実?の寄せ集めとも言えるものであり、全体としての史実?ではなかった!だから、そのすべてが真実だと思っただけとはいけない!しかし、その全てを否定してもいけない!まさに、そういうことになるわけである?!

したがって、例えば「天孫降臨」などは、その物語が事実（→科学的?）であるかどうかということよりも、そこに暗示されているものが何かという、その解説（裏読み?）の中身が問われるということにもなる!つまり、そうした解説（裏読み?）は、その「物語」が、どのような史実を投影しているのか?そこをきちっと突き止めているのかどうか?そこが問われるということである?!

○「記紀神話（神代）」は、「神武以降の史実（建国史?）」を俯瞰したもの?!

では、件の「記紀神話（神代）」は、端的に、「神武以降の史実（建国史?）」を俯瞰したものということになるのではないか?もちろん、それが、BC660年（神武即位年）頃というのは嘘になるが、2世紀末の「倭国大乱」後、おそらく3世紀後半頃?からの史実（「纏向祭政都市」の出現）をデフォルメ?したものである?!

というのも、自国の歴史を古く見せるために、しかも、神秘（威?）的な国



とするために、可能な限りの情報（ネタ？）を集め、それらを再構成したということであるが、そこには、大きなモチーフ（動機・目的）があった?!つまり、それを、知り得ている神武以降の史実叙述（「人代」）の展開シナリオ（構想枠組み）とするということである?!

そうすれば、神武以降の「人代」の記事が書きやすくなるし、そもそも自らが欲する歴史を創り出すことが出来る（史実と創作を混淆させられる?）?!その意味で、「神代」と「人代」は二重の関係、つまり、構成上は「時間的な前後関係」、しかし、実際上は「同時進行関係」であるということである?!

これまでは、一応「神話は神話、歴史は歴史!」というように、双方はほとんど（全く?）別の位相で捉えられてきたわけであるが、両者の関係が、まさしくそういうものであれば、ある意味ブレない?建国史が描ける?!とにかく、部分部分では、辻褄が合わないところ（不整合?荒唐無稽?）があったとしても、全体としてみれば、ある一つの大きなストーリー（流れ、着弾地）が描ける?!

要は、そのための展開シナリオ（構想枠組み）があったからだということである?!そして、多分?例の「淡海三船」は、そうした事情（からくり?）を知っていた?だからこそ、「神」の使用も、うまく出来た?!そういうことでもある?!しかし、そうなると、これはまた、大変な発見（天変驚地?）となる?!

○そこにある?「北方系の太陽信仰」（アルタイ系遊牧民文化的要素?→「天孫降臨」）と「南方系の海神信仰」（倭人系海洋民族的要素?→「海幸山幸」）?!

ところで、その「神代と人代の二重構造」の中で炙り出されてくるのが、いわゆる「北方系の要素」と「南方系の要素」である?!例えば、「天孫降臨」の話は、「北方系の太陽信仰」（アルタイ系遊牧民文化的要素?）、「海幸山幸」の話は、「南方系の海神信仰」（倭人系海洋民族的要素?）に関わる説話である?!したがって、「記紀」の解釈方法?の一つとして、その双方が、どのような氏族（勢力）によってもたらされたものか?その要素（物語）の所有者（発信者?）を辿っていけば、その氏族（勢力）が、どこからのそれか分かるのではないか?!

具体的には、まだまだ類推の域を出ないが、前者は、「伽耶」（「新羅」を含む?）あるいは「扶余／百済系」、後者は、「安曇族」（福岡県志賀島の「志賀海神社」を本拠地とする!）あるいは「鴨（賀茂）族」（古代日向地方?）のそれだったのである?したがって、たとえ両者が、いわゆる「渡来系倭人」であっても、前者が「北方系」、後者が「南方系」ということである?!

もちろん、そう単純には言えないのかもしれないが、例えば、「鴨（賀茂）族」の頭領?「建角身命たけつぬみのみこと」が「神武」のモデルであり（これは、断定はできないが?）、彼らの勢力が、「日向（襲）」から「吉備」を経由して、近畿・大和に進出（移住?）していった?!そして、その手助け者（仲間?）が、瀬戸内海の航海民（海人族）であった「塩土翁（珍彦）→倭直氏→海部氏」であった（「神

武東征」の元ネタ?)?!

そして、多分?その手助け者(「塩土翁(珍彦)→倭直氏→海部氏)らは、「大山積命」(愛媛県大三島→「大山祇神社」)を祭神とする勢力でもあった?!それも含めて、そうした「海人族」は、早くから北陸・東海・関東近辺にも進出していて、静岡県の「三島大社」にも、同じような根拠地を有している?!ちなみに、そういう中で、「安曇族」は、「安曇<sup>あづみ or あつみ or あど</sup>」とか「志賀<sup>しが or しか</sup>」、あるいは「那珂<sup>なか or なが</sup>」というような地名を各地に残していると考えられるが、それらは、そうした航海民(海人族)の移動・活動の痕跡?と言える?!

おそらく、彼らは、随分と早くから(弥生前期から?)、黒潮に乗って関東地方にまでも進出していたわけであるが(→神津島の「黒曜石」の採取・分配!)、大きくは、鉱物資源(黒曜石、丹生/朱丹、銅、そして鉄?)を求めた人々(「山地民」と、それらを運ぶ「交易民」(「海人族」)が、大きなネットワークをつくりながら、別の南方系倭人(先住農耕民→環濠集落勢力→銅鐸・巴形銅器勢力?)と、ある時は協力、ある時は衝突を繰り返しながら、勢力(影響力)を拡大していった?!

その一つの大きなエポック(画期的事件)が、いわゆる「倭国大乱」(2世紀末)ということであろう?!だから、その「倭国大乱」のことが、もう少し詳しく分からなければいけないのであるが、「卑弥呼・邪馬台国所在地論争」だけでは、ある意味?何も進んでいかないということでもある?!

### ○「(出雲の)国譲り」と「天孫降臨」が示すもの?!

次に、「記紀」における神話(作成)において、一番の大きな課題(テーマ)は、改めて「(出雲の)国譲り」と「天孫降臨」であったと思われるが、それは、ある意味で言えば、表裏一体(同時進行?)としての、「高皇産霊神/天照大神(側)」と「神皇産霊神/素戔嗚命(側)」の関係の叙述ということになる?!

前者が「高天原(天津神/天神)系」、後者が「根の国(国津神/地祇)系」ということであるが、要は、我が国の建国は、「高天原(天津神/天神)→大和系」(勢力)が「根の国(国津神/地祇)→出雲系」(勢力)に国譲りをさせ、成し遂げられたものであるという「大きな枠組み(イメージ→共同幻想?)」が、そこに示されているということである!そして、それが、ここで言う「二重構造」の土台となっているということでもある?!

ちなみに、それは、「上山春平」という人が指摘されていたということであるが、その予定調和的な流れ、着弾(「記紀」の思惑?)はともかく、我が国の建国は、その「高天原/大和系」の勢力が、「根の国/出雲系」の勢力に「国譲り」をさせて(屈服させて→乗っ取り?)実現したものである?!そして、それが、直接的には、前者が「持統・藤原政権」であり、後者が「蘇我・物部政権」であるということであろうが、その具体については、まだまだ正確

には描けないということでもある?!

つまり、最終的には、前者が後者を退けて、政権（王権）を勝ち取ったことは間違いないと思われるが、その政権勢力が、直前の、言わば「百済系」同士のそれなのか、それとも、3世紀以降の、「江南系」あるいは、その後の「伽耶・新羅系」との関係をも含むものであるのかは、簡単には同定できない?!そして、同じ系であっても、途中から、利害／婚姻関係等によって、それらが、分裂、あるいは離合集散を繰り返したのかもしれない（例えば、「尾張氏」や「賀茂族（氏）」は、その最たるもの?）?!そういうことである?!

とは言え、その「高天原／大和系」が、どういう勢力・氏族を表しているのかはともかくとして、もう一方の「根の国／出雲系」は、「持統・藤原政権」が、かの「高天原（系）」と称した氏族・勢力よりも、先に?いたのである（地理上の「出雲（島根県）」だけでなく、他ならぬ近畿大和にも、「出雲（系）」はいたのである→「大物主」勢力→三輪山をご神体とした「三輪勢力」!）?!

すなわち、「出雲（系）」が先にいたから?、「（出雲の）国譲り」というものも実現したわけではあるので、時間的な関係で言えば、その辺りから突っ込んでいけるのであるが、これについては、現在、その「高天原／大和系」とされる氏族・勢力は、本流的には?「吉備（龍王／太陽信仰勢力?）」であり、例の「纏向遺跡」は、彼らを中心に出来上がったものと考えられはする（←藤井耕一郎氏）?!

そこで、もし、そうであれば、件の「高天原神話」は、直接には、「吉備と出雲」（中国地方）の地で繰り広げられた史実を投影させているもので、その後の物語は、その双方の関係が、近畿大和（以東を含む!）でも繰り広げられたものとも言える（もちろん、そのモチーフは、さらに以前の、例えば、彼らの、韓半島南半部における確執と関係があるのかもしれない?←「馬韓（百済）」と「辰韓（辰王国）」の関係）?!

### ○改めて、「国譲り&天孫降臨」とは何だったのか?

ということで、「記紀」の大きな枠組みは、持統・藤原政権が目論んだ、自らの「正統性」「正当性?」を暗喩すべく創作した「国譲り&天孫降臨」のストーリーであったということであるが、改めてそれを、どのような史実として、いかに繙いていくかなのである?!いろんな構想（着弾地）があり得た中で、そのような舞台仕掛けを考えたということは、我が国の建国史が、まさにそのような構図で描ける（描きたかった?）ということである?!

そして、おそらく、その元ネタには、南方系の「海幸山幸」の説話（したがって、それは、「安曇族」「鴨族」のもの?おそらく後者か?）が借用されているように思われるが、それは、一方で、丹波（丹後）の「海人族（海部氏）」の来し方（盛衰?）を投影させているのではないかと考えられる?!

すなわち、丹後半島に伝わる「浦島太郎伝説」や「羽衣伝説」なんかも（ただし、それは、全国各地に伝わっていった？）、実は、そういう関わりで見られるようにも思われるのであるが、話の元ネタ？は、そういうところにあったのではないか?!そういうことである?!

例えば、「海部氏」は、「神武東征（→大和政権）」に力を貸し（参画し）、大和に進出し、その後丹波（丹後）に出て、「日本海ルート」を確立して主導権を握ったが、最終的には、「天孫降臨族（→持統・藤原政権?）」に干されて（用なしにされて?）しまった?!つまり、もう一つの勢力、すなわち「瀬戸内海ルート」の勢力の方が、そのイニシアティブを奪った?ということである?!

これは、例の「関裕二」という人の説を援用したものであるが（他の人も言っている?）、多分、我が国の建国史（倭国→日本国）は、その二つの勢力の離合集散、あるいはその二つのルートを巡る争い?の歴史でもあったということである?!

**○ただし、大和建国は、「北部九州」の情勢と密接に関係している!**

しかしながら、もし、そういうことであれば、近畿大和における「政治勢力」の結集（大和王権）、それに関わった関係氏族・勢力の離合集散だけで、「記紀」の大枠を示せばよかったのに、そこに「九州（←天孫降臨）」が絡んだり、「出雲（国譲り）」が絡んだりするのは、一体どうしてなのか?

やはり、それは史実であったからであり、それを抜きにしては、「記紀」の真实性（信頼性?）がなくなるからだと思われるが、とにかく、自分達（現政権）は、そうした史実全体の上に立った存在である!だから、そこは外せなかった?!つまり、自ら（の氏族・勢力）は、「九州」や「吉備／出雲」から（経由して?）、現在を迎えている!そういうことであつたのではないか?!

したがって、そうなれば、彼らの祖先は、最初は「九州」にいたということになるが（「いた」というよりは、まずは、そこに居住（移住・進出?）していた?）、その後「吉備／出雲」、そして、「近畿・大和」に移動していった?!もちろん、それは、最初は列島外から、つまり、中国大陸や朝鮮半島からということになるが、ここでの話とすれば、彼らは、ほとんどは朝鮮半島、なかでも南部（旧伽耶地域）からということである?!

ただし、最終的な氏族・勢力は、おそらく「百濟」、あるいは「百濟系」の人々であつたということであるので、そうなると、そうしたことも含めた一連の史実?を暈す（暗喩する?）ための物語（舞台装置）が、まさに「（出雲の）国譲り」や「天孫降臨」の話ということになる?!

そして、自らの出身（地）が言えない（言いたくない?→知られるとまずい?）?そういうことでもあつたであろうが、もう一つは、それ（建国）を神秘（威?）的、したがって、高貴なものにしたかった?!そういうことでもあつたのではな

いかということである?!

## (2)「二重構造」の意味とその関係(からくり?)

### ○「神八井耳命／多お氏」、そして、「武内宿禰」系氏族の存在

ところで、そうした史実の経緯を、「記紀」は、その創作の骨組み(シナリオ)としたということになるが、そこにおける「神代」と「人代」の意味と関係は、改めて、どのようなものになるのか?そして、その中で、「素戔嗚命(出雲系?)」と「武内宿禰系(葛城諸族?)」との関係性は、どうなるのか?双方共に、「敗者?」の象徴であることは、ある意味明らかであるが、ひょっとしたら?、「素戔嗚命」と「武内宿禰系」(紀/木氏・蘇我氏等)は、二重写しになっているのではないか?!

そこで、まず考えられるのが、「神武」とその子達(「神八井耳<sup>かむやいみみ</sup>命」と「神沼河耳<sup>かむぬなかわみみ</sup>命)の関係(広がり?)である?!特に、「多氏」の祖とされる「神八井耳命」の存在が気になってくる!つまり、「神八井耳命」と「神沼河耳命」は、神武の、近畿大和での嫡子(「事代主神」と「三嶋溝楯耳<sup>みぞくいみ</sup>」の娘の「玉櫛<sup>たまぐし</sup>媛」との間に生まれた「媛蹈躰五十鈴媛<sup>ひめたたらいすずひめ</sup>命」との間の子)とされるわけであるが、前者が兄、後者が弟とされている(「東征」に同行した、日向?での先妻の子もいるが!→「多研耳<sup>たぎしみみ</sup>命」等)!

しかしながら、何故か?、皇位(2代目)は、弟の神沼河耳命が継承し(→綏靖<sup>すいぜい</sup>天皇)、兄の神八井耳命は、皇位継承はせず、弟を下支えする役割を担ったとされる(尤も、義兄多研耳命の野望を兄弟で阻止しようとしたが、兄の神八井耳命は、最後には怖気づいてしまって、皇位を、弟の神沼河耳命に譲ったということらしいが?)?!

それはともかく、ここでの最大の?疑問(謎?)は、兄の神八井耳命の方が、初期大和王権?の正当な後継者?ではなかったのかということである(「末子相続」という見方も成り立つが、その当時、血脈で引き継がれる「天皇」というような存在や位置づけはなかったのであり、しかもそうした兄弟関係は、「神武天皇」の実在も含めて、後からの造作であったと考えられる?!ちなみに、「末子相続」は、モンゴル系の「扶余」、あるいはその流れにある高句麗・百済系の社会にはあったらしい?)?!

何か、そこには知られてはまずい、別の史実?が隠されているのではないかということである?!例えば、その兄弟に擬せられた二つの部族・勢力があり、一方の部族・勢力が、もう一方の部族・勢力に排斥された(主導権争いに負けた?)ということである?!

すなわち、もともと同じ勢力・部族であった神八井耳命と神沼河耳命の(に昇華されている?)、それぞれの部族・勢力が、何らかの理由で背反?し、いわゆる「初期大和王権」(の主流)となっていた神沼河耳命の部族・勢力(系統)

に、神八井耳命の部族・勢力（系統）が排斥されていった？事実が、そこには投影されているのではないかということである？！

ただし、神八井耳命にしろ、神沼河耳命にしろ、彼ら（の部族・勢力）は、神武（九州南部？勢力→鴨族？）と出雲（の一部勢力？）との婚姻（同盟）関係で生まれた御子とされているわけであり、彼らの部族・勢力（系統）が、最初の大和王権の中核であったことが、そこには示されているわけではある？！事代主神と三嶋溝槪耳（大山祇<sup>おおやまつみ</sup>？）の関係は、まだよく整理がつかないが、事代主神は、「大国主神」（出雲神→大国／大黒様）の子神（→恵比寿神）で、奈良葛城地方の地主神ともされている？！

したがって、彼が、三嶋溝槪耳の娘の玉櫛媛と結ばれているということは（これが、例の日向三代の神話、とりわけ「ヒコホホデミ（山幸彦）」と「豊玉姫」の婚姻話に投影されている？！）、それは、例の、吉備から近畿・大和に進出、集結した前方後方墳勢力（河内・近江・山城回り→淀川水系）と前方後円墳勢力（河内・生駒回り→大和川水系）の関係を指しているのではないかということである（これは、葛城勢力と瀬戸内海勢力が協力関係にあったことを意味する？！）？！

だが、そのことは、ここではひとまず置いておくこととして、ここでの追究の矛先は、かの「神八井耳命」が「多<sup>おお</sup>（or 大・太・意富等）氏」の先祖とされ、一方でまた、「阿蘇の君」、「肥（火）の君」、「大分の君」、さらには「筑紫の君」等の、多くの九州の豪族？達も、彼（神八井耳命）の後裔とされている？ということについてである！

つまり、彼ら（少なくとも後者）は、もともと在地（九州）の豪族という可能性もあるが、近畿・大和から移動してきた、「多氏」系の部族・勢力だと捉えれば（だが、もともとは？彼らの先祖も九州に居て、吉備・出雲？を経由して、近畿・大和に移動していたとも考えられる？！）、ある時期から、九州に移り住んだ（故地に戻った？ある意味出戻り？の）部族・勢力ということになる？！

もし、そうであれば、何故、そして、いつ、どのように、彼らは、九州に移動した（戻った？）のか？！そうしたことが問題（謎？）となるわけであるが、そこで思い出されるのが、今や定説ともなっている？、ある時期（3世紀後半？）、近畿（近江？）から九州へ（東から西へ）の文物の移動の事実である！それは、3世紀前後、いわゆる「大和（纏向）」に集結した「前方後方墳（→前方後円墳）勢力」（吉備から、おそらく出雲を巻き込んで？、河内・近江に進出してきた勢力＝「手焙形土器」/火・日神信仰勢力）の一派が、その後、（逆に？）九州地方にも流れ込んだ？！

そして、彼らが、例の「吉野ヶ里勢力（環濠集落・銅鐸勢力）」等を滅ぼした（駆逐した）ことが考えられるが（その痕跡は、間違いなくあるとされる？！そして、それが、いわゆる「（九州での？）倭国大乱」でもある？！）、そのことを、実は、「神

八井耳命」(九州に向かった後裔達?)の事績として、「記紀」は示しているのではないかということである?!

もちろん、このことは、私の、まったくのオリジナルではない(以前紹介した「斎藤忠氏」や「藤井耕一郎氏」の所論からである!)!とにかく、これまで把握してきた結果から推察すると、やはりその方がすんなりと理解が進むし、その後の「倭国の二極体制 or 構造」(九州倭国と近畿倭国→日本国)の淵源が分かるということでもある?!

それは、例えば、「記紀」によれば、紀元前 660 年頃(「讖緯説→辛酉革命説」による!)に、南九州(日向?)から、宇佐・岡(遠賀)・安芸・吉備を経て、その後、(摂津・)河内・熊野から大和(橿原)に進出した神武(一行)であるが(その後、当地の出雲族や賀茂族との婚姻・融合関係が示されている!)、その物語は、時代考証や、事実それ自体の信憑性等、多くの問題点を抱えてはいるが、ある大きな事実(「倭国大乱」?)を基にした、我が国建国譚の創出の当然の成り行きであったのではないか(倭国は九州より始まり、近畿へ移動した!そしてまた、一部は九州へ回帰した?!)?!

要は、繰り返しになるが、最終的には、百濟王族(沸流系余氏→温祚系余氏→仇台系余/牟氏)の渡来・定着、そして、彼らの、(邪馬台国以降の)倭国(→日本国)参入で、それ以前の倭人国家(半島南部を含んだ九州倭国)の実情(倭国大乱→邪馬台国の出現・没落?→その後の二朝並立?)が、上記のことを踏まえると、さらに矛盾なく?捉えられるということである?!

そして、そこ(「神八井耳命」の扱いの違い)から、いわゆる「記紀」の相違、あるいは依って立つところの相違(『古事記』は多→太氏によるもの!)も、改めて分かってくるのではないかということである?!とりわけ、件の邪馬台国の、その後の消息がはっきりとしないということも(中国史書に載らない!「記紀」も、直接的には、そのことは触れていない!)、これによって説明されるのではないかということでもある?!

ただし、ここで留意しておきたいのは、例の「卑弥呼」の死後、男王が立ったが、国中が服さず、内紛?となり、そこで再び、卑弥呼の宗女である「台与(13歳)」が共立され、その内紛?は収まったということであるが、「宗女」とは縁戚関係であるので(姪?)、多分その争いは、卑弥呼の縁戚勢力と男王勢力との、言わば内輪揉めであったのではないか?!

もし、そうであれば、その卑弥呼の縁戚勢力と男王勢力は、それぞれどういう勢力であったのか?!最初に男王(勢力)が立ったのであるから、その勢力は、多分、邪馬台国連合内部の勢力(「男弟」勢力?つまり、卑弥呼の右腕、ひょっとしたら実質的な王?であった「難升米」の勢力であったかもしれない?!)であり、それに異を唱えたのは、卑弥呼の、邪馬台国連合外部の縁戚関係であったのかも

しれない?!

したがって、その後者の勢力は、おそらくは、邪馬台国内部にはいなくて、どこからか移動してきて、その政変に干渉した（直接影響を及ぼした）勢力と考えられないか？

### ○気になるのが、日田勢力や、阿蘇氏の祖？とされる「健磐龍<sup>たけいわたつ</sup>命」の九州進出?!

ということで、ここで思い出されるのが、大分県日田市の「小迫辻原遺跡」である！その遺跡は、日田市の北部高台にあり、そこには3世紀前後の環濠居館跡があり（遺跡そのものは、旧石器時代から古墳時代前期まで続いているということである！）、そこには、近畿や出雲の土器等が埋もれていたという！

そして、この日田は、実は筑後川の上流にあり、九州（筑紫平野→邪馬台国？）を攻めるには絶好の立地の場所であり、その遺跡と、そこに通ずる（山国川を介した）東の玄関口？宇佐・中津の関わりも大いにあるということである！邪馬台国が消えた？後は、その居館跡はなくなり（自主的に壊された形跡あり？）、その役割を終えた場所ともされている（←関裕二氏）?!

そこで、もし、そうなると、かの宗女「台与」は、何らかの形で、その日田勢力（近畿・出雲の出先勢力？）とつながりがあったとも考えられる?。「難升米」が旧倭国（「帥升王」系統？）勢力の代表（ひょっとすると「一大率」？）、そして、「卑弥呼」が、かの「吉野ヶ里」（名前の同定はできないが、「魏志倭人伝」に示された30余国の一つであったことは間違いない！）等を攻めた「手焙形土器・前方後方墳勢力」、つまり「和珥<sup>わに</sup>に族」、その一派の多氏（の先祖）の縁戚者だったのではないか?!そして、それが、実は、邪馬台国連合の盟主となっていたということでもある（だから、「倭国大乱」後に、邪馬台国の女王となった?）?!

これについては、先に述べたように、3世紀後半頃、例の「吉野ヶ里」が、手焙形土器勢力、すなわち前方後方墳勢力に滅ぼされたということであれば、その盟主国「邪馬台国」も、その勢力によって滅ぼされたか、あるいは、その政権中枢が、その勢力（手焙形土器／前方後方墳勢力）の意のままになった?そういうことではなかったか?!そして、その勢力の意が、宗女「台与」の女王推戴であったのではないか?!そのようにも、考えることができるのである?!

だとすれば、その「卑弥呼」自体も、その勢力（手焙形土器／前方後方墳勢力）と何らかの関係があったことになる?!多分、それが、例の「天照大神」と「素戔嗚命」との関係示唆（「誓約<sup>うけひ</sup>」→婚姻関係?）でもあろう?!

ただし、ここでの問題は、先に挙げたように、その後の九州における、「阿蘇の君」「肥（火）の君」「大分の君」「筑紫の君」等の、多くの在地豪族？達が、「多氏」の祖とされる「神八井耳命」の後裔とされているということについてである（確かに、彼らは、九州各地に、その根拠地を有している!）?!



そこで、これに関係して、もう一つ気になるのが、特に「阿蘇氏」の祖？とされる「健磐龍<sup>たけいわたつ</sup>命」のことである！彼は、「阿蘇神社」（肥後国一宮）が奉斎する阿蘇山の神としての性格を持つが、他ならぬ「神八井耳命」の子と伝えられているのである！

すなわち、阿蘇地方では、この健磐龍命に関する伝承が色濃くあり、健磐龍命は、祖父の「神武天皇」の命をうけて阿蘇山へ至り、外輪山の上から目の前に広がる湖を眺め、その広大さに感心して、水をなくして田畑を造ろうと考えた。そこで、外輪山の一部を蹴破ろうとしたが、一度目に挑戦したところは、なかなか蹴破れなかったという（→阿蘇地方の開拓者？）？！

そして、一方では、彼を主祭神とする「阿蘇神社」のある阿蘇地方は、「高千穂神社」のある高千穂地方とも深い結びつきがあるようであり、それらが、ここで言う「神八井耳命」や、その後裔である「多氏」や、「阿蘇の君」「肥（火）の君」「大分の君」「筑紫の君」等の、多くの九州の豪族？達とも関連があるようなものでもある？！

○ 二つの「高千穂」?!それは、何を意味するのか?!放ってはおけない?本当の歴史?!どうにもすっきりしない併記状態?!その追究は、やはり意味はないのか?!否、そんなことはない?!

そこで、これもまた、以前から気になっていたことであるが、いわゆる「天孫降臨」の地が「高千穂（峰）」と呼ばれるところであり、その「高千穂（峰）」の地が、実際に（不思議にも?）、九州の2ヶ所にあるということについてである！一つは、九州山地の中央部?、宮崎県西臼杵郡「高千穂町」、もう一つは、宮崎県と鹿児島県境の、霧島山系の一つ「高千穂峰」である！

どちらも、それなりの雰囲気を持ち、まさに神々の降臨地に相応しい趣きと舞台装置?をもっているようであるが（そのように加工・脚色されている?）、そもそも何故、そのような事態を招いているのかということである?!「降臨」自体の事実はともあれ（現実にはあり得ない!）、その伝承地（地名と共に）が二つあるということは、誠に奇妙な?状況であることは言うまでもないのである?!

とにかく、現実に（今現在）、そのように認知（喧伝?）され、その双方の地が、それ（降臨地）と言われ続けることは、神話や伝承の贈り物?としては、それはそれでよいのであるが、冷静に捉えれば、科学的（物理的）にはまったくあり得ない現象（「天孫降臨」）が、誰か（ある部族・勢力）によって創られ、語り継がれ、そしてそれが、具体的な、どこかの地に比定されているのである！

双方の「高千穂」の言い分?はともかく（何か滑稽な感じもするが）、何故、そのようになっているのかという疑問（謎?）は、やはり解明されてしかるべきものと言える?!それは、紛れもなく、人々（ある部族・勢力）の動きや、彼らが作りだした人間（部族・勢力）関係を示すものであり、その意味で、それらが織

り成した具体的な（本当の？）史実？を、現実に指し示しているということだからである？！

だが、もちろん今では、そうした史実？を、科学（学問）的には、容易に実証できないということではあるが、他に様々な要素・思惑等も絡み合い、どちらを真の降臨地にするのかということとは、タブーというよりは、その積極的な意義・メリットはないということではある（観光地という点では、まさにそうである！）？！

しかも、私はここで、どちらが、本当？の「高千穂（峰）」であるのかという決定をしようとしている訳ではない！神話や地域伝承等は、それはそれでよいし、別な意味で意義もあり、興味もある！また、ある種のロマンを感じさせるものでもある！

単純に言えば、どちらの「高千穂（峰）」も、事実としてはそうでなくても（神話・伝承として創作されたものであっても！）、まったく、それはそれでよいのであるが、要は、何故そこに、そのような伝承や、それに関わる事物（神社等）があるかなのである！

ちなみに、これについては、後の、当地の勢力（氏族）が、「記紀」が示す自らの祖先の事績（伝承）を、当地にもってきたものとも考えられる！具体的には、その勢力（氏族）としては、東北部九州から移動してきた、宇佐の「大神おおが氏」と「秦氏（後に「惟宗これむね氏）」の、意地の張り合い？というようなことが関係しているかもしれない？！

すなわち、前者が「高千穂氏」（「大神氏」の一族）で、後者が「辛島氏」（「秦氏」と一線を画す、同じ新羅系の同族氏族！）である！両者は、「宇佐神宮（八幡宮）」の主導権（官司職／禰宜職）争いを演じ、結果的には、後者の、「霧島」に移動させられた？「辛島氏（の一派）」が苦汁を飲まされたということらしい？！なお、後の「島津氏」は、その「秦氏（惟宗氏）」の後裔（の一つ）であり、宇佐神宮（大神氏）への異議申し立ては、彼らの「鹿児島神宮」の正統主張（正八幡宮）と、多分？つながっていると考えられる？！

もし、そうであれば、少なくとも、「二つの高千穂」の理由は、容易に受け入れられるものとなる？！しかも、その「記紀」の記載部分（伝承）が、ひよっとしたら、その「秦氏」のものであったかもしれない（彼らの事績や伝承等が、そこに採り入れられている！）？！

否、「記紀」の編纂全体は、絶対に「秦氏」が関与している！しかし、それが前面には出されていない？！だから、「秦氏」の一族としての「辛島氏」が、「正統」としての意地を見せた（つまり、「三輪みわ→大神おおみわ→大神おおが氏」には、大きな顔をされたくない？）？！そう思えてならない（不思議な？「鹿児島神宮」の「正八幡」としての名乗りは、そこに淵源がある？）？！

## ○一つの鍵を握る！「阿蘇神社」（「健磐龍<sup>たけいわたつ</sup>命」）と「高千穂神社」（「三毛入野<sup>みけいりぬ</sup>命」）の伝承・事物！

ということで、改めて、一体何故、そうした伝承や事物が、九州の中南部にあるのかである！例えば、宮崎県の高千穂町は、先に述べた阿蘇氏の祖？とされる「健磐龍<sup>たけいわたつ</sup>命（阿蘇都彦<sup>あそつひこ</sup>命）」とその妃神、あるいは、その伯父とのつながりがあるようである？！

そこで、改めて、「健磐龍命」は、肥後国一宮の阿蘇神社の主祭神であるが、その神は、他ならぬ神武（磐余彦）の、（東征後の）大和での長子「神八井耳命」の子と伝えられているわけである！そして、この健磐龍命の子に、「建稲背命」「速瓶玉<sup>はやみかたま</sup>命（国造大神）」「八井耳玉命（甲佐明神）」がいるらしいが、これらの神は、すべて阿蘇地方の神とされている！ただし、直接の「阿蘇氏」の祖は、「速瓶玉命（国造大神）」ということではあるらしい？！

そして、一方で（後に？）、神八井耳命の4世孫で、科野（長野県）の国造の祖となったとされる「武五百建<sup>たけいおたて</sup>命」という人物がいるらしいが（→「健磐龍命」と音が似ている？）、彼は、「崇神天皇」の時（4世紀前後？）に阿蘇国造に任命され、子に阿蘇氏の祖となった「速瓶玉命」と、信濃の「金刺氏」の祖となった「建稲背命」がおり、彼は、「科野大宮社」を創建したとも伝わるらしい？！

これは、「阿蘇」（そして「高千穂」も?!）と「科野（信濃）」の関係を示すものであることは、言うまでもない?!そして、それが、例の「天岩戸神話」で、「手力雄命」が、天照大神（卑弥呼 or 台与？）を窟から引っ張り出した際に、その扉（岩）が、信濃の戸隠平にまで飛んで行ったとされる話ともつながっている?!

さらに、その「武五百建命」は、「神倭伊波礼毘古命の皇子・神八井耳命の3世孫の敷桁彦命の子で、兄弟に武恵賀前命と、火国造の祖となった建緒組命がいる」という話や、彼の后が、「建御名方神の子・出早雄命と、洩矢<sup>もりや</sup>神の娘・多満留比売命の子孫である会知早男命の娘・阿蘇比売命で、子は、阿蘇氏の祖・速瓶玉命と金刺氏の祖建稲背命とされている」という伝承もあるようである？！

そしてまた、「健磐龍命神」の妃神・阿蘇都比<sup>（口偏に羊）</sup>命は、その阿蘇地方を支配していた「草部吉見<sup>くさかべよしみ</sup>神」の娘とされ、現在、その奥地の「草部吉見神社」は、日向国と阿蘇地方の境に位置し、またそこは、豊後へと抜ける交通の要衝でもあった。

その草部吉見神社の社伝によれば、「神武の皇子・彦八井耳命（国龍命・吉見神）は、日向国から川走谷の窟（当地）に居を定めた。そこに、神武の孫の健磐龍命が、肥後国を治めるようにとの勅命で下向し、彦八井耳命の娘を妃にして、宮地（阿蘇）に移った」という。

「神八井耳」と「彦八井耳」の関係が紛らわしいが（上記のように、別人であれば、健磐龍命と彦八井耳命の娘は従妹関係?!）、阿蘇氏は、日向から阿蘇に進出したことになる?!そして、阿蘇から、肥（火）国全体に広がっていった?!要は、神八井耳命の一族（多氏の一派?）は、日向から阿蘇、大分方面に進出していったということである?!

一方、その日向国から見て手前の「高千穂神社」であるが、主祭神が、一之御殿の「高千穂皇神たかちほすめがみ」と二之御殿の「十社大明神」で、高千穂皇神は、「記紀」神話の「日向三代」である皇祖神とその配偶神（天津彦火瓊瓊杵尊と木花開耶姫命、彦火火出見尊と豊玉姫命、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊と玉依姫命）の総称で、十社大明神は、神武天皇の兄・三毛入野命みけぬのみことと、その妻子神9柱（妃神である鶺目姫うのめひめ命、両神の子神である御子太郎みこたろう命、二郎じろう命、三郎さぶろう命、畝見うねみ命、照野てるの命、大戸おおと命、霊社れいしゃ命、浅良部あさらべ命）の総称とされている。

随分と欲張りな？祭神の顔ぶれであるが、とにかく「高千穂（神社）」は、神武の兄「三毛入野命」の出身地ないしは所縁の地であったことはまちがいない?!そしてまた、三毛入野命（高千穂）は、健磐龍命（阿蘇）の祖父（神武）の兄、父・神八井耳命の伯父であったということでもある?!

ただし、その、十社大明神の中心である三毛入野命は、「記紀」には、例の「神武東征」中、浪穂を踏んで常世国に渡った（死んだ?）とある！だが、当地の伝承では、高千穂に戻り、その当時、一帯を荒らしていた鬼神の「鬼八きはち」を退治し、当地に宮を構えたとされる（この「鬼八伝説」は、件の「阿蘇神社」にもあるようである!）。

なお、これについては、文治5年（1189年）3月吉日の年記を持つ、当神社の縁起書『十社旭大明神記』には、神武天皇の皇子「正市伊（一位?）」が「きはちふし」という鬼を退治し、その後、正市伊とその子孫等が十社大明神として祀られたという異伝を載せているらしい（ここでは、この「正市伊」が、「彦八井耳命」ということになる?!そして、もしそうであれば、「彦八井耳命」は「三毛入野命」ということにもなる?!）。

さらに、正和2年（1313年）成立の『八幡宇佐宮御託宣集』（巻2）に、「高知尾（明神）」は、神武天皇の御子である神八井耳命の別名で、「阿蘇（大明神）」の兄神であるという異伝もあり、また、『平家物語』では、「日向国にあがめられ給へる高知尾の明神」の正体は「大蛇」で、「豊後緒方氏」の祖神であるとされてもいるらしい?!

「大蛇」であれば、前方後方墳勢力（←吉備の「龍神信仰」勢力）、あるいは「出雲勢力」である?!また、後の「鶺目姫命」は「祖母岳明神」の娘神で、鬼八に捕らわれていたところを、「三毛入野命」に助け出され、後にその妃神に

なったという伝承もあるらしい（素戔鳴命の説話に酷似していないか？）?!

こうなると、「高知尾（明神）」、「神八井耳命」、「阿蘇（大明神）」（「健磐龍命」?）、「彦八井耳命」、「三毛入野命」というような、各祭神・人物の特定、血縁関係の不整合が気になるころではある?!しかし、とにかく、「高千穂神社」は、日向三代の宮である「高千穂宮」が置かれた地と伝えられ、また、天孫降臨伝承と在地固有の信仰が融合し、さらに熊野修験も加わるなど、複雑な信仰を包含する神社となっている?!もちろん、同地にある「櫛触くじふる神社」等は、同神社と密接な関係があるようである!

ちなみに、同高千穂神社の社伝によれば、三毛入野命が神籬を建て、祖神の日向三代とその配偶神を祀り、その子孫が、後に三毛入野命、他の十社大明神を配祀し、垂仁天皇の時代（4世紀中頃?）に社殿を創建したということらしい?!

また、同神社が、「高智保神（高智保皇神）」であったとすれば、朝廷からの神階授与があったことになるが、『延喜式神名帳』には記載がなく、また、天慶年間（938-47年）に、豊後国から「大神おおが惟基」の長子「政次（高知尾太郎政次）」が当地に入り、「高知尾（高千穂）」氏を興したが、同氏は、当神社を、高千穂 18 郷にわたる 88 社（高千穂八十八社）の総社と位置づけて崇めたという?!

このように、伝承に、かなりの齟齬・混乱等が見えはするが、大きくは、神武・三毛入野命（兄弟）／神八井耳命・彦八井耳命（兄弟または同一人物）／健磐龍命・速瓶玉命（親子）等の、まさに「多氏」の部族・勢力が高千穂や阿蘇を治め（進出・略奪し?）、「記紀」に示されている「高天原?」を、この地にしたということではないか?!そうしなければ、腹の虫が治まらなかった（「記紀」は、自らの部族・勢力の正統性・正当性を正しく伝えていない!我々が、その部族・勢力であると!）?!そういうことでもある?!

○もう一つ、「景行天皇の熊襲征討」及び「隼人の反乱」の伝承（物語?）から見えてくるものもある?!

そこで、もう一つ、ここで思い出されるのが、「記紀」が描く「景行天皇の熊襲征討」である（これが、例の「日本武尊」の熊襲征討の物語に投影されている?!）!彼は、娑婆さば（現在の山口県防府市）から九州に渡り、8年もの間、九州中南部?を巡幸したとされるが、彼の子（の一人）が、宮崎県の「西都原古墳群」の主?「諸県君もろかたのきみ牛諸井うしもろい」とされるのである（南部九州での前方後円墳集中部で、彼の娘「髪長姫」は、「仁徳天皇」の後となっている!→「女狭穂塚・男狭穂塚古墳」?ただし、当地では、その双方の墓は、いわゆる天孫「瓊瓊杵尊」と「木花開耶姫命」の夫婦墓とされているようではある?!）?!

それから、もう一つ、例の「隼人の反乱」の時（720年）、九州北東部（豊前

国・秦王国と呼ばれた新羅系の人々の居住地。「息長氏」や「秦氏」の根拠地?!)から、大挙して霧島山系の土地に移り住んだ人々がいたとされるが(→「辛島氏」、彼らは、豊前の「宇佐神宮(八幡宮)」に異議を唱え、自分達の「大隅正八幡宮」(鹿児島神宮)が、その本宮(正統)であるとしているということである?!

多分、この時に、「天孫降臨の地」を、霧島山系の一つ「高千穂峰」にしたのではないか?!その山上にある「天逆鉾」は、それを誇示する記念碑だった?!しかも、それに連なる霧島山系の最高峰「韓国岳」の名称も、この地が、「記紀」に示す「高天原」の人々が、移り住んだ地域であることを誇示するものではなかったか?!そういうことである?!

しかるに、現在の「高千穂町(宮崎県西北部)」と「高千穂峰(霧島山系)」の双方(に関わる先祖達、すなわち、「多氏」と「秦氏」の一族?)が、それぞれ、当時の近畿大和政権(百済系/藤原氏)に対して、自らの正統性・正当性を示すために、「記紀」が描く「高天原」の地を、そこに措定し、それなりの伝承と事物を、それぞれ残したということではなかったか?!

そして、それが、ある意味正当(事実?)ではあったので、時々政権は、その主張・事物を認めざるを得なかった?!つまり、立てや酔狂で、天孫降臨あるいは高天原の地を、彼らが、そこに名乗ったのではないということである?!

さらに、そこでは、先にも述べたように、「高千穂氏」(同氏は、「宇佐神宮」の、おそらく?途中からの権力者「大神<sup>おおが</sup>氏」との血縁者でもあった!その「大神<sup>おおが</sup>氏」は、大和の「大神<sup>おおみわ</sup>氏」と関係がある?!))と、霧島山系の麓に移住してきた「辛島<sup>からしま</sup>氏」(同じく「宇佐神宮」の神官であったが、大神<sup>おおが</sup>氏との権力争いに負けて、当地に追いやられ、苦汁を舐めていた!)との関係も見逃せない?!

つまり、その「辛島氏」の反骨?の表れが、例えば、自らが創建した「鹿児島神宮(正八幡宮)」の名乗りであったと考えられるが、『日本書紀』の記載内容に、自分達なりの主張(「正統性」?)をぶつけたかった(「辛島氏」は「秦氏」と同族ではあった!)?!しかも、その秦氏の一族(後裔の一つ)「惟宗<sup>これむね</sup>氏」の一派は、後の「島津氏」でもある!そういうことでもあったわけである?!

となると、驚くなかれ?、「二つの高千穂の競合?」には、このような歴史的背景が横たわっていることになる?!しかも、もしそうであれば、彼らの先祖達は、「記紀」に示された高天原勢力(吉備から発した前方後方墳勢力、そして前方後円墳勢力!)の、ある意味正統・正当な後継者(の一族)であったということにもなるわけである?!

余談?ではあるが、ここでは、他にも、大分県の「杵築」(市)と出雲(杵築)大社の「杵築」、あるいは「臼杵」という、宮崎県の「(西)臼杵郡」と大分県の「臼杵市」の関係等も、俄然興味が注がれることとなる?!

○「天<sup>あま</sup>」と「海<sup>あま</sup>」、そこに交わる「神々達」?!投影されている氏族達は?!

「記紀」の壮大な舞台仕掛け?!哲学?でもあるが、史実でもある?!「万世一系」に込められた?真実とは?!

次は、改めて、極めて大きな(無謀な?)テーマではあるが、「記紀(神話)」においては、自らの建国の祖達を「天<sup>あま</sup>」と「海<sup>あま</sup>」に投影?させ(それは、彼らの信仰対象でもあった!→「太陽・日神信仰」と「海原信仰」(月・月神/北極星・北辰/金星・<sup>みか</sup>星/三ツ星・オリオン)、その関係(渡来者としての移住・進出・攻防・和合等の状況)を、いわゆる「神々の体系」として暗示させているのではないかということである(もちろん、中国の漢籍等を活用して!)?!

そして、それを端的に表しているものが、まさに「神生み」のハイライト、すなわち、三貴子=天照大神(太陽・日神信仰)/月読命(月・月神信仰)/素戔嗚命(北極星・北辰/妙見→海原信仰)の誕生と、その相克?ということである?!ただし、『古事記』と『日本書紀』とでは、そこでの神々の名前(種類)が、特に原初の頃の扱いが、順番も含めて、かなり違うことは違う?!

もちろん、それは、それぞれの編纂・執筆者(主体)が違う(先祖の信仰対象が違う?)ということであろうが、逆に(したがって?)、その違いを辿っていくと、両者が、どのような氏族(部族・勢力)の後裔(主張者?)であったのかということが分かり、そこからまた、新たな古代(建国)史の真相解明の手立てが見えてくるかもしれない?!まさに、そういうことである?!

ちなみに、このことについては、次のような指摘(事実?)もある!「太陽・日神信仰」は「対馬」、「月・月神信仰」は「壱岐」(から始まった?)ということであるが、前者は「阿麻氏留<sup>あまてる</sup>神社」(祭神:天日神命)、後者は「月読神社」(祭神:月夜見/月弓/月読命)に代表されるように、両島の部族・勢力(航海民・海人族)の影響(進出・参画?)が、倭国(→日本国)建国のプロセスに、間違いなく組み込まれていたということである(ひょっとすると、むしろそちらの方に、その起点(出発地)はあったのかもしれない?地勢的には、その方が合理的なようにも見える?)?!

例えば、対馬の「阿麻氏留神社」は、以前にも述べた、吉備からの前方後方墳勢力の近畿進出・全国移動(環濠集落勢力の駆逐?)の際に、その土地々に奉斎(埋納?)されていった「手焙形土器」に替わって建造?されていった「天照(御魂)神社」、まさにその系列であるということである?!ただし、それは、前方後円墳勢力(日神/太陽信仰→物部勢力?)の為せる業でもあった?!とにかく、対馬の部族・勢力は、いわゆる「天神系」の系列(天津神)であったということでもある?!

一方、壱岐の部族・勢力が、その「天神系」の系列(天津神)であったかどうかは、私には判断が出来ない?!大きく言えば、そこも、「天<sup>あま</sup>」の系列(→高天原系)であったことは間違いのないであろう?!ただ、そこにある「月読神社」か

らすれば、そしてまた、「記紀神話」からすれば、その系統は、「高天原系」（「天照（御魂）神社」）に飲み込まれていったものとも考えられる?!何故なら、「三貴子」の逸話からすれば、「アマテラス」と「スサノオ」の両系統の相克と収斂が大きなテーマとされているということであり、「月読命系」は、ほとんど無視?されているからである?!

とは言え、その後は、とりわけ「陰陽思想」の導入・発展の中で、その「月読神社（祭神：月夜見/月弓/月読命）」が、目立ってはいないが、きちんと位置づけられていることは忘れられてはいけない（ある本では、他ならぬ「伊勢神宮」の「内宮」「外宮」共に、その「月読（夜見）神社」が配祀されているという!単なる陰陽思想上の配祀ではないようにも思われるが、いかがであろうか?）?!

しかるに、それらは、大きくは、これまでも述べてきたように、南方系（中国江南の呉・越）、その後の伽耶・新羅系、そして、最後が扶余・百濟系の倭人達（これらは、総称して「倭人（渡来系弥生人）」と位置づけられよう?!）の「信仰対象」の表象ということになるだろうが、それらが、いわゆる「倭国→日本国」において、どのように根付き、展開されていったのかということでもある?!

ただし、そこには、いわゆる「縄文系」の人々の信仰（自然崇拜、巨木・巨石、高山信仰等）が習合されているということも、多分?事実であろう?!私が言うのも憚れるが、本当に広くて、奥深い精神世界（哲学?）の構築物と言え、まさにそうであろう?!ちなみに、天照大神（太陽・日神信仰）については、例の邪馬台国の卑弥呼の存在が、大きく影響していることは言うまでもないことである（←「大日巫女貴オオヒルメノムチ」）?!

ところで、これらに関わっては、とりわけ「三貴子の誕生」に関わっては、改めて、先に紹介した上山春平氏の、深くて、ある意味美しい?解釈があるわけである?!

すなわち、『古事記』に示されている「神統譜」（神々の体系）は、「天御中主あめのみなかぬし」と「神武（磐余いわれ彦）」が上下（最初と最後）に示され、その最上の「天御中主」から、「高天原系（大和←吉備?）」と「根の国系（出雲?）」の二つの系統に分かれ、それぞれ「タカミムスビとカミムスビ」、「イザナギとイザナミ」、「アマテラスとスサノオ」、「ニニギとオオクニヌシ」が対になって繋がれ、そして最後に、再び、「神武（磐余彦）」という、一人の人物（神→現人神・人間）に収斂していくという構図である!天皇（という存在）は、まさに、その両系統の集合体（合わせ鏡?）、収斂の形なのだということであろう?!

なお、同氏は、そこで、「高天原系」は「意思の絆」、「根の国系」は「心情の絆」とされているようであるが、もし、『古事記』に、そのような配慮?が、それぞれの血縁関係?はともかく（史実ではない?ということも含めて!）、本当にあるのならば、これほどの壮大な舞台仕掛けはないであろう?!『古事記』の哲



学、否、文学性？の面目躍如は、まさにここにあるとも言えよう?!

同氏によれば、端的に、「意思の絆」は、言わば「父性的な？」建国・統治の強い意思の流れ、「心情の絆」は、それに影響を受ける敗者の側の、母と子、父と娘、義父と息子（夫婦）との、言わば「母性的な？」情愛の流れとされているようであるが、それらが、関係の氏族（部族・勢力）の興亡（攻防？）の構図として描かれているということであろうか?!

ただし、私には（他にも、同じように思う人がいたようにも思うが？）、その「高天原系」は、厳密に言えば（直接的には？）、いわゆる藤原氏（不比等）の位置づけ・役割（正統性・正当性？）を投影させているものと見える?!

すなわち、史実としては、一方で、隠された（敗北した？）側の「根の国系」の流れ（正統性・正当性？）があり、それを土台（反射鏡？）にして、「天照大神」から始まる（ように見せかけた？）「万世一系」の構想が練られ、それを、「高天原系」の事績として綴ったものが、まさに「記紀（神話）」（の体系）であったというように捉えるのである?!

そして、その「天照大神」には、当然、「大和王権」の祖（事実上の？→そうしなければならなかった?!）、かの「邪馬台国」の女王卑弥呼（or 台与？）の存在とイメージが、かの「持統」の存在と、二重写しで投影されているということでもある?!

なお、「天照大神」は、本来は「男神」（三輪大神＝大物主神？）であり、「豊受大神」は、その「妻神」である（もちろん、それは、当該部族・勢力の関係比喩でもある？だが、そのモデルはいる？→天日矛（ツヌガアラシト）＝武内宿禰と息長足姫（竹野姫？）＝神功皇后?!）?!

**○具体的に、「高天原系」と「根の国系」とは、どのような氏族（部族・勢力）を指しているのか?!**

そこで、具体的に、この「高天原系」と「根の国系」とは、一体どういう氏族（部族・勢力）を指しているのかである?!

常識的?には、『新撰姓氏録』（815年）に示されている、「神別」の中の「天神・天孫系」と「地祇系」が、それぞれ対応させられる（別に「皇別」もあるが、それは、当然「高天原系」ではあろう?!）?!

ちなみに、「天神」は、藤原、大中臣等 246 氏、「天孫」は尾張、出雲等 128 氏で、隼人系の氏族も天孫となっている（→邇邇芸命の子／「三男神」の一人が隼人の祖であるから?）。「地祇」は、安曇、弓削等 30 氏である！その大きな括りは、改めて「皇別」「神別」「諸蕃」ということであるが、「神別」の最初が「天孫」ではなく、「天神」とされているのが象徴的であろう（ある意味当然?）?!

ただし、別の見方としては、いわゆる「臣（姓）」と「連（姓）」の違いによって、それに対応させることも出来るかもしれないが（例えば、前者は、物部<大臣>・阿刀・穂積・中臣等、後者は、蘇我<大連>・葛城・尾張・大伴等）、その間

の混淆・紆余曲折もあり、単純な種分けは出来ないと思われる?!

とにかく、3世紀初頭?から始まる「大和集結・建国」(九州→吉備・出雲?からの近畿進出=神武期/纏向・三輪政権=崇神期?)、そして、「王権の確立(篡奪?)・発展」(河内政権=応神期)と続いた、上山春平氏ら?が「高天原系」と称した氏族達(部族・勢力)の動きや関係を、(強いて言えば「持統・藤原体制」から)描いたものが「記紀(神話)」であり、そしてまた、その過程において、排斥され、敗北していったのが、まさに「根の国系」の氏族達(部族・勢力)であったということである?!

### ○「高天原系」の素性?!「天照大神」に投影された「卑弥呼」、「豊受大神」に投影された「台与」?!

ところで、やはり、ここでの問題は、最初はこちらの方が先(政権樹立主体)であった?「出雲」、そして、それらと複雑怪奇な因縁関係?にある「丹波(丹後)」や「伊勢」の役割と、その悲劇?であろう?!例えば、「元伊勢」と呼ばれる所が各地にあるが(一番有名なのは、丹後一宮の「籠この神社」!)、それらは、「伊勢神宮」が、現在の地に着座するまでに、各地に遷座・分祀された神社群であることは明らかである(多分?それには、かの「海部氏」が関わっている?!)。

しかも、同じ丹波国(現福知山市大江町)に創建された「皇大神社」と「豊受大神社」は、それぞれ、「元内宮」と「元外宮」として伝わり(基本的にはセット!)、その両宮は近接しているので、その二社を総称して「元伊勢神宮」とも言うらしい!また、同地内の、岩戸山という異称を持つ「日室ヶ嶽」の麓には、「天岩戸神社」があって、これらで、「元伊勢三社」とも言うらしい?!とにかく、丹波・丹後は怪しいのである(多分?ここに、伊勢神宮の原型がある?!)!

とは言え、現在の伊勢神宮「内宮」の祭神・天照大神が皇祖神であり、第10代「崇神天皇」の時代までは、その大神と「同床共殿」であったが(つまり、それまでは皇居内に祀られていた!)、その関係を忌避(畏怖?)した同天皇が、皇女「豊鋤入姫とよすきいりひめ命」に、その神霊を託したということである(その祭祀を嫌がったということ?)!

それは、大和笠縫邑に「磯堅城の神籬」を立てたことに始まり、更に理想的な鎮座地を求めて各地を転々とし、第11代「垂仁天皇」の第四皇女「倭姫やまとひめ命」が、それを引き継いで、およそ90年をかけて、現在地に遷座したとされるのである(伝承地・候補地多数、全部で26宮!)?!

ただし、こうした遷座の経緯については、『古事記』では示されていないが、『日本書紀』では簡略に、『皇太神宮儀式帳』ではやや詳しく、そして中世の『神道五部書』の一書である『倭姫命世記』においては、かなり詳しく記されているということである(これ自体は、なかなかややこしい話ではある?!)！改めて、そこに、何があるのでしょうか？

しかも、「外宮」の祭神である「豊受大神」は、不思議なことに、『古事記』『日本書紀』ではまったく記されておらず、『止由気宮儀式帳』や『倭姫命世記』によれば、第21代「雄略天皇」の時代に、天照大神の神託によって、丹波（丹後）から遷座したと伝えられているようである?!

ちなみに、天照大神が遍歴する説話は、『常陸国風土記』の、筑波山の話に登場する祖神や民間説話の「弘法大師伝説」に類するものともされているらしいが、一般の神社の縁起でも、鎮座地を求めて神が旅する話は多いので、「旅する神」の典型的な類型でもあるらしい?!

それはともかく、ここで言いたいことは、件の「神々の体系」は、『魏志』に登場している「卑弥呼」と「台与」をモチーフに、前者を「天照大神」、後者を「豊受大神」に昇華させ、さらに、前者に「持統」を潜り込ませ（すり替え?）、それを、「天津神系（勝者 or 統治する側としての天智系・藤原氏?）」、つまり「天」＝「高天原系（韓半島→北九州→吉備→大和）」とした?!

そして、一方で、後者を、「国津神系（敗北 or 統治される側としての天武系・蘇我／物部氏?）」、つまり「海」＝「地祇・出雲系」＝「根の国系」（江南／伽耶・新羅→北九州→山陰→丹波・越→近江・伊勢→信濃?）として、その間の関係を、「天照大神」と「素戔嗚命」の関係という形で、寓話（鏡像?）化したものではなかったか?!

もし、それが本当ならば、もう一人の「台与」or「豊受大神」の実像にも迫っていけば、鏡に映される前の本来の姿が見えてくる?!そして、そこには、決して表には出て来ない、陰で暗躍する?「秦氏」の姿も見えてくる?そういうことではないか?!そういうようにも、思えるのである?!

○「三種の神器」からみた「大和王権」の成立過程?!「記紀」は、それをどのように示しているか?!「三種の神器」とは何か?それは、何を表しているのか?!何かの「意匠」であり、「メッセージ」でもある?!

さて、ここまで、我が国建国における「高天原系≒天津神（天神・天孫）系?」と「根の国系≒国津神（地祇）系?」の相克の歴史と、その構図（まさに壮大な?建国史）を、各関係氏族（部族・勢力）の関係と、その系譜としての「神々の体系」の造作（トリック?）という視点で、考察してみた?!

ここでは、その続きとして、おそらく?そのことと大いに関わる（核となる?）「三種の神器（八咫やた鏡/天叢雲あめのむらくも劍→草薙くさなぎ劍/八尺瓊やさかに玉）」の存在と、その意味を、改めて考察してみることとしたい!

と言うのも、いわゆる「三種の神器」とは、もちろん古墳（前方後円墳?）への埋葬品でもある「鏡」「劍」「玉（勾玉）」のことであり、その被葬者が、生前所有していた威信材・奢侈品でもあったわけであるが、その三つの品物（宝物?）の「セット（三点）所有」は、明らかに、ある何かの「意匠」であり、「メッセ

ージ」でもあったと考えられるからである?!

そしてまた、その三つの「セット (三点) 所有」が、その土地 (国<sub>クニ</sub>) の支配者である? 「大王」、最終的には、「天皇」の権威の象徴となったということであるが、問題は、それが、何故、「鏡」「劔」「玉 (勾玉)」なのか? ということだからである?!

すなわち、それらは、それぞれ、特別な生活の必需品 (豊作祈願や自然崇拜あるいは祖先崇拜や呪術等、さらには戦闘鼓舞の道具?!) であり、しかも「高価で、貴重であった」わけであるが (手に入れにくい! だから「宝物」?)、何故、それら (「鏡」「劔」「玉 (勾玉)」) なのか、そして何故、その三つなのかということである?!

いろんな解釈の仕方もあるだろうが (たまたまそうであった? ということも含めて?)、そこには、多分? 「記紀」編纂者達 (直接的には、持統・藤原政権?) の演出 (真相吐露? →嘘はつけない?) があるようにも思えるのである?!

ただし、それらは、最初から「三種の神器」と呼ばれていたわけではなく (「用語・概念」がなかった?!)、しかも、それらは、言わば「バラバラに (個別に)」作成・所有されていた (はずである?) からである?! 現実的にも (現在でも)、それらの所有者 (管理者) は、「伊勢神宮」、「熱田神宮」、そして、「皇居 (天皇家)」となっている!

もちろん、形式としては、それ以前から、そのような埋葬形態もあったであろう?! 例えば、福岡県前原市の曾根遺跡群・「平原遺跡 (平原王墓?)」あるいは福岡市の「吉武高木遺跡」、壱岐市の「原の辻遺跡」、そして、福岡県小郡市の「津古生掛<sub>つこしょうがけ</sub>遺跡群」(3世紀末?) 等である?! その意味で、当時の持統・藤原政権が、そのような形式にヒントを得た (モデルとした?) ? あるいは、ひよっとしたら、これもあり得ようが、その形式を大和に持ち込んだ部族・勢力 (の後裔?) が、ある意味「大和王権」の中心となっていたのではないかということである?!

とにかく、それらは、個別の存在 (「ご神体?」) であったということは間違いないが、問題は、それが、何故、その集合体としての「三種の神器」という、まさに「観念的 (統合神威的?) なもの」となっているのかである?!

とは言え、その「観念 (統合神威? →「ご神体?」)」は、まったくの空想物ではなく、そこには、それを、それぞれの作成・所有主体の象徴とするという、ある種の明確な思い入れ (作為?) があるということであり、ここが重要であるが、その、それぞれの三つの作成・所有主体が、実は「セット (鼎?)」となって (協力して?) 「大和王権 (前方後円墳体制?)」を創り上げたという、言わば「仮構の表象」(アピール?) であるということである?!

したがって、もし、そうであれば、それらが、今どこに奉斎されているのか、

そして、それが、どの部族・勢力に関わるものであったのか？そういうことを明らかにしていけば、より具体的な（真実の？）建国のプロセスが分かるということでもある？！

繰り返しになるが、それが、大和王権を構成した？有力部族・勢力の動き・働きを示すことになるのである？！言い換えれば、その来歴等が、改めて追究されていけば、その大和王権（建国）の実相と、それに関わった部族・勢力の出自や関係等が浮かび上がってくるということである？！ただし、単純ではない？！

### ○「鏡」「剣」「玉（勾玉）」から見た、大和建国の構図？！

ということで、改めてまず、「鏡」であるが、これが、「日神信仰」あるいは「太陽信仰」を表していることは言うまでもない！日の光が当たると反射し、神々しい（恐ろしい？）輝きを発すると共に、自らの顔をも映し出す、誠に？摩訶不思議な「鏡」に、誰もが驚き、畏怖の念を重ねたことは（それ故、「辟邪へきじや」の意味ももった？）、現代の我々にも、容易に想像できることであろう？！

件の邪馬台国の「卑弥呼」が、「魏」から「好物」とされ、100枚の「銅鏡」を下賜されたという話は、つとに有名であるが、この頃（3世紀半ば）、既に？「（銅）鏡」が珍重され、その所有と使用（「祭り事」）は、その王権（支配・統制）の権威と納得の形でもあったということである（例の「鬼道」というものが、その使用の発現の形であったのかもしれない？）？！

ちなみに、この「鏡」の一形式である「銅鏡」、その中の「三角縁神獸鏡」が、その卑弥呼が魏から貰った鏡なのか、すなわち「舶載鏡（外国で作られたもの）」なのか、それとも、例えば、「倭」に移住して来た「呉」の職人による？「仿製鏡（「舶載鏡」を模したもの）」あるいは、純粹の「国産鏡」なのかという、これまた「永年の？」論争があるが（私自身は、「三角縁神獸鏡」は、「舶載鏡」ではなく、それこそ「辟邪」の意味をもたせた、国内で大量に生産された「仿製鏡」または「国産鏡」であると考えている！）、ここで言う「鏡」とは、「神宝？」「威信材」としての、高価で、貴重な「銅鏡」（国産鏡？）ないしは「鉄鏡」のことである？！

とにかく、「鏡作り」自体は、ある部族・勢力の職掌（生業）であったことは言うまでもないが、その「（八咫）鏡」は、3世紀中頃？の「纏向祭政都市」の神殿部？にあったものの（「同床共殿」）、4世紀前後？の「崇神政権？」（三輪）から遠ざけられ、各地を転々として、最終的には、伊勢（内宮）に行き着いたわけである？！

ただし、その「鏡」の部族・勢力は、高天原勢力、すなわち「（最終的には？）前方後円墳勢力」の主力であった「物部氏」の一族？（石凝姥いしこりどめ命→鏡作部）とはされているようであるが、具体的に、彼らが、どのような形で、それを奉斎していったのかは、今のところ、私には明確にはできない（伊勢神宮を最初に創建した部族・勢力→荒木田氏・内宮 or 渡会氏・外宮？！→両者自体は、もともと

は「磯部氏」という同族ではあった?!しかし、その仲は、かなり悪かったようである?!) !

次に、「劍」であるが、これは、「尾張氏」の根拠地・熱田神宮にあるとされている?!だが、その劍は、例の「素戔鳴命」が出雲（斐伊川上流）で八岐大蛇を退治した時に、体内から出てきたものということは広く知られているが、何故、それを、どのような経緯で、「尾張氏（熱田神宮）」が保有しているのかについては、あまり詰められていない?!

素戔鳴命→（献上）天照大神→（下賜）タケミカヅチ命？/高倉下命？→（倭姫命）→（日本武尊）→尾張氏（宮實みやす媛←父・乎止与おとよ命）といった流れとなるようであるが、かなりの謎である?!特に、尾張氏の所有（象徴）ということになれば、尾張氏は、他ならぬ、「高天原」から追放された「素戔鳴命」と大いに関係があることになる?!果たして、それは、どういうことになるのか（「尾張氏」の怪しげな出自、振る舞いが、そこにはある?）?!

最後に、「玉（勾玉）」であるが、それは、現在、「皇居（天皇家）」にあるということである!だが、それは、「天太玉あめのふとだま命」の後裔とされる「忌部いんべ氏」（→「伊福部氏」?）と関係があったようである?!そこには、いかなる経緯・関係があったのであろうか?

もちろん、これについても、私自身は、詳しいことは知り得ていないのであるが、かの「忌部氏」（「伊福部氏」?）は、後にも述べるように、基本的には「出雲」（「山陰」）の部族・勢力である（ただし、彼らの、四国・阿波、そして、房総・安房への進出は顕著である!）?!

そしてまた、同氏は、一方で、肥前／筑後において、さらには、近江において、「伊福→伊吹」という形で存在している?!これもまた、かなりの謎である?!  
○ 改めて、それは「観念的なもの」であり、実際の（最後まで）協力関係（「合力」?）を表すものではない?!

以上、簡潔に、「鏡」「劍」「玉（勾玉）」の所有・シンボル氏族を挙げたわけであるが、しかしながら、それらは、関係の部族・勢力の、単純な「連携・協力」を指すものではなさそうでもある?!

何故なら、「鏡」は、先にも述べたように、第10代崇神天皇の時に、大和（纏向）を離れて（忌避されて?）、笠縫邑（「檜原神社」?）を皮切りに、各地（かなり広範囲で!）を転々とし、最後は、現在の伊勢（神宮）の地まで遷座させられているからである（なお、それぞれの遷座地、いわゆる「元伊勢」の数は、何と90を超えるらしい?!）?!

おそらく、それらの地は、「鏡」を信奉・作製する部族・勢力の居留地・移動地であったであろうが、最後が、「伊勢（→磯部?）」であったのは、やはり変なのである?!すなわち、そこは、多分北部九州（「伊都国」?）からの移住者?「海

部→磯（イト→イツ→イソ／イセ？）部」族の寄留地・進出地（の一つ）であつたらうが、そこが、ある意味、ある時期、その部族・勢力の、最大かつ最終？の地であつた？！

しかも、その部族・勢力は、いわゆる「出雲系？」であり、彼らは、最後は、そこに押し込められた（壊滅させられた？）？！それを示唆？しているのが、かの「天孫降臨」を嚮導？した、「出雲系？」の「猿田彦」「天鈿女うずめ」の顛末である（「猿田彦」は、そこで、奇妙な、否、滑稽な？死に方をしている！他にも、当地には、いくつか面白い伝承があるようである？！）？！

次に、「劍」に関してであるが、まずは、吉備（赤磐市）の「石上布都魂ふつのみたま神社」には、「出雲の象徴？」でもある「素戔鳴命」が、何故か？祀られている（吉備に、物部系の神社があること自体は不思議ではないが、問題は、その物部氏と「素戔鳴命」に、どのような接点があるのかということになる？！）！

その答え（ヒント？）は、まさしく素戔鳴命が、出雲で、例の八岐大蛇を斬った時の刀劍が、物部氏の祭神「布都御魂ふつのみたま」とされていることにある？！そして、その後の、「タケミカヅチ」（「中臣氏」→「藤原氏」？）が「大国主」に国譲りを迫った時の刀劍も「十拳とつかの劍」であり、それも？「布都御魂」とされている？！

また、時代？は前後するが、国生み神である「イザナギ・イザナミ」の箇所、最後に、イザナギが、妻のイザナミを死に迫りやめた？「カグツチ（火の神）」を斬った時の劍も「十拳の劍」とされ、別名「天尾羽張あめのおははり」とも呼ばれている？！

実は、ここに、いみじくも？「尾張氏」の影がチラつくのであるが、まさしく、その後の出雲を支配した「出雲（臣）氏」（「国造」→出雲大社の宮司家！）は、その尾張氏、正確に言うと、（「出雲の国譲り」の時の）高天原からの先兵？であつた「アメノホヒ」の後裔であり、その「アメノホヒ」は、大国主勢力と仲良くなつて？、出雲に同化したとされるのである（「出雲国造神賀詞」では、大和王権に忠実に貢献したと言うが！←『延喜式』）？！

だとすれば、その「アメノホヒ」が、ある面「素戔鳴命」の顔（要素）をもっているのであり、しかも、出雲と紀伊の双方の「熊野」の関係も、より真実味が出てくることになる（←紀伊で神武を助けた、尾張氏の「高倉下たかくらじ」！）？！すなわち、素戔鳴命は、「出雲へ追放された」が、一応「高天原」勢力の一員ではあつたのであり、吉備を出発した？物部氏系（本来の「高天原系」？）の神社に祀られていても、さほど驚くことではなく、むしろ素戔鳴命は、物部氏、そして尾張氏（の類縁者？あるいは、その誰かの虚像？）であつたとも考えられるのである？！

最後の「玉（八尺瓊勾玉）」（天太玉→忌部氏・伊福部氏も？）についてであるが、

「忌(齋)部氏」は、もともとの発生(母体?)は「出雲(意宇郡→玉造部氏?)」であった?!だから、その「忌部氏」は、その後、(中臣氏を取り込み、中枢であった物部氏をも習合させた?!)藤原氏と反りが合わず、「記紀」の表舞台?には登場しない?!しかし、例の「天の岩戸神話」では、その饗宴? («三種の神器」を意識させた演出?!)の中に、その存在が明確に示されている?!

ちなみに、忌部氏の子孫である「齋部広成」が、『古後拾遺』(807年)を著し、時の(これまでの)政権への、かなりの憤懣?を露にしたとされるが、それもまた、当時の政権が、誰もが(直接的には「忌部氏」が!)納得のいく形で推移してきたものではないことを示すものである?!とは言え、大きくは、上記の三勢力(氏族)が、「大和王権」を創り出したということではある?!

○「大和三山(天の香久山・耳成山・畝傍山)」の意味?!「三種の神器」との関係は?!ここにも、「大和王権」の構図が示されている?!改めて、その意味するものは?!

さらに、ここでは、これも前から気になっていたことであるが、いわゆる「大和三山(天の香久山・耳成山・畝傍山)」に纏わる古代氏族の関係について、私なりに考察を加えておきたい!

実は、この「大和三山」を象徴する古代有力氏族があり、その古代有力氏族が、言わば「鼎かなえ?」となって、「大和王権」(「倭→日本国」)を樹立して(実権を握って?!)いったのではないかということである?!それが、まさに「物部氏」であり、「蘇我氏」であり、「尾張氏」であるということであるが、本当に彼らは、そうであったのであろうか?そしてまた、それが真実であるならば、どのようにして、そうになっていったのであろうか?そこに、関心が持たれるということである?!

ちなみに、この「大和三山」について、改めて調べていたら、それについてのネット情報・研究成果?が様々に見られた!本当に、これについても、多くの人達が興味・関心をもたれている、あるいはそれを、ライフワーク(生涯をかけた仕事?)にされていることが分かった(尤も、私も、その一人のつもりではあるが?!)!ただし、多くの人が、いろんなことを語って(調べて)おられるということは、これについてもまた、諸説紛々ということにはなる?!

ということで、それはそれで、ある意味仕方がないことではあるが、この「大和三山」の関係については、改めて、次の二つの万葉歌が大いに注目されることは言うまでもない?!すなわち、それは、中大兄皇子、つまり後の「天智天皇」と、その娘の一人「持統天皇」(天武天皇の正妃!)の歌とされるものであるが、取りようによっては、それらは、ある重大な過去(関係)を仄めかしているものとも言えるからである?!

すなわち、その歌意(底意?)には、歴史的な何かの真相が、誰かの作為に



よって（本当は、誰が作ったのか分からないということも含めて？）、遠回し（文学的？）に示されているのではないかということである?!だから、後世にも残った?!そういうことでもある?!

・ 香具山は 畝傍ををしと 耳梨と 相あらそひき  
神世より かくにあるらし

古昔も 然にあれこそ うつせみも 孀を あらそふらしき  
（読み）かぐやまは うねびおおしと みみなしと あいあらそいき かみよより  
かくにあるらし いにしえも しかにあれこそ うつせみも つまを あらそう  
らしき

（訳）香具山は、畝傍山が愛おしいと言って、耳梨山と争った。神代から、そうであるらしい。昔からこうだったのだから、いまでも、一人の女性を、二人の男性で争うんだね。

まずは、この歌は、「中大兄皇子」の作とされるものであるが（読みと訳は、インターネット情報からのものである!）、「一人の男性を二人の女性が争った」という解釈もあるそうですが、わたしは中大兄皇子、大海人皇子、額田王の三角関係のほうが萌えるので、こっちをご紹介します。とある!

それはそれで、艶やかな男女関係の浪漫?も高まるので、しかも、一般にも、そのように解釈されている向きもあるようなので、私は、その歌の解釈自体には、あまりこだわるつもりはない?!だが、やはり私は、この歌の底意?、すなわち「神世より かくにあるらし 古昔も 然にあれこそ」という部分に、何かの暗示、歴史的なメッセージ性を感じるのである?!（←関裕二氏）

すなわち、ある時（それまで）の、その、それぞれの聖山を象徴する（根拠地とする?）部族・勢力の関係は、実はこのようであったということ、誰かが、歌に託して示しているのではないかということである?!それが、「尾張氏」（天の香久山）、「蘇我氏」（畝傍山）、「物部氏」（耳成山）の関係であり、しかも、直意は、「尾張氏」は、「蘇我氏」を巡って（頼って?）、「物部氏」と争った（ことがある?）ということである?!

・ 春過ぎて 夏来るらし 白袴たえの 衣干したり 天の香久山

次は、この著名な万葉歌であるが、これは、「春が過ぎて、夏が来たようだ!向こうの『天の香久山』には、白い衣が干してある!何と清々しいことよ!」というように、一般には、季節の移り変わりを詠う、長閑で、平和な初夏の歌?とされているようである?!

しかし、実は、その歌の別な（深い?）解釈で、誠に面白い?ものがあるのである!それは、これも関裕二氏の指摘であるが、「(王権を狙う?)持統天皇が、天の香久山の白袴の衣(天皇の着衣=皇位)を前にして、いよいよその時が来た!」というような心情を表した歌であり、本当は、彼女(達)の恐ろしい企

みを暗示しているというものである?!しかも、関氏によれば、実態?として、聖山である香久山には民家はなかったのであり、洗濯物を干すような、長閑な光景などはなかったというのである?!

もし、そうだとすれば、それには、かなりの説得力があることになる?!何故なら、その後持統(藤原不比等とのコンビ!)は、夫(天武)の勢力や「尾張氏」を斥けて、皇位を篡奪している(天武王統から天智王統へ、そして、自ら高天原系の頂点へ?!)?!

そして、ということは、「皇位」(の行く末?)は、「天の香久山」、すなわち「尾張氏」が握っている(た?)、ということの「寓意」ではなかったかということである?!換言すれば、「尾張氏」は、ある種の「キングメーカー」ないしは「(王位継承の)キャスティング・ボード」を担った氏族だったということである?!

その証拠?に、その昔(3世紀末?)に(も?)、吉備から?出雲(王権?)に乗り込み(参画し?)、そこと融和?した「尾張氏」(前方後方墳勢力の一派?天穂日/菩比<sup>アメノホヒ</sup>)であったが、彼らは、その後、仲間?の「大物主系」、そして「和珥系」(前方後方墳勢力の全体?)、その中心勢力であった「多(意富?)氏」等と袂を分かち(裏切り?)、「物部氏」(双方中円墳→同じ吉備からの前方後円墳勢力?)や「忌部氏」らと、大和(纏向)で合同政権(三輪王権?)を打ち立てた?!

そして、その後、何らかの形で蘇ってきた(「畝傍山」を象徴する部族・勢力となっていった?)、多分「和珥系」の流れを汲む?「(武内宿禰→)蘇我氏」と組み、再び「王権」に参画した?!

### ○それぞれの「聖山」の意味、特徴?!

ということで、次に、それぞれの「聖山」の具体的な意味、特徴?をまとめてみると、まず、「天の香久山」であるが、そこは、確か「神武東征」時に、大和での戦況を打開するために、「八咫鳥(鴨族?)」と「弟磯城(磯城県主しきのあがためしの祖)」の二人が、敵(反対勢力)の目を欺いて?、その山の土(埴)を取って来て、「巖瓦いっへ」(呪術のための土器)を作り、その聖意(火?)によって、敵を靡かせたという話がある?!

その山が、「天の香久山」、まさに「尾張氏の祖・(天)香久山」の名を負っているのである(これは、例の、吉備から出立した「手焙形土器勢力」(前方後方墳勢力)との接触・融合を彷彿とさせる?)?!単純に言えば、「天の香久山」(の周辺)は、その「尾張氏」(の祖)が掌握していたということである?!

ところで、この山には「意加美<sup>おかみ</sup>神社」(祭神: 添加美または竈(竈)神)があり、その祭神は、「神生み」において、伊邪那岐<sup>いざなぎ</sup>神が迦具土<sup>かぐつち</sup>(火の神)を斬り殺した際に生まれた神とされている。

また、この神と同神と考えられる「高竈<sup>たかおかみ</sup>神」は、「貴船神社」(京都市)の祭神でもあるといい、この神は、出雲の素戔鳴命や大国主命とも関係が

あるらしいが、ここで注目されるのは、「龍おかみ」は「龍」の古語であり、龍は、水や雨を司る神として信仰されていたことである！さらに、先の貴船神社のほか、「丹生川上神社」（奈良県吉野郡）では、「罔象女みずはのめ神（水の神）」とともに祀られており、全国にも「意加美神社」と称する神社は多々あるということである！

とすれば、これらから、まさしく、吉備の「龍神信仰（日神信仰）」が連想されるが、尾張氏（の祖）が、その吉備からの「龍神信仰（日神信仰）」の一派であったことが推察されるかもしれない?!ちなみに、香久山は、「鉄・銅・辰砂（朱・硫化水銀）」の産出地でもあったらしい?!

これについては、「石凝姥イシコロドメ命」（鏡作かがみづくり連らの祖）が、この「天の香久山」の金（属）を採って、例の「八咫鏡」を治工に造らせたとある?!道教の思想では、鏡（日神）は宇宙の最高神の権力を象徴するとされるらしいが、この「八咫鏡」は、まさに、そういうことであろう?!

次に、「耳成山」であるが、その山は、「天然の山ではなく、古代に造営された『上円下方墳』との説がある。大和三山が二等辺三角形をなし、かつその事実が古くより知られていた事、古事記や日本書紀において古い時代の記述が無く、ようやく日本書紀において允恭天皇の時代以降に記述が見られる事が根拠として提示されるらしく、その規模の大きさから全くのゼロから造営された古墳でなく、既存の天然山を改造したという説もあり、火山と見られるのに噴火口が無い事から、噴火口を埋めるなどの造成をした（その際に大和三山の山頂が二等辺三角形をなすように調整された）」とも考えられているようである（ウィキペディアより）?!

かつては、「天神山」とも呼ばれ、天神山城があったとされているようでもあるが、この地には、例えば「高市御県御坐鴨事代主神社」、「天太玉命神社」等もあり、これらのことから、ある時期まで大和王権の中心（母体）であった「物部氏」（否、「鴨氏（族）」？そして「忌部氏」も？）が支配する聖山であったとも考えられる?!

最後に、「畝傍山」であるが、この山麓が、神武天皇の即位地（王権発祥の地→橿原宮）でもある！興味深いのは、この畝傍山と橿原宮の周囲には、「九州の海人」（「神武東征」で活躍した「大伴氏」と「久米氏」。大伴と久米は同族で、大伴と天皇家の絆は強い！）が陣取っていたようである！

すなわち、そこは、「道臣みちのおみ命」（大伴氏の祖→吉備の「上道・下道臣氏」の祖？）と「大来目部」（久米氏の祖。入れ墨あり！）、そしてまた「忌部氏」（彼らもまた、入れ墨あり！）も、この地に地盤をもっていたともいう（彼らは、もともとは「阿曇族」か?!）！初代王（神武）は、海人族とともに、この地に入植してきたということであるが、後に、そこに、「蘇我氏」が被さって来たのであろう

(→大和の飛鳥!)?!

### ○改めて、「三種の神器」と、それぞれの「聖山」の関係は?!

翻って、大和三山は、畝傍山を頂点として二等辺三角形を成しており、頂点と底辺の中点を結んだ線の延長上に三輪山があり、そのピラミッドパワーが、三輪山に放出されているという説もある?!例の「天岩戸事件」(天児屋命と太玉命が、八尺瓊の五百箇の御統(勾玉)や八咫鏡と共に、天香久山の榊を掘って揃えてきた神事)を彷彿とさせる?一方で、他でもない、「持統天皇」が建都した「藤原京」は、その三山の中心に当たるらしい?!

尤も、この三山の関係には、別な解釈、例えば、出雲(三輪?)、橿原(神武)、葛城(鴨?)の三者の関係(三角関係?)もあるらしいが、いずれにしても、「大和王権」が、畝傍山(蘇我氏→男性性?)・八尺瓊勾玉(天太玉命→忌部氏)、耳成山(物部氏→女性性?)・八咫鏡、天の香久山(尾張氏→女性性?)・天叢雲劍(草薙劍)の部族・勢力が、畝傍山(蘇我氏)を頂点にして、樹立されたものであるということを示すものであるということである?!

なお、史実としても、持統・藤原勢力が、蘇我氏(王権)を倒し(「乙巳の変」)、その地位を奪ったことは確かであるが、そこには、「尾張氏」も関係していること、しかもそのことは、往古のそれと同じであるということである?!

別言すれば、「天の香久山」は、大和三山の裏中心?ともされていたということであり、具体的には、「尾張氏」が、「出雲」、そして「神武(大和)」、その後、「物部」や「蘇我」の王権に参画・協力してきたということである?!実は、それが、「三種の神器」の意味でもある(状況→物的証拠?)ということである?!

ということで、もし、そうであれば、私達は、そのことを、明確に認識しなければいけないということになるが、とりわけ「尾張氏」の存在と、彼らが果たした役割(裏切り?も含めて!)は、我が国の古代史を解明する大きな鍵となることは間違いないであろう?!

### ○「出雲大社」と「熊野大社」の関係にみる、「根の国系≡出雲系?」の謎、否、怪?!まずは、出雲(島根県)の熊野大社と紀伊(和歌山県)の熊野大社の関係を問う?!そこには、何が?!

ところで、これも、以前から気になっていたことがある!それは、島根県(出雲)の「熊野大社」と和歌山県(紀伊)の「熊野大社(本宮大社・速玉大社・那智大社)」の関係というか、神社名が同じであることから、何らかの関係があることは明らかではあるが、単純に?どちらが先にあったのかというようなことである!

だが、ある意味仕方がないが、これにも双方の説(言い分?)があるようであり、今回、改めて調べてみたところ、やはりそのようなものでもある?!ただし、出雲の「熊野大社」(松江市)には、自社の方が「元宮」である、というような

古伝もあるようではある（私は、その説？を支持する！）?!果たして真実は、どうなのか?!

ちなみに、この私の問いは、紀伊の「熊野大社」のうち、「本宮大社」（田辺市）が一番古そうであるので（ただし、「熊野三山」の位置づけ以前は、それぞれが、別の神社・信仰地であった可能性もある?）、出雲の「熊野大社」と紀伊の「(熊野)本宮大社」とでは、どちらが古いか（関係部族・勢力の移動の後先?!）ということになる?!

とは言え、この問いは、単純な「新旧」の問題ではなく、例えば、「記紀」における、いわゆる「出雲の国譲り」が、具体的に（史実として?）、どこ（から）の、どのような部族・勢力が、どのような範囲（地域）で、どのような攻防を繰り返してきたのかを示している?そして、その結果、どのような事態が引き起こされたのかということでもあるので、関係部族・勢力の「場所移動?」も含めて、この「新旧」の問題は、ある意味大変な「問題提起」の要素をもっているものとも思われる?!

ということで、まずは、その中でも、特に、そこにおける「ご祭神」と、その関係が注目される場所となる?!と言うのも、件の出雲の「熊野大社」は、出雲東部（意宇郡）にあり、それでまた、西部（杵築郡）の「出雲大社」とのつながりも強固であるようであるが、例えば、出雲の「熊野大社」に関わる（もちろん「出雲大社」にも関わる?）、すなわち、その出雲を象徴する「スサノオ」が、その祭神とされているということである?!

そして、そのスサノオの子?とされる「五十猛いたける」が、兵庫県の「中臣印達いたて神社」（播磨の揖保川流域）の祭神とされており、彼ら親子?（二人の姉妹も含めて!）の痕跡は、もちろん出雲にも多々あるが、紀伊・熊野にも広がっているのである?!

このように、たとえスサノオが、出雲の勢力・実情をすべて投影させられている架空の人物?であったとしても（その可能性は大である?）、吉備からの?尾張氏（の一派?＝天穂日／菩比アメノホヒ勢力）が出雲に進出したことは間違いなく、その吉備の「前方後方墳（手焙形土器）勢力」は、龍王の祖先（モデル）としてスサノオを創出した?しかし、その悪しき遍歴?によって、その後の「高天原（前方後円墳）勢力」から、次第に忌避されるようになっていった?!そういうことであったのではないか?!

一方、その吉備の本隊?（日神信仰＝龍王山信仰）勢力（物部氏?）は、同族の尾張氏（「アメノホヒ」勢力）が出雲に進出しても?、武器形青銅器や銅鐸の祭祀には戻らなかった?!それに代わって、同じ青銅製の「鏡」を造り始めた?!

それは、あの卑弥呼の好物とされた「鏡」と同じ用途であろうが、それが、例の「八咫鏡やたのかがみ」（イシコリドメ→アマテラス：物部（→藤原?）→伊勢神宮）

に繋がっていった?!そしてまた、それと連動して、「天叢雲<sup>あめのむらくも</sup>劍→草薙<sup>くさなぎ</sup>劍」(スサノオ→タケミカヅチ：尾張(高倉下<sup>たかくらじ</sup>)熱田神宮／フツヌシ：物部→石上神宮)、そして、「八尺瓊勾玉<sup>やさかにのまがたま</sup>」(アメノフトダマ：忌部→中臣(→藤原?)→皇居?)という、「三種の神器」につながっていった?!

この状況(物的?)証拠が、「大和王権」の成立、すなわち「出雲の国譲り」の結果?ということになるが、ここでは、その間の、スサノオ勢力、あるいは出雲の旧勢力(西部の「神門臣氏」←四隅突出型墳丘墓?)や「出雲国造家」となった「尾張氏」(アメノホヒ)の関係(移動)が、どのようになっていったのかということになるが、その鍵を握っているのが、他ならぬ「熊野(大社)」ということなのではないかということである?!

### ○改めて、「出雲大社」と「熊野大社」、そして、その「祭神」の関係は?!

そこで、改めて、出雲の「熊野大社」の祭神であるが、「伊邪那伎日真名子<sup>いざなぎのひまなご</sup> 加夫呂伎<sup>かぶろぎ</sup>熊野大神<sup>くまののおおかみ</sup> 櫛御氣野命<sup>くしみけぬのみこと</sup>」(何と長いことか!)とされ、この祭神名は、「素戔嗚尊」の別名であるとされている。

何故、その神が「素戔嗚尊」なのかは、多少不分明であるが、その「伊邪那伎日真名子」という意味は、「イザナギが可愛がる御子」、「加夫呂伎」は「神聖な祖神」の意とされており、「熊野大神」は、鎮座地名・社名に大神をつけたものであり、実際の神名は「櫛御氣野命」ということになるらしい?!

さらに、その「クシ」は「奇」、「ミケ」は「御食」の意で、食物神と解する説が通説であり、これは、「出雲国造神賀詞」に出てくる神名を採用したものとあり、『出雲国風土記』には、「伊佐奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂乃命<sup>いざなひのまなご くまのにます かむろのみこと</sup>」とあるらしい?!

なお、現在では、櫛御氣野命と素戔嗚尊とは、本来は無関係であったとみる説も出ているらしいが、『先代旧事本紀』(「神代本紀」)には、「出雲国熊野に坐す建速素盞嗚尊」とあり、少なくとも現存する伝承が成立した時には、すでに櫛御氣野命が、素戔嗚尊と同一神と考えられていたことが分かるとある?!

(以上、ウィキペディアより)

一方の、紀伊の「熊野大社」では、本宮大社が「家都美御子大神<sup>けつみみこのおおかみ</sup>」(熊野坐大神<sup>くまぬにますのおおかみ</sup>、熊野加武呂乃命<sup>くまぬかむろのみこと</sup>とも)、速玉大社が「熊野速玉大神<sup>くまのはやたまのおおかみ</sup>と熊野夫須美大神<sup>くまのふすみのおおかみ</sup>」、そして、那智大社が「熊野夫須美大神」と、それぞれ主祭神とされている。

いずれにしても、問題を簡素化すれば、(出雲の)「櫛御氣野命(素戔嗚尊)」と(紀伊「本宮大社」の)「家都美御子大神(熊野坐大神あるいは熊野加武呂乃命。ただし、彼は、素戔嗚尊の子の「五十猛<sup>いたける</sup>命」とも言われるが?)」のどちらが古いのかということである?!

これが、単純に、「スサノオ」が「出雲」で、その子の「五十猛」が「紀伊」ということであれば、まさに「出雲から紀伊」へ、「熊野」の名を携えた（「スサノオ」をシンボルとした）部族・勢力（の一部？）が移動したということになるが、もし、そうだとしたら、いつ頃、何故、どのようにして、彼らは、出雲から紀伊へ移動したのかということになる?!そして、実は、それが、熊野の「高倉下<sup>たかくらじ</sup>」（彼は、高座結御子<sup>たかくらけつみこ</sup>神社・熱田神宮境外摂社に、「高座<sup>たかくら</sup>さま」と呼ばれ、尾張氏の祖として信仰されているらしい?!）の謎にも結びついてくるのである?!

ちなみに、先の『先代旧事本紀』（巻5「天孫本紀」）においては、熊野の「高倉下」は、物部氏の祖神である「饒速日<sup>にぎはやひ</sup>命」の子で、「尾張連」らの祖「天香語山命」（越後の「彌彦<sup>やひこ</sup>神社」の御祭神でもある!）の割註には、「天降り以後の名は手栗彦命または高倉下命である」とされているらしい?!

また、国宝『海部氏系図』の「勘注系図」においては、始祖「彦火明<sup>ひこほあかり</sup>命（饒速日命?）」の児「天香語山命」の註に、「（「天香語山命」が）大屋津比賣命を娶り、高倉下を生んだ。そして、始祖の孫（「天香語山命」の子にあたる）「天村雲命」の弟として、“弟熊野高倉下 母大屋津比賣命”と表記されているらしい（これもまた、ウィキペディアより）?!

いずれにしても、物部氏と海部氏、そして尾張氏（→紀氏も?）は、始祖が、すべて「彦火明命（饒速日命?）→物部氏の祖?」とされているため、その限りにおいては同族だと考えられるが、（紀伊の）熊野に尾張氏（の祖の一人?）が関わっているとすれば、出雲と紀伊（熊野）の関係は、単に、その二つの氏族（部族・勢力）の関係に終わらず、物部氏や海部氏（→紀氏も?）との関係も、新たに追究されなければいけなくなる（ある意味?改めてび、困ったものである!）?!

○「火」と「日」の「裏表」?!元は、「火」の神、そして「日」の神へ?!「出雲国造」の謎?!

ただし、ここでは、そのことは一先ず置いておくことにして、とにかく、「熊野」が「スサノオ」、そして「尾張氏」と関係していることは、多分?明らかであり、そしてまた、「出雲大社」の宮司である「千家氏（出雲国造家）」が「アメノホヒ」の末裔であり、その「アメノホヒ」勢力は、まさに「尾張氏」（の一派?）であるので、ここに、「出雲（大社）」、「熊野（大社）」、「尾張（熱田神宮）」の関係が見えてくるのでもある?!

すなわち、（紀伊）熊野の「高倉下」が、天照大神を通じて「タケミカヅチ命」から「霊剣（フツノミタマ）」を下賜?されているが、スサノオ（八岐大蛇退治）、剣（天叢雲剣→草薙剣）、尾張氏（熱田神宮）と繋げてみれば、二つの熊野の関係も、さらに見えてくるようにも思われるのである?!

ちなみに、「出雲大社」は、ある時期（まで?）、件の「スサノオ」を主祭神

として祀っていたという?!この事実?は、別の意味で重要である?!何故なら、「スサノオ」と「大国主命」は(義理の?)親子、あるいは6世孫?の関係とされているが、とにかく、これはよく知られていることであるが、現「出雲大社」の本殿裏には、(末社として)「素鷲社そがのやしろ」があり、そこには「スサノオ」が祀られているのである(→「蘇我氏」との関係が、そこには埋め込まれている?!)!

しかも、その後先であるが、物部/尾張(前方後円墳=日神・龍神信仰/前方後方墳=火神信仰=手焙形土器勢力)は、多分?吉備から出立していると考えられるので、地勢的にも、尾張(熊野)は出雲の方が先で、その後(葛城・高尾張を経由して?または、その逆かも?)、紀伊熊野、そして伊勢、尾張(熱田)というように流れていったのではないかと思われるのである?!

ただし、それは、おそらく貴重な鉱物資源を求めて、そしてまた、鉄の生産・加工のための木材を求めての、新天地・開拓地への移動・進出であったことであろう?!そして、それを支えた(協力した)のが、もともとは海人族の一派であった、同じ出雲・山陰?からの「忌部氏」であった?!船による移動は、彼らには容易なことであった(彼らは、徳島県や千葉県等に、淡路・阿波・安房・粟等の名を残している?!)?!

最後になるが、この「(出雲の)熊野大社」と、多分その対とも言える?「出雲大社(杵築大社)」には、今ではかなり珍妙にも思える?関係があるようである!

それは、「鑽火さんか式」(亀太夫神事)と呼ばれるものであるが、その儀式は、「出雲大社」が、「国造」の代替わりの時、「熊野大社」に「燧白ひきりうす・燧杵ひきりきね」(火を熾す道具)を借りるといふ神事であり、その際、「熊野大社」の下級神官「亀太夫」(本当は重要な役職?)から、さんざん嫌味や小言を言われながらも、それに絶えて、その神事を全うするというものである!ちなみに、「出雲国造」は、唯一人(大国主と共に?)、その時の「火」を使った食事をし続けるということである!

元来、「出雲国造」の役目(「大国主」を封じ込め、祀ること!or偉大な祖先である?「大国主」を祀ること?)は、東部の「熊野大社」(本家?)にあったが、それを、出雲国造家(分家?)が、西部の「出雲大社」(杵築←「神門臣氏」支配地!)に移り、大和(「高天原」勢力)の指示によって、それを代行した(乗っ取った?ということは、「出雲大社」(の社領)は、もともとは、在地の「神門臣氏」の聖地であったかもしれない?)?!

いずれにしても、「出雲大社」(出雲国造家)には、「観念上では、(熊野大社に)頭が上がらない関係があった」ということである?!

なお、これに関わって、「出雲大社」には、「身逃みにげ神事(神幸祭)」という、これもまた珍?神事があり、そこにも、「出雲大社」(国造家←大和)と「熊野大



社) (スサノオ・大国主←尾張氏?) の、まことに奇妙な関係が埋め込まれているようである?!

その関係は、天皇即位の儀式、いわゆる「大嘗祭」にも組み込まれているとされるが、「出雲・根の国系」(←熊野・尾張?) の「火」、そして「大和・高天原系」の「日」という関係もあり、その相補関係(裏表?) が、伊勢神宮の、「内宮」の「日」、「外宮」の「火」ということにもなっている?!

### (3) そこにおける重要人物の創作(捏造?) と関係づくり

#### ○「天津神」(天神系) と「国津神」(地祇系) の創作と振り分け!

こうした中で、おそらく記紀編纂者達は、上記のような「出雲・根の国系」(←熊野・尾張?) の「火」と「大和・高天原系」(←吉備・物部?) の「日」という関係(相補、否、「表裏」の関係?) において、そこに必要な重要人物を、まさに神々として創作し、それらの関係づくりに大いに腐心した?!

その代表的なものが、「神代」においては、「天照大神」と「素戔嗚命」であり、「人代」においては、「神武」であり、「崇神」であり、「神功皇后」であり、「応神」であった?!そしてまた、「武内宿禰」であり、「住吉大神」であった?!

しかも、史実?としては、「高天原(系)勢力」が、先住の「根の国/出雲(系)勢力」に「国譲り」をさせた!ある意味「乗っ取った?」ということであるから、その記述には、それなりの神経は使った?!まさに、それが、「天照大神」と「素戔嗚命」の関係(いわゆる「五男神」と「三女神」!),そして、「大国主命」の話(国づくり→葦原中つ国?)ということになる?!

そういう中で、例えば「素戔嗚命」とか「武内宿禰」は、個人か(たとえ彼自身は実在していなくても→「武内宿禰」などは、信じられない「長寿」が、それを示している!),それともある集団の象徴(的人物化)か(蘇我系氏族群?)?!多分?後者であろうが、それは、「紀(木)氏」(西北部九州・肥前の葛城勢力→大和葛城地方への移動)、すなわち、「紀ノ川」→瀬戸内海四国沿岸ルート of 諸族である?!

そして、もう一方の「物部・尾張氏系」は、「大和川」→瀬戸内海中国(山陽)沿岸ルートの諸族と考えられるが、それら海の勢力(海人族)のネットワークの協力と離反の動きが、近畿「倭(人)国」の実態(体?)を形づくってきた!そういうことを示しているのではないか?ということである?!

そして、その後、彼らは、大きくは「瀬戸内海航路」(物部・尾張系→住吉系)と「日本海航路」(紀(木)氏→四国・太平洋沿岸部→大和を經由→山城→近江→越・丹波→山陰=「天日矛」系→武内宿禰?)というように分かれ、一時期は、後者の勢力が近畿大和の覇権を握ったが、最後には、前者の諸族が覇権を奪った?!

ちなみに、この「紀(木)氏」(西北部九州・肥前の葛城勢力→大和葛城地方への移動)、すなわち、「紀ノ川」→瀬戸内海四国沿岸ルートの諸族と、もう一方の

「物部・尾張氏」、すなわち、「大和川」→瀬戸内海中国（山陽）沿岸ルートの諸族との関係であるが、前者は、おそらく半島南部の「伽耶／多羅系」であり、後者は、「百済系（本宗家沸流系余氏）」ではあるが、半島南部に移動していた？「残国」勢力と考えられ、実は、彼らは、もともとは「扶余系」の人々ではなかったか？だから、列島進出（移住？）においては、彼らは、一応の協力関係を結ぶことが出来た？！

余談ではあるが、例の「兼川晋氏」によると、我が国では、何故「百済」と書いて、「くだら」と呼ぶのか？その理由は、本当は？定かではないのであるが、同じ扶余の出身である「多羅<sup>たら</sup>」の人達は、「多羅<sup>たら</sup>」よりも先の人々（国）であるので、彼らを「古い多羅」、すなわち「百済→旧多羅」としたのではないかということである？！

もし、そうであるとすれば、我が列島には、その「多羅」から来た人々がいて、後から来た？「旧多羅→百済」の人達と、それなりの関係を作った？「タラシヒコ」「タラシヒメ」というのは、「多羅から来た男／女」のことであり、例の「アメタラシヒコ（天足彦）」も、実は、その系統なのではないか？それが、後に？、「筑紫の君」とも呼ばれたのではないか？

そう考えると、「多良<sup>たら</sup>岳」（肥前）とか、「安達太良<sup>あだたら←あらたら？</sup>山」（福島）の名前も、そこに由来すると考えれば、これまたよく分かる（「安羅<sup>あら</sup>」も、「多羅」も、いわゆる「伽耶7国」である！）?!とりわけ、「多良<sup>たら</sup>岳」（肥前）の名前は、ある時期肥前国に建国された「貴／木／基肆国」が、神功皇后・武内宿禰の勢力と考えられる（→「大善寺玉垂宮」／「高良大社」→高良玉垂命／藤大臣）?!

彼らが、その「多羅」出身であるならば、「狗邪韓国→金官伽耶」だけでなく、「安羅」や「多羅」等の、他の伽耶諸国と「百済」の関係が、さらに密接なものとなってくる?!実は、そこに、「応神天皇」や「神功皇后」「武内宿禰」の勢力の謎を解く鍵が潜んでいるとも言えるのである?!別言すれば、「扶余」の要素と「伽耶」の要素の錯綜？が、ある意味理解できるようになるのである?!

#### 4. 史実としての、建国の大まかな流れ?!

##### (1) 前史（「倭国大乱」まで）

##### ○「渡来系倭人」の、波動的な？、列島各地への渡来・進出

いずれにしても、次に、実際の我が国の建国がどのようになされていったのか？その辺りが、改めて問われてくることは言うまでもない！「縄文時代」はともかく（皮肉にも？これについては、不毛な？論争はない?!）、「弥生時代」になって（紀元前8 or 6世紀以降?）、いわゆる「倭人（種）」が、朝鮮半島南部や列島各地に移動・集住し始めるわけであるが、ここでも、その大まかな流れを確認しておきたい（彼らは、「漢民族」の進出によって、中国大陸／揚子江中・下流域から西、南、そして、東の方へと追いやられた！ちなみに、その東の方へ移動していった人々が、俗に「倭人（種）」と呼ばれた？）！

なお、これについては、先の「修正試作版」では、1. 倭国（→日本国）の源流～日本人のルーツはいかに？～（(1)「縄文」「弥生」の「二重構造論」（二重構造モデル）、(2)三つの？渡来ルートと混住・混血の進行、(3)やがて、「渡来系弥生人」が「大きな変動？（大乱）」をもたらした?!～三つの渡来系倭人による「倭国→日本国」の創出?!～）という形で、かなり大胆に記している?!

ここでは、その再掲的なものになるが、まずは、考古学や分子人類学等の発展・寄与によって、かなりの真相解明がなされているということである。すなわち、日本人の原型は、アジア大陸南部に出現した「(古)モンゴロイド」（「蒙古斑」で有名?→三つのルートで漂着?→縄文人→縄文系弥生人）にあり、その後、弥生時代以降に、主として半島南部から渡来した「新モンゴロイド」（ツングース系?→倭人系弥生人）との混住・混血により、現在の日本人が形成された。

つまり、渡来系弥生人（≒倭人）がやってきて、先住の縄文人と交わり（遺伝的形質は、「弥生」の方が圧倒的に強いが、文化的には「縄文」が基層となっている?!）、現代に続く日本人が形成されたということである（→「二重構造論」あるいは「二重構造モデル」と呼ばれる!）。

ただし、実際は、そんなに単純ではなかったようであり、例えば、その中で、北海道や東北と沖縄や九州南部には、いわゆる「縄文人」の形質を色濃く受け継ぐ人たちが主に居住しており（北海道に住むアイヌの人々や南西諸島の人々、とりわけ宮古島?の人々は、より強く（古）モンゴロイドの形質を受け継いでいるとされている!）、他方で、北部九州から近畿地方には、水田稲作等を携えた、いわゆる「弥生人」の特徴を色濃く持つ人々が、数多く住んでいたとされている。

しかし、そこでは、「縄文」と「弥生」の、単純な（一括りにした?）混住・混血、あるいは入れ替わりもなかった?!すなわち、これについての最新の研究では、約4万年前、ユーラシア大陸のどこかから（複数ルートで）、縄文人の祖先（新人）がやってきた。ちなみに、その「縄文人」の祖先系統（単一の祖先で

はない!)は、2万年以上前に大陸集団から分かれていったものとされるが(固有化?)、1万6千年前には、土器生産が始まり(→定住生活の証拠!)、縄文時代に突入したとされる。ただし、人種的な大きな入れ替えはなかった。ここまでの人々が、「第一層ヤポネシア人」(一つには括れないので、このような総称?とされているそうである!)と呼ばれるということである。

一方、9千年前、揚子江流域で水田稲作が始まる。それによって、人口増加が始まり、沿岸部の「海の民(倭人?)」が圧迫されて、海洋(ヤポネシア)へ動き始める。その中で、約4千5百年前、日本語の祖語を話す「第二層ヤポネシア人」(ただし、彼らは、「採集狩猟民」であった)が列島へ到着する(そこで、言語的には置き換わったのかもしれない?!)。

そして、約3千年前、北部九州へ水田稲作が伝わった。そこから「弥生時代」が始まり、その集団が、「第三層ヤポネシア人」とされる。彼らは、遺伝的には、「第二層ヤポネシア人」と近縁とされ、水田稲作は、700年ほどの間に、東北地方を除く、本州・四国・九州に広まっていき、先住者である「縄文系の人々」(第一層ヤポネシア人と第二層ヤポネシア人の混血子孫)と、農耕民である「第三層ヤポネシア人」が混血していった(これは、通説?の、単純な「二重構造モデル」とは、多少違うものとして、「内なる二重構造モデル」と呼ばれるらしい→斎藤成也:斎藤・関野・片山・武光 他『大論争 日本人の起源』宝島社、2019年11月より)。

参考までに、ホモ・サピエンス(新人)は、30万年前頃までにはアフリカで誕生し、遅くとも5万年前頃には、ユーラシア大陸各地に散らばったとされる。我が国の「縄文時代(「新石器/磨製石器時代」)は、約1万6千年前に始まり、その前の1万6千年前~3万8千年前までは、「後期旧石器(打製石器)時代」と呼ばれているらしい。

なお、旧石器時代は「氷河時代(更新世)」であり、寒冷乾燥下にあった。ただし、氷期(寒冷期)と間氷期(温暖期)が交互にあった。そして、「後期旧石器時代」は、「前半期(3万8千年前~3万年前)」と「後半期」(3万年前~1万6千年前)に分けられるということである。

この中で、現在得られている最古の人骨は、「港川人(約1万8千年前前後)」「白保人(2万7千年前以降?)」であり、彼らは、「後期旧石器時代」人ということである?!しかも、彼らが、いわゆる「縄文人」の祖先であったということは、基本的にはないらしい?!

さらに、「前期旧石器時代」もあったわけであるが、それは、「新人」の進出が4万年前ということらしいので、「旧人(ネアンデルタール人)」(→アジアの旧人:デニソア人 or フローレス人)、あるいは、もっと以前の「ジャワ原人」「北京原人」のような、「原人」であった可能性もあるらしい?!いずれにして

も、そこには、人類の生活の痕跡を示す証拠が無数にあるということである！

ということで、ここでの問題は、どういう集団・人々が、いつ、どこから、どのようにして、日本列島へ到着し、生活を営んでいたかであるが、もちろん、その遺伝学的系統関係からも、その細かい事実確認が得られるわけではない。

とは言え、大まかには、アフリカを出た新人の一群が、中近東を經由して、アジア大陸東部（スンダランド？）に到達し（→モンゴロイド）、一部は南東部に定着し、また一部はバイカル湖周辺まで北上し、そこで寒冷地適応化して（→新モンゴロイド）、そこからまた、その一部が南下してきて、日本列島にも定着してきたということだけは言えそうであるということである。

ただし、その時期、ルート等は、かなり複雑で、しかも、「縄文から弥生へ」は、従来考えられていたものとは違って、狩猟採集（先住縄文人）から稲作農耕（渡来弥生人）へと、単純に、しかも急激に置き換わったものではなく、結果としては、「直線（継続）的」に、しかも「緩やかに」、その時々の人々が、互いに影響を与え合いながら、融合？していったのではないかということである（これを表して、「関裕二氏」は、「バケツリレー」と呼称されている！）？！

言い換えれば、「新来の」弥生人（≒倭人）が、生産力（稲作）、武力（鉄器・青銅器等）に物を言わせて？、「旧来の」縄文人を、無理矢理？排斥・駆逐していったのではないということであり、そこでは、新旧の生活用品（土器等）、生産物や文化の相互交流・取捨選択が行われ、そのことが、その後の日本人の価値観や生活様式に、大きな影響を与えているということである！

端的に言えば、「弥生的」なものを適宜取り入れながら、「縄文的」なものが基層となり（語彙も？）、今日の日本（人）が形成されたということである？！繰り返しになるが、この先住の縄文人とは、約1万年に亘って、各地・各様に辿り着いた？幾つかの部族（家族もある？）であり、ある特定の種族集団を指すわけではないということである！

一方、最近では、「修正試作版」でも紹介したように、「ヒトゲノム」の解析からもアプローチがなされており、縄文から弥生を含む、壮大な？日本人の「三段階渡来モデル」（3つの大きな波があるということ！）も示されている？！これについては、先に述べたことと同じとなるが（→「内なる二重構造モデル」）、その概要については、「修正試作版」で示した通りである！

なお、これを受けて、「修正試作版」では、その流れを図示したものとして、図1、図2を掲げているが（本稿では、省略！）、まだまだ、正確な人（部族・集団）の動きが描かれているとは言い難い。しかしながら、大きくは、こうした流れの中で、「縄文」から「弥生」が推移し、しかも、そこには、「縄文」の「魂」が脈々と流れているわけでもある？！

ちなみに、その魂とは、換言すれば、自然との調和（畏敬と祭祀）、異なるも

のとの融和（交流と取捨選択？）ということであるが（ただし、それは、「和解」、悪く言えば「妥協」かも？）、例えばそれが、後世になって、聖徳太子（架空？）に、「和を以て尊しとなす！」と言わせたのでもあろうか？！

もちろん、それらは、実際には、ほとんど正当には実現され得ないものであったが（だからこそ？）、その精神（だけ？）は大切にしたいということであり（諍いを避ける？）、それは、「弥生人（文化）」に対する、「縄文人（文化）」の対処の仕方（あり方）を、どこかで？示しているということでもあるわけである？！

接触・交流はするが（せざるを得なかった！）、自分達にとって良いものだけを、慎重に？取捨選択する（自分達のものとして工夫をし、採り入れる！）？！苦労しながら、やっとの思いで辿り着いた「最果ての地」で、静かに（平和に？）暮らしていきたい！それが、「縄文人」の「思い」であり、「生きる力」「生活の知恵」でもあった？！そういうことである？！

ただし、そうは言っても、明らかなように、そうした「縄文期」から、新たな「弥生期」が始まったことは事実であり、その「弥生期」が、次にまとめた、まさに「渡来系弥生人（倭人）」によってもたらされたことは、これまた明らかなわけである！再掲すると、

#### ① 江南系倭人（稲作民・海人集団？）

まず、一番早いのが、多分？「江南系（揚子江下流域）倭人」で、黒潮に乗って、「南から（南西諸島経由？）」やって来た人達であろう（→黒潮ルート）？！もちろん、直接東シナ海を横断（漂流？）して、九州中南部あるいは北部、そして、周辺の島々に住み始めた人達もいたろう（→直接渡来？）？！彼らは、越人（呉・越→「河姆渡<sup>かぼと</sup>遺跡」等）の一派で、徐々に、その北方の漢民族に追いやられ？、タイ・ビルマ（ミャンマー）等の山岳地帯に向かったものと、海に出て、日本列島や朝鮮半島周辺に向かったものに分かれた？！

ただし、この「江南系倭人」は、他の「倭人」と同じように、ある時期シベリアのイルクーツク周辺にまで北上していた「ブリアード人？」（新モンゴロイド）の一派で、揚子江下流域にまで南下していた集団である？！彼らは、雲南発祥の稲作（水稲？）を行い、一方で、海上を往来する「海人集団」でもあった？！

そして、彼らは、最後には、北部九州でまとめ（→「奴国」→最初の「倭人国家」？！）、その一派？は、その後日本海回りで、山陰（出雲）にまで到達した（出雲には南方系の要素がある！→例えば「海蛇信仰」）？！

先に見たように、渡来系の形質の特徴からも、それが読み取れるらしいが、おそらく、彼らが、いわゆる「安曇族」とか「加茂（鴨）族」、そして「出雲族」とか呼ばれた人達であったろう（全国各地に作られた「環濠集落」は、おそらく彼らによるものか？）？！そして、「記紀」では、それらの集団を凌駕（再編？）していった象徴的な人物として、初代「神武」を描いているのではないか（ち

なみに、ここの部分の解釈は、先の「修正試作版」とは異なっている！) ?!

## ② 伽耶・新羅系倭人（交易航海民・鍛冶集団?）

次に渡来したのは（必ずしも順序性があるわけではないが?）、同じ江南系の倭人ではあるが、遼東半島や朝鮮半島にまで北上していた人々で、その地域の実情のため（気候変動、政情不安、異民族の南下?等。もちろん、北方系との接触や融合も一部あった?）、再び南下し、朝鮮半島最南端、そして対馬、壱岐を介して、北部九州等に渡来した集団である?!

彼らの中心は、例の「伊都国」辺りに上陸し（王墓?「三雲遺跡」等を残した?）、その後、遠賀川流域・筑豊、そして「吉備」を經由して（おそらく、「出雲」を抱き込んで?）、近畿・大和へ移っていった?!ここでは、①の集団と区別するために、「伽耶・新羅系倭人」と呼んでおきたいが、彼らは、基本的には、銅や鉄、朱（硫化水銀）、さらには、木材等?を求めて動いた「交易航海民・鍛冶集団」でもあった?!

ちなみに、「伽耶」と「新羅」は、異なる国（地域集団?）ではあるが、その前身の「弁韓（辰）」と「秦（辰）韓」は、種族的には同じと見なされ、後に、伽耶のほとんど?は新羅に糾合され、列島に渡来していた人達は、もう一つの「百済」とは違う（そう思われた?）、「新羅」という括り（最終的には、朝鮮半島は「統一新羅」となった!）、アイデンティティを有していた?!そのことも含めて、ここでは、彼らを「伽耶・新羅系」とする次第である!

## ③ 百済・扶余系倭人（騎馬民族・扶植移植民?）

最後が（時代的にも?）、同じ弥生人（→古墳人）ではあるが、北方騎馬民族系の「百済・扶余系倭人」である!彼らは、朝鮮半島南部（いわゆる「三韓（馬韓・弁韓・秦韓）」と呼ばれた地域）の馬韓（南西部）で、「百済」と呼ばれる国を建国した集団であるが、そこでは、北方騎馬民族系扶余族と倭人集団が融合し、その後、高句麗の南下政策等によって、その一派（王族?）が、北九州（筑後地域?）、そして、近畿・大和へと乗り込んできた?!多分?、彼らが、俗に言う「大和朝廷」の確立を成就した（「応神」期以降）集団であろう?!一応、ここでは、彼らを、「騎馬民族・扶植移植民」と呼んでおこう!

ただし、このことについては、ある意味残念ながら?、「記紀」においては、「仲哀」「神功皇后」「武内宿禰」「応神」、そして、「継体」「欽明」等、かなりの創作や捏造が施されている部分でもある?!しかも、一方で、中国史書（『宋書』等）に見える「倭の五王（讚・珍・済・興・武）」の時代は、まさに、この「百済・扶余系倭人」による「倭国→日本国」への移行期でもあった?!

ということで、問題は、その「倭人（種）」達が、どのように我が列島に移住・定着し、その建国?をなしていったのかということになるが、今のところ、それは、時代順的には「(中国) 江南系」→「伽耶・新羅系」→「百済（北方）系」

と変遷していったのではないかと、大枠では受け止められるわけである?!つまり、その三つの勢力（渡来系倭人）が、波状的に？、列島各地に渡来・進出してきたということである?!

もちろん、そのように明確に区切ることは出来ないと思われるが、主力？という意味では、まさにそういうことだったのではないか?!ただ、現時点で最も把握（解釈）が難しいのは、その「伽耶・新羅系」→「百濟（北方）系」の移り変わりの実相なのであるが、繰り返すように、「記紀」は、その部分を一番量している（隠している？）わけでもある?!

## (2)「倭国大乱」とその後の動き?!

そこで、改めて、先の三つの倭人集団の関係（絡み）であるが、ここでは、その「大枠（骨格）」について確認しておく、まず、我が列島には、それ以前に、「縄文人」と呼ばれる人達が（ただし、方々から来た！そして、様々な種族の人達であった?!）、基本的には、南の方から移り住んでいたが（一部？北回りもある?!）、その後、その「(古) モンゴロイド」から分かれ、北上した極東で寒冷地適応を果たした「新モンゴロイド」と呼ばれる人達が、気候変動等に伴って南下し、日本列島にも押し寄せてきた。

その「新モンゴロイド」の人達の一部が「倭人(種)」(中国江南地方からの人々?!ただし、それは、中国側からの呼び名である！発音は、「わ」または「うい」?)であり、その一部が、西日本や朝鮮半島の南端に住み着いたわけであるが、その中で、主として西日本に渡来してきた人々を、あるいはその時代に生きていた人々を、我々は「弥生人」と呼んでいるわけである！

ただし、そうした「縄文人」と「弥生人」は、ある時期完全に入れ替わったわけではなく、むしろ生活及び文化的には融合し合い、その後「倭人国家→倭国」を形成していった?!当初、北部九州、とりわけ博多湾岸の「奴国」や「伊都国」が中心であったが、2世紀後半に「倭国大乱」があり、内陸（有明海沿岸？）部の「邪馬台国」を盟主とした「女王国連合」が、その中心となった?!そして、その「倭国大乱」が、その後の、北部九州と近畿（←出雲／吉備）における「倭人国家→倭国」の二重存在の、最初の画期を作ったということである?!

すなわち、近畿（←出雲／吉備）にも、倭人集団は進出しており（北部九州の人達と同族?!→海人族/安曇族等）、「倭国大乱」を契機として、「女王国連合」と同じ時期に、別の「倭人国家？」を創り上げていた（それ自体は、後者の若干後か?）?!そして、彼らは、日本海沿岸や太平洋沿岸に東進していき、東海・北陸・関東・東北の地へ、その版図を広げていった（開拓・移住?!）。その後、その出雲／吉備や近畿の倭人集団は、「大和纏向」に祭政都市を築き、その後の「大和王権」に繋がる一大勢力を形成したということである?!

## (3)「倭の五王」による「倭国制覇」?!



次に、その後の、「倭国（全体）」の推移ということになるが、残念ながら、それについては、文献的には、まったく掴めない（「空白の4世紀」？）！つまり、5世紀に入って、「倭の五王」のことが、中国南朝系の史書（「宋書」等）に見え出すのであるが、今のところ「記紀」の苦心？（「万世一系」の創出！）にも拘わらず、この間の実態（事実）が、まだまだ明確とはなっていないのである？！

例えば、その「倭の五王」は、3世紀末までの倭国（「邪馬台国」連合）の、何らかの（直接の？）後裔なのか？それとも、彼らは、新たな勢力としての「覇権王（政権）」なのか？あるいはまた、それは、件の「邪馬台国比定地論争」とも関わってくるが、北部九州に出来た政権なのか？近畿大和に出来た政権なのか？そうしたことが、本当は、まだよく分かっていないのである？！

私自身としては、その「倭の五王」政権は、北部（北西部？）九州に新たに渡来してきた「百済（王族→残国兄王・藤？）」の勢力であり、その最初の本拠地が、現在の筑後地方（「大善寺玉垂宮」周辺？）にあったと考えており、彼らが、北部（北西部？）九州を起点として、その後、拠点を近畿（河内→大和）に移し、彼らの後裔達が、当時まで併存していた「二つの倭国？」を、言わば「統合」した形で、「倭国→日本国（「百済系倭国政権」）」を実現させたと捉えているわけである？！

もちろん、そのプロセスは、そんなに単純なものではなく（「筑紫倭国」と「豊国倭国」の存在と離合集散?!→「磐井の乱」等）、その主力が近畿に移動した後も、その二つの百済系勢力は、その祖系（「温祚系」と「沸流≡仇台系」）の違い等から、双方の主導権争い？を、その後も続けていったとしているわけである?!いずれにしても、それが、まさに「倭の五王」による「倭国制覇」の事実であり、実相であったということである（「天智系」と「天武系」の相剋！←兼川晋氏）?!

ちなみに、その「百済系倭国政権」の主力は、いわゆる北方騎馬民族の「扶余系」だということであり、その「百済」は、ある時期「馬韓」と呼ばれていた地域の一国であるが、そこは、まさしく「倭人（種）」の国（→「辰国」？）でもあったわけであり、そこに、南方系の要素と北方系の要素が、言わば「混淆」していたわけでもある？！

しかも、それらの関係（要素）は、馬韓（→百済）と呼ばれた地域だけではなく、「辰（秦）韓（→新羅）」や「弁韓（辰）（→伽耶）」にも少なからずあり、それらの勢力や文物との関係（交流や渡来）が、件の「倭国→日本国」の成立に大きく関わっていたことは間違いないであろう?!ただし、その辺の状況が暈されていたり、意図的に隠匿されていたりしているのでもある?!とにかく、この辺りの事情（真実）が分かれば、我が国の歴史（古代史）も、もっと明確に見えてくるわけである？！

## 5. 改めて見えてくる真実?!

### (1)二つの「倭国」、二つ（以上?）の王権（勢力）の攻防（「北部九州」と「近畿大和」への二極分化?!）

ということで、まだまだ、その真実の具体は、なかなか描けないのであるが、しかしながら、とにかく、そこに、二つの「倭国」、そして、そこにおける二つ（以上?）の王権（勢力?）の攻防（大きくは「北部九州」と「近畿大和」への二極分化?!）があったことは、ほぼ間違いないであろう?!

私は、まさにそこに、「記紀」の大きな謎（「二つの倭国」の存在を前提としていないこと!それが、捏造・からくりの根源?）を見出そうとしているのであるが、その主張が、いかほどの信憑性（説得性?）があるのかどうか?不遜な試みとは重々承知しながらも、その解明（証明?）が、本論の目的なのである!

以下、改めて、そのことについて、幾つか、そのエポック的なものを挙げておきたい。何故なら、それらが、ここで言う「二つの倭国」の実体（証拠?）であり、それらが、真の我が国の建国史を形づくっていることは、ほぼ間違いないと思われるからである?!

#### ○まずは「倭国大乱」（2世紀末?）に、その萌芽?がある?!

そこで、まずは、その（「二つの倭国」の）萌芽?であるが、これは、『後漢書』や『魏志』（「倭人伝」）からも明らかなように、北部九州には、既に（1世紀前後?）、いわゆる「倭人諸国（クニ）」（100余国）があり、中国（大陸）へ使いを遣ったりしていた!その証拠（遺品/威信材?）が、志賀島から出た「金印」（57年「漢倭奴国王」へ授与）であり、銅鏡（漢鏡）、銅剣、銅矛等である!

「奴な/ぬ?国」や「伊都いと/いっ?国」と呼ばれていた地域・国（吉武・高木/須久・岡本/三雲・井原遺跡等）が、その中心であったわけであるが、そうした遺跡・考古物等からも、この北部九州が、逸早く「国（連合）」としての形を作り、特に、銅、そして、鉄の入手、分配（販売?）によって、大きな勢威（支配?）を成していたことは明らかなのである（それは、半島南部と北部九州を跨いだ「倭人海域国家」であった?）!

しかし、その「鉄」（最初は、「青銅」の原材料、そして、「朱（硫化水銀）」?）の支配に関わって、他の地域、具体的には、「吉備」や「出雲」、あるいは「近畿」や「越」等との関係が微妙に変わっていった?!多分?「倭国大乱」（2世紀後半）とは、そうした状況（構図）の中での、各地域、各部族・勢力の、言わば、自らの「国（部族・勢力）」の存亡を賭けた戦いということかと思われる（とりわけ鉄の支配と分配は、最も重要な要素であった?）?!

とにかく、それまでの北部九州の優位（支配?半島や大陸に最も近いということも有利な条件であった?）に、何とか立ち向かおうとした部族・勢力が、もう一つの「中心」を、近畿大和に作ろうとした?!だから、そこに、「二つの倭国」

の萌芽があった？つまり、倭人国家（連合）の「二極分化」ということであるが、だが、ただそれだけであれば、何も、二つの「倭国」ということにはならない？別の国（名称）でもよかったのである？！

しかしながら、そうした近畿大和の部族・勢力も、その後巖然？と、自らの国（版図）を「倭国」としていることは明らかなのである！しかも、それを、「倭→大倭→大和→日本（国）」としているのでもある！そして、それらは、ある時期には、すべて「やまと（うまと）」と呼ばれていた（呼ばした？）のでもある！

そして、一方でまた、北部九州には、たとえ「東遷」とか「東征」とかという事実があったとしても、その後も、ある王権、ある氏族・勢力（筑紫王朝？本来の「倭国」！）が、そこに居続けていたことは、これまた、歴然とした事実なのである！

かの、600年に隋に遣使した「天足彦アマメタラシヒコ？」（日出処天子）の王統（上宮王家？←九州物部氏←「筑紫君氏」？）が、まさにそれである？！また、その周辺の史跡（「八女遺跡群」や「太宰府」等の存在）からも、そのことが容易に推察されるのである！

したがって、このことは、意外と無視されているとも言えるが、ここでの「二つの倭国」の可能性（根拠）は、実は、甚だ明瞭なのでもある？！要は、ここでは、「倭国」が、ある時期から近畿大和へ移動して、北部九州からいなくなった訳では決してないということであるが、多少変な言い方とはなるが、単なる「東遷」とか、「東征」とかというような形では捉えられないということである！

しかも、近畿大和の氏族・勢力が、一部、当地（北部九州）に移動（出戻り？）している？！そして、それは、例の「邪馬台やまと？国」の出現と関係がある？私自身は、そういうことになると考えているが、近畿大和の方も、自らを「倭国」と呼んでいるのであるから、その北部九州の「倭国」と、まったく無関係だとは言えないということでもあるわけである（考古学的にもそうであるが、実は、遺伝学的にもそう言えるようである？！）！

冷静に捉えれば、近畿大和の方も、ある時期に（一度とは限らない？）、北部九州から（だけとは限らないが！）、あるいはそこを經由して、当地へ移動・進出していたことは事実だということである！

しかも、航海民海人族（「安曇族」等）は、早いうちから（弥生中期頃から？）、北部九州を根拠地として（志賀島／「志賀海神社」）、日本海沿岸、あるいは東海、北陸、関東、東北？の方までも、移動・進出（往来？）していたことは明らかなのである（有名な信州「安曇野」／「穂高神社」も、その一つである！彼らは、もともとは、すべて？北部九州にいた江南系倭人集団／安曇族であった？）！

したがって、もし、そういうことであれば、そうした動きを、改めて丁寧に見ていくことによって、それこそ「二つの倭国」の真実が見えてくるというこ

とになるが、とにかく、北部九州と、その他の地域の人々が、主として鉄の支配を巡って、ある時期から二つに割れた！そして、その後者の集団の主力（中心？言い出しっぺ？）が、北部九州と地理的に近い「吉備」と「出雲」であった?! とりわけ「出雲」は、古代史最大の謎とも言えるが、「記紀神話」とは異なる「出雲神話」を載せる『出雲国風土記』、さらには「出雲国造神賀詞（いづものくにのみやつこのかむよごと）」（『延喜式』等）は、まさにそれらを示す証拠品でもあるわけである?!

ちなみに、ある意味「出雲（神）」は、現皇室の原郷なのではないか?! 現在も続けられているという、「出雲大社」の秘儀（「鑽火祭（亀太夫神事）」「夜逃げ神事」等）は、そのことを示している?! ただし、やはり、これだけでは何とも言えない?! しかしながら、ヤマト黎明期における「出雲」の存在は、誠に重要であることには変わりがない?!

すなわち、「記紀」においては、「国譲り」をさせられ、「出雲（杵築）大社」という、ある種の「幽界?」に閉じ込められている「大国主命」（←素戔嗚尊）等の「出雲（神）」の存在、一方で、考古学的には、「神庭荒神谷」、「加茂岩倉」等の各遺跡（出土物がすごい!）、さらには、「西谷墳墓群」「妻木晩田遺跡」（出雲特有の「四隅突出型墳丘墓」! 「出雲（神）」族のシンボルか?）等の存在は、決して見逃せないのである（何より、著名な「神在（有）月」には、出雲（神）の栄光? が、幽かではあるが、確かに感じられる!）?!

ただし、その経緯の中で、多分? 「出雲」は、北部九州寄りの「守旧派?」（『日本書紀』の「出雲振根いづもふるね」に投影?）と吉備寄りの「新勢力派?」（同じく、「飯入根いりね」に投影?）に分かれた?! 大胆な仮説? とすれば、後者は、攻め入って来た「吉備」と組んだ? あるいは、そこに攻め込まれて踵を返した? そこで生まれた新たな連合勢力が、まさに「吉備・出雲連合?」という形で、近畿大和に移動・進出し、最初の「大和王権」（「三輪王朝」）を樹立した?!

そして、それが、「記紀」に示された、かの「（出雲の）国譲り」、「天孫降臨」の物語となっていった?! そういふことになると思われるが、まさにそのように見ると、その後の近畿大和の史実?（「大物主」の物語や「纏向遺跡」・「大倭古墳群」等）が、よく理解されるということである?!

なお、古墳時代以前、出雲地方はもちろんであるが、古大和（三輪地方）にも出雲（神）族がいたとされており、その一族「（意）富<sub>おお</sub>家→多氏／和珥氏?（江南系?）」によると、第9代天皇（開化）までは、「（意）富家系」と「倭直系」（「珍<sub>うず</sub>彦」／海部氏? 瀬戸内海海人族?）の王朝が交代で続き、神武～第3代は倭直系、第5～6代は出雲／（意）富<sub>おお</sub>家系、第7代孝靈は倭直系、第8～9代は（意）富家系だったという（「富家<sub>おうけ</sub>家伝」）?!

これが、まさに、上述の「吉備・出雲連合?」だとしたら、第10代「崇神」

と第8～9代は「(意) 富家系」との関係があり、「記紀」における初代「神武」と「饒速日にぎはやひ／トミ(鳥見→富?)の長脛彦ながすねひこ」が関わる逸話は、そのことを暗示(投影)しているとも言える?!一般には、第2代「綏靖」～第9代「開化」までは実在とはされていないが(「欠史8代」)、ひょっとしたら、その話は、この「吉備・出雲連合?」の話(実体?)なのかもしれないということである?!

○その「倭国大乱」とは、具体的には、一体どのようなものであったのか?!

ということで、これが、その後の「倭国→日本国」という建国の流れを作った動き(因果)となるが、改めて、その「倭国大乱」が、我が国古代史の、最初の画期を作ったということは、おそらく間違いのないであろう?!まさに「倭国大乱」が、我が国建国における大きな転換点をなしていたということであるが、問題は、その大乱が、具体的には、一体どのようなものであったのかということである?!そして、その大乱と「邪馬台国」(卑弥呼・台与)が、どのように関係しているのかである?!

これについては、例えば、先に覇権を確立していた「倭(委) 奴国」が、後発の?「邪馬台国(連合)」に敗れ、(その一部?が)東方に逃れ(移動・扶植?)、その後、近畿(奈良盆地)に「倭国(大和)」を建国した?!その主力が「安曇族」であり、彼らが、全国(山陰／出雲→北陸→越→信濃方面)へ拡散したということかもしれない(『新唐書』→「日本古倭奴也」)?!

したがって、その「倭国大乱」に関わっては、AD57年に「漢倭(委) 奴国王」の金印を貰った王(安曇族長?)及び、107年に「倭国王」として後漢に遣使した「帥升すいしょう?」(伊都国 or 倭面土国王?)の国に混乱が起き、やがて有明海沿岸部の新興国?「邪馬台国」(卑弥呼)を中心として、倭国が再編されたということか?!

この場合、「邪馬台国」は、九州中部(筑後・肥後地域)にできた新しい国ということになるが(これは、おそらく57年、107年の倭国の範域には入っていなかった、新たな国(勢力)である?)、その時期(2世紀末)、この「邪馬台国」が、最終的に倭国を統一(少なくとも、九州島内で!)したということか?もし、そうだとしたら、そこでは、何が、統一(共立)の理由(担保)だったのか?

考えられるのは、①倭国内部から、ある勢力が独立して、強くなった。②内部の一部と外部の勢力・国が、同盟 or 協力して権力を掌握した。その場合、外部からの誘い、圧力があって、そうなったか?逆に、そこに支援を求めたかである(→出雲・スサノオ／大国主との関係?)?!あるいは、③全く新たな勢力・国が、まさに占領・征服して権力を掌握した?!ちなみに、現時点では、②であったと考えている(ただし、そのどちらの場合であったかは、今のところ不明?)?!

(2) 近畿大和王権(勢力)の勝利(倭国→日本国)

○「記紀」（主として『日本書紀』）の編纂方針と、そこにおける藤原氏（不比等）の作為からみた、その事実?!

次に、そうした「邪馬台国」の出現と、「記紀」に描かれた、いわゆる「大和王権」の、その後の推移ということになるが（もちろん、「記紀」は、前者のことについては、直接的には触れていない!）、結局は、「近畿大和王権（勢力）」の勝利（倭国→日本国）ということで、すべてのことが、その王権（勢力）の事績とされているということである!

それが、まさに、「記紀」（直接的には『日本書紀』）が採用している「編纂方針」であり、そこにおける「藤原氏（不比等）の作為」だということであるが、その大まかな骨子を確認すると、以下のものであった?!

・「神話」を創作し、長い歴史を有する国とした!

まず、「神話」を創作し、長い歴史を有する国とした!ただし、少なくとも当（編纂当時の）政権の発生時期や具体的な状況は、事実に基づくものとはした!そこに導入されたのが、いわゆる「讖緯（辛酉革命）説」であるが、そこからはじき出されたのが、初代神武の即位年「B C 660 年」という数字である!しかも、問われるのは、そもそも、何故それを、「推古天皇」即位年?から起算したのかということである?!

それは、推古天皇は、架空の存在とも言われるが、彼女を最初の「女帝」とし、その後の女帝「皇極/斉明」、そして、「持統」「元明」の正統性・正当性を、その虚偽の作為から主張する意図があったのではないか?!そして、それを、他でもない「辛酉（この年に「革命」が起きるとされる!）」年にもってきたということである（つまり、たまたま、推古天皇の即位年?が辛酉年であった?あるいは、そのようにした?!ちなみに、天智の即位も、辛酉年 661 年であった?!）。

しかし、そもそも当の政権（藤原氏）は、どこかに後ろめたさがあった?!例えば、その政権（勢力）は、篡奪（乗っ取り）者、あるいは宗家の傍流であった?!したがって、可能な限り真実を隠し、ごまかし、偽造しようとしたということでもある?!そして、そのためのごまかしや捏造の部分は神話（神代）の形とし、都合の悪いところ（本当のこと・知られたくないこと等）は暈したり、はぐらかしたり、変質させたり、時期等をずらしたりしたということである?!

具体的には、例えば、先住・先在の出雲勢力や九州倭国（邪馬台国を含む）の存在、そして、それらとの関係である!高天原（神生み・国生み）神話、三貴子誕生、スサノオ放逐、大国主による出雲の国づくり及び国譲り、天孫降臨、海幸山幸物語（日向神話）等が、まさにそれである。初代天皇を神武＝始馭天下之天皇（ハツクニシラススメラミコト）としているが、これは、3世紀前半頃の纏向遺跡/箸墓古墳等（祭政都市）が造られていた頃のことを示唆している?!

しかるに、そこは、どうしてもはずせなかった!まがりなりにも、現政権（皇

統)は、そこから由来していることは揺るぎのない事実であったからである！しかも、そのプロセスは、九州から、吉備(+出雲?)を經由しての、近畿への移動(神武東征)=大和盆地への部族結集(天孫族・天神族の進出)であったということである！ただし、関係集団、経路や所要年数等は、単一のものではない?!まさに、いろんな集団(の話)の寄せ集めだったということである?!

・「神話」に、関係の氏族・人物を投影させ、その正統性・正当性を暗示した！

そこで、次に、「神話(→高天原神話)」に、関係の氏族・人物を投影させ、それらの関係あるいは正統性・正当性を暗示させたということである?!しかも、そこでは、「いわゆる『大和朝廷』の創始者(部族集団)は、九州(←朝鮮半島?)から渡来したとする！」ということであった?!

すなわち、「記紀」は、その「大和朝廷」の創始者(部族集団)は、九州(←韓半島?)から渡来した「神武」とし、その後の「崇神」、さらには、「応神/神功皇后」(後発?渡来系弥生人であり、北方騎馬民族系?)の近畿進出、そして、神武の前に降臨していたとされる「出雲神(大物主)」や「ニギハヤヒ(物部氏等の始祖)」との関わりを示しているのである！

ただし、これについては、当時の遺跡・考古物(「纏向遺跡」と突き合わせて、追求していくことができるようである。まず、その一定程度の集結時期、すなわち纏向地域(祭政都市)への部族結集の確立時期(正式な王権の確立?)をもって、大和朝廷(王権)のスタートとした。そこが、現政権(皇統)の直接的なスタートであったからである?!そして、「記紀」は、それを、第10代の「崇神」(御肇国天皇ハックニシラススメラミコト)の事績(「四道将軍」の派遣等)としているのである?!

次に、自家あるいは部族関係の推移を、自家及び友好関係にある部族の後裔等に、一定の配慮をしながら、年代や史実を変えたり、入れ替えたり、あるいは外交等の文献等から移植したりしながら、いわゆる「万世一系」の皇統譜を創り上げていった?!

すなわち、神話の部分は、『日本書紀』が成立した頃の政権の正統性・正当性を、「高天原神話」という形で造作したということであるが、そのモチーフ(ねらい)は、「天武」の正后であった「持統」(あるいは、その後の、妹の「元明」?)を、「(女性としての)天照大神」に見立てて、現政権(皇統)の正統性・正当性(「万世一系」)を、この「天照大神」の時代から賦与されているという虚構までも、仮設(後付け?)したということである?!

・「天武」の系統が続いたように見せかけて、実は、「天智」の系統に切り替わったことを示した！

ただし、ここが重要であるが、それも含めて、夫の「天武」の系統が続いたように見せかけて、実は、父親の「天智」の系統に切り替わったことを示して

いるのではないか？さらに、大胆に言えば、この持続女帝の登場によって、全く新たな王朝がスタートしたことを示そうとしているのではないか？

それは、示されている「神々の体系」、「天照大神の位置づけ」等に反映されている?! いみじくも、持続天皇の和風諡号の改変、すなわち、「大日本根子広野姫」から「高天原広野姫」への改変は、そのことを如実に示している?!

しかし、それは、一方で、それまでの皇統譜の源流的存在であった「出雲（大物主→本物の「天照大神」?）」勢力（本来の皇統?）の存在を量し、または神話の世界にデフォルメさせている?! ということである?!

すなわち、本当は、ここが一番の問題があるところであるが、「スサノオ」「大国主」（「大穴持」等の異称あり）、それから大和の「大物主」（出雲神）等の存在と関係づくりが執拗に述べられ（出雲系神話）、本来の王権（皇統）は、出雲系（勢力）にあったのではないかとさえ思われるのである?!

やはり、それは事実であったので、まったくの無視や抹殺はできなかつた！だが、そのことをあからさまにすると、自らの正統性・正当性が主張できなくなるので、そのことは全力で回避した。そして、それは、後々の「蘇我氏」や「物部氏」の存在を隠したり、貶めたりすることにつながっていくのである。つまり、蘇我氏や物部氏は、本来の正統、正当な後継者、政権者の後裔であったということでもある?!

・ある氏族（勢力）達の、西から東への進出・移住譚であったものを、一つの「神武東征譚」に創り上げた?!

次に考えられたのが、史実?としては別々の「近畿・大和東進」、つまり、ある氏族（勢力）達の西から東への進出・移住譚であったものを、あのような、一つの「神武東征譚」に創り上げた（膨らませた?）?! つまり、複数の、そうした氏族（勢力）達の、西から東への進出・移住譚を集めて、一つの大きな物語としたということである?!

もちろん、それらは、それを敢行した関係氏族（勢力）、例えば「カモ族」等の口伝や書き物から構想（取捨選択）され、書き上げられたものではあろう?! したがって、そのことが、例えば、『古事記』と『日本書紀』における、所要年数の違いや寄港地（での出来事）の違いをも生むのである?!

とは言え、そのことと、そこに描かれている「東征?」自体の有無、あるいは物語としての一致性とは、まったく次元の違う話となってくる?! ということか言うと、「記紀」の共有認識（意図）としては、大和建国のための「神武東征」を、まさに「事実として、あったもの!」として描こうとしているということである?!

要は、西（九州）から東（近畿・大和）へと、自らの先祖達が移動（進出）してきたということ自体は自明のことであり、その記憶（認識）は、まさに彼ら



の脳裏に、しっかりと刻まれていたということである?!否、そのこと自体を否定（捏造）することは、ある意味遠い先祖への冒瀆であり、背徳ともなると考えていたということでもある?!

しかし、やはり細かい事実それ自体（核心部分?）は、明らかにはしたくなかった?!否、そこまでは分からなかった?!何故なら、自らの、直接の先祖は、随分後からそこに参画?してきた（ある意味乗っ取った?!）人達であり、その建国のプロセスを構築したわけではなかったのである?!

**○自らの遠祖達が、九州から近畿・大和に進出・移動していたという事実?を記せば、それでよかった!**

いずれにしても、記紀編纂者達には、そこでの多少の異同は、ある意味どうでもよかったのであり（直接の関係氏族・勢力にとっては、譲れないところもあるにはあったであろうが?!）、端的には、自らの遠祖達が、九州から近畿・大和に進出・移動していたという事実?を記せば、それでよかったのである（広い意味では、自らを、彼らの後裔であると位置づけていたということである?）?!

とにかく、「記紀」は、このように、「万世一系の天皇中心国家である」としたのであるが、それは、現在の政権を正統・正当化するものであったことは言うまでもない。すなわち、倭国と日本国の関係や各関係氏族（韓半島・渡来人を含む）の相克を可能な限り量し、本来の皇統筋?である蘇我氏・物部氏・尾張氏等を抹殺したということである?!

別言すれば、その中に、邪馬台国（卑弥呼・台与）や伽耶系の崇神勢力、そして、百済系の応神勢力（沸流系余氏：滕・讚・珍）?以降を組み入れ、筑紫倭国と豊国倭国、すなわち天智系（温祚系余氏：濟・興・武→磐井）と天武系（沸流・仇台系余（牟）氏：昆支・軍君→継体）を組み込んでいったということである?!

**○改めて、ここから分かること!**

・建国（倭国→日本国）は、後発外来の倭人集団によってなされた!

そこで、改めて、「ここから分かること!」を整理してみると、まずは、「我が国の建国（倭国→日本国）は、後発外来の倭人集団（これは、最も広い意味である!）によってなされた!」ということである!

その中心は、いわゆる「(渡来系) 弥生人」と呼ばれる人達であったが、その大きな勢力は、朝鮮半島南東部の「伽耶・新羅」系の倭人（これが、「崇神」系統とされた?!）と、その後入り込んで来た「扶余・百済」系の倭人（これが、「応神」系統とされた?!）であった!

ただし、それ以前に入植?していたのは、同じ倭人ではあったが、中国江南地方の「呉・越」からの人々であった（これが、「神武」系統とされた?!）!

・「神」の名を冠した人物群（「神武」「崇神」「神功皇后」「応神」）の創出!

次が、記紀神話は、「3世紀頃の状況を示すものであり、その後の関係氏族

の働きや関連を示すものであった！」ということである！そこに描かれた大きなからくり？が、上山春平氏が解明？した「神々の体系」であり、その体系に嵌め込まれた、「神武」「崇神」「神功皇后」「応神」という、「神」の名を冠した人物群の創出である？！

とは言え、それらは、記紀編纂者（藤原政権）が、自らの正統性・正当性を虚構するために創り上げた、関係氏族・勢力の先祖物語？と言えるが、その大枠自体は事実であった？！

例えば、出雲が先にあり、大和が、それに乗った！皇祖？神武が南九州から来た！そういうことである！ただし、その基（起）点となるべき人物は、「応神」に仮構された百済王族（「兄王」・藤または倭の五王の「讚」？）であり、その最初の拠点が、九州倭国（「倭（大倭）たい国」）であった？！

最後が、通常、「記紀」は、「天武天皇」が詔勅し、まさしく、その天武、そして持統？のために編纂されたということになっているが、実は、まったくそうではないということである（ある種のトリックに嵌ってしまっている！）？！すなわち、それは、「藤原・持統体制の正統・正当化」ということである！それが指し示す史実？、そしてその後の展開をみれば、火を見るよりも明らかであるということである！

例えば、藤原氏（不比等？）を匂わす？、天照大神を背後から（事実上？）操る「高皇産靈神（←高木神）or 思兼命」の活躍、そして、そこにおける「天孫降臨」の構図「息子ではなく、孫を降臨させる！」ということ等である（→持統 or 元明と文武 or 聖武？の関係）！

### ・「神武東征譚」の創作？！

以上は、私の、かなり大胆な仮説（妄想？）ではあるが、ここでは、他人の考察（多くの人が言及している？）からの援用とはなるが、その物語の可能性と、その素材？となった史実？として、二つの「東征譚」のことを、改めて紹介しておきたい（→「鴨着く島」：kamodoku.dee.cc）。ただし、その二つの東征譚の細かな史実？については、まだまだ明確には分かっていない？！

まず、その一つが、『古事記』記載の「日向出航」（2世紀半ば。倭国大乱の直前？）の物語？であり、所要年数16年、古日向（曾於）投馬国（「倭人伝」記載国）？からの「王・手研耳タキシミミ」、すなわち「神武」の移動（第一次大和東征）である？！ちなみに、これは、南部九州の「カモタケツヌミ命」（八咫鳥→賀茂・鴨族の祖）の東進のことと思われる？！

もう一つは、『日本書紀』記載の「北九州出航」（3世紀半ば、260年頃？）の物語？であり、所要年数3年余、北部九州・筑紫の「大倭（倭？）国」盟主辰韓王？「御真木入彦ミマキイリヒコ→崇神」の移動（第二次大和東征）である？！彼は、殷王朝由来の「箕子」の末裔であるとされているようであるが、247～8年頃？、

「辰王」である彼が、辰韓の地から糸島地方に移動し、旧奴国系の国々と連合して「大倭<sup>たいい</sup>国」をなしていたが、南の「狗奴国」の攻撃に手を焼いていた「女王国」を保護国化し、狗奴国の北進を食い止める役割を担っていた?!

しかし、「魏」が滅び、「晋」(司馬氏)の建国となり(265年)、それが、まず「辰韓」の危機となり、王族達は九州倭国へ移動、そして、さらに近畿大和へ移動した、そういうこととされている?!そして、先に入植していた「第一次大和政権」を駆逐したということである(それが、「武埴安・吾田姫」の叛乱、そして、丹波へ逃げた「クガミミノミカサ」の平定譚?)ということである?!

ただし、この後者については、かなり後のことでもあり、ここでの「神武東征」の素材となり得るかという疑問は残る?!だが、一つの可能性(素材として採用された?)としては、残しておくべきではあろう?!

もう一つ、「応神」の東征もあるが、それは、やはり上記二つの「東征」とは、直接的には繋がらないであろう?!もちろん、時期的な問題もあるが、「記紀」に示されている「東征」の骨格は、いわゆる「大和纏向」の出現期のことであるからである?!強いて言えば、記紀編纂者達が、言わば遠祖達の、二度の東征を追認する形で(もちろん、移動したことは間違いない!)、その正統性?を投影させたということであろうか?!

なお、念のために、人(勢力)や文化の移動が、すべて、こうした西から東へということではなかったことは、ここで改めて、確認はしておきたい?!例えば、2世紀末の「倭国大乱」後?の、「手焙形土器(前方後方墳)勢力」の、一部?西への進攻である(「神武」の、大和での長子「神八井耳」の後裔→「多氏」の進出があったことは間違いない!)?!

### ○何故、そう言えるのか?いくつかの明確な根拠・証拠?!

そこで、ここで、以上のことが、「何故、そう言えるのか?いくつかの明確な根拠・証拠?!」ということ、それらを整理すると、以下ようになる?!

- ・重要な場面、段階で、藤原氏と関係する人物(神)が、しかも秘かに忍び込まされている!すなわち、「高産魂尊」or「思兼神」=「天児屋命」→「中臣(藤原)鎌足」、そして何より「藤原不比等」が、そこに投影されている!
- ・「伊勢神宮」は、皇祖「天照大神」を祀っているわけだが、「持統天皇」が行幸した後、「明治天皇」に至るまでは、歴代の天皇自体が参詣していないという事実がある(自分達の、直接の皇祖ではない?!→あるいはまた、そこに行けない何らかの理由がある?→怨霊、後ろめたさ?)?!
- ・しかも、(当時の)天皇の菩提寺である「泉涌寺<sup>せんにゅうじ</sup>」の事実で、そこでは、「天智系」の天皇しか祀られていない(→「天武系」が無視されている?)!それは、なぜか?!要は、「天智系」しか、正統・正当と認めていない(改めて、それはどのような系統(皇統)なのか?)?!

○「天照大神」は、「卑弥呼」or「台与」を意識した（多分？台与！）、後の「持統天皇」or「元明天皇」の虚像（昇華神）?!

次が、かの『天照大神』は、『卑弥呼』or『台与』を意識とした（多分？台与！）、後の『持統天皇』or『元明天皇』の虚像である」ということについてである。これは、かの関裕二氏も含めて、かなり多くの人が指摘していることでもあるが、その一つの証拠？としては、前にも挙げたように、「持統天皇」の和風諡号の改変、すなわち「大日本根子広野姫」→「高天原広野姫」がある！

とにかく、九州にあった「邪馬台国」の女王「卑弥呼」or「台与」が、「万世一系」の皇統譜の祖とされた「天照大神」のモデル（仮構神）とされ、しかも、それが、後の「持統天皇 or 元明天皇」の虚像（昇華神）とされたということになれば、「記紀」が描く古代史（とりわけ「神話」の部分！）には、かなりの創作？が施されていると見なさなければならず、そこでの史実解明とともに、何故、「記紀」（持統・藤原政権）が、そのような創作を行ったかの事由が追究されなければならないということである！

これは、かなりの人が見過ごしている（誤認している?!）、「天武天皇」と「持統天皇」（仲睦ましい夫婦とされているようではあるが！）の関係断絶？を、一方で暗示しているということでもある！

○「和珥・多氏」「海部・尾張・紀氏」、そして「物部・蘇我氏」の滅却?!

最後が、多分？史実としてはそうであったろうが、他の有力氏族・勢力、例えば、「和珥・多氏」「海部・尾張・紀氏」、そして、「物部・蘇我氏」等の存在を隠し、偽り、彼らを、可能な限り滅却しようとしたということである?! それらの氏族・勢力は、おそらく、その時々々の王権を確立していた氏族・勢力（→皇別・神別）であり、持統・藤原政権にとっては、真に目障り？であり、とても「正史」の中で、その真実を述べることはできなかった?!

というのも、持統・藤原政権は、まさに最後に逢着した「渡来氏族」であり、その政権獲得のプロセスは、あまり正当なものではなかったからである?! とりわけ、「物部氏」や「蘇我氏」に対しては、かなりの悪逆な手段で、その地位を奪取したということである（その最大の罪？が、いわゆる「乙巳の変」と呼ばれる、時の大王？「蘇我入鹿」の弑逆事件である?!）！

○出雲・吉備の動き／「前方後方墳」勢力と「前方後円墳」勢力の関係  
・改めて、「出雲の国譲り」とは、どういうことであったのか？

ところで、これは、かなり遡るようではあるが、例の「出雲」とは、明らかに、現在の島根県東部一帯の、ある限定された地域のみを指しているのではない！一番分かり易い言い方をすれば、「記紀」に出てくる「出雲の国譲り」の、すなわち「国を譲った（譲らされた?!）」側の国（部族・勢力）のことである！

さらに厳密に言うと、その国（部族・勢力）が統治していた、全国各地の国（版

図)、その総体のことを指している！多分、それが、「豊葦原中つ国」と呼ばれていた国・地域（群）のことであろう?!ちなみに、それは、「素戔嗚尊」、その後裔（子ども?）とされる「大国主命（大貴己命）」、その大和での名前?「大物主」を頭領とする、いわゆる「出雲（神）族」と呼ばれる人たちの国・勢力範囲のことでもある?!

だが、残念ながら、その版図が、具体的に明確に分かっているわけではない！そこが、別な意味で、かなりもどかしいところではある?!しかも、これと連動して、別な?親子関係である「五十猛いたける命（大年神?）」の話も、気になるところである（彼は、紀伊半島にも進出している?!）！

一方、「大和纏向」（祭政都市）を主導したとされる「吉備（氏）」あるいは、その陰の大立者と目される?「尾張（氏）」なのであるが、そこに、大和の出雲系、例えば「倭やまと氏」とか「三輪氏」、さらには「賀茂氏」、「葛城氏」等が絡んでくるのである。これを、どう捉えるかなのである！

#### ・「手焙形土器／前方後方墳勢力→前方後円墳勢力」と「環濠集落勢力」

しかるに、そこで注目されるのは、近畿地方の巨大環濠集落が弥生時代中期に解体され、消えてしまうということであるが、その後、琵琶湖南岸に巨大な「伊勢遺跡」（近江南部の政治・祭祀の中心地?）が出現しているということ、そして、その後、ヤマトに「纏向遺跡」が出現した頃、一気に衰弱しているということである！

しかも、それは、ヤマトに滅ぼされたからではなく、むしろその地に居た人々が、ヤマト建国のために、そちらの方に移動していったからではないかというのである（「前方後方墳勢力」と「円墳勢力」の同盟?）！

そして、ここが重要であるが、そこに、九州・出雲勢力と利害の異なってきた吉備勢力が参入してきて、丹波（丹後）、東海、東国勢力を抱き込み、大同団結し、ヤマト建国を成した、そういうことでなかったのか（関裕二説!）?!すなわち、後発の前方後円墳が、3世紀後半頃?半ば忽然と、奈良県の三輪山山麓・纏向に姿を現すのであるが、果たしてそこから、何が見えるのか?!

加えて、そうした人々の動き（土器等の移動）として、3世紀前半（倭国大乱後?）の、つまり、尾張や近江辺りから、九州に向かったものも多くあるが（松本武彦『日本の歴史－列島創世記』、小学館）、そこに、何があるのかということである?!

その背景としては、「丹波／丹後」が、北部九州の虎の威を借りた「出雲」と敵対し、遠交近攻策を採り、「越後」と結ばれるだけでなく、「近江」や「尾張」とつながったのではないか?!その中心地が伊勢（遺跡）であり、そこ近江に、「前方後方墳勢力」が形成されたということではなかったかということである?!そして、そこは、最初期の「前方後方墳」の出現地域であったこと、近畿

と東海の「銅鐸」が集められ、埋納されていたこと等があるが、この近江が、一帯の中心的存在だったということでもある?!

なお、改めて興味深いのは、そこにあった「独立棟持柱」建物であり、後の「伊勢神宮」と同じ形式ではないかともされていることである!これは、その後の展開からも、重要な何かを示していることは明らかである?!そしてまた、その「伊勢」という名前自体も、東海の伊勢湾地方との関連性も浮かび上がらせるし、さらにそれと連動させるならば、北部九州の「伊都」(イト・イツ→イセ・イツ)とのつながりも考えられるのである?!

多分?想像を逞しくすれば、そこを含めた、北部九州地域の勢力(の一部→例の「早良王国」(吉武高木遺跡)あるいは「怡土王国」(「三種の神器」の発祥の地?)の王族達?)が、新興の「邪馬台国」に駆逐され(→九州における「倭国大乱」?!)、新天地を求めて行き着いた所が、それらの地域だったのではないか?!

そして、その後勢力を蓄え、結集し、ヤマト建国を行った?!彼らは、多分「海人族」であり、舟を利用すれば、至る所に行き着けた!かの「海神わたつみ」の活躍は、「記紀」の中でも、嫌と言うほど示されている?!

ちなみに、「古墳」と言えば、「前方後円墳」が、つとに有名であるが、「前方後方墳」「円墳」「方墳」、珍しいところでは、山陰・出雲で盛行した「四隅突出型墳丘墓(方墳?)」といったものもあるわけである!一応これらは、「古墳」ということであるので、「墳墓」、つまり誰か(単身とは限らない!)の墓ということではある。副葬品等は、まさにその個人の遺品的なものであろう!

ただし、そこは、単に死者を葬った場所というだけではなく、死者ないしはその部族・一族の威容を示す、さらには、そこで持続的な「祖霊祭祀」を行うというような場所(聖地・霊場)でもあったということである?!

有名なのは、表面積?では世界第一位とされる「大山古墳」(伝仁徳天皇陵)、あるいは最初期の「箸墓=箸中山古墳(伝倭迹迹日百襲姫命陵?!)」であろう!後者の墳墓は、邪馬台国畿内説が「卑弥呼の墓」と主張するものであるが、私は、それに与するものでない!

## ○古墳の推移

翻って、その古墳であるが、やはり墳墓であるわけであるので、いわゆる親族・一族においては、その形状(機能とまでは言わないが)においては、それぞれ特有のものがあ、それらは、基本的には、どんなに時間が経過しようとも、ほとんど変わらないのではないか(もちろん流行的な要素はあるであろうが)?!

と言うことは、結果として、それらは、ある一族・氏族特有の形状を示すということになるであろう?!それが、先に挙げた幾つかの古墳の種類という形で、残っているということではないか?!

だが、もちろん、その大きさとか、その中に入れてある「副葬品」の違いに

よって、地位あるいは身分等が異なっているであろう?!しかし、その墳墓の形状自体は、それこそ自分達の一族・氏族の、ある種の「アイデンティティ」を示すという点では、まさに普遍的なものであろう!現在でも、例えば沖縄地方に残っている「亀甲墓」等は、その典型でもある?!

それはともかく、実は、既にそういう観点から、その対応関係が、徐々に明らかにはされているようである?!例えば、「前方後円墳」はヤマト王権のシンボル、「前方後方墳」は「出雲」、あるいは「近江・東海」勢力(→尾張氏、息長氏等)のシンボルといった具合である!ただし、前者は、前にも述べたように、「吉備」の楯築遺跡(「双方中円形墳丘墓」)が原型ではあった。その基本は、多分「円墳」であろう?!

ちなみに、その「円墳」が吉備(→物部氏?)、「方墳」が出雲(→蘇我氏?)ということにもなっていくようであるが、それと、同じ山陰・出雲で盛行した「四隅突出型墳丘墓(方墳?)」がどうつながっているのか?高句麗とのつながりも指摘されているが、今のところ、私には、よく整理がつかない?!しかも、それと、いわゆる出雲(族)が、どうつながるかも?!

さて、そうした状況の中で、改めて、「前方後円墳」は、それ一つで、一族・氏族単独の墳墓なのかどうか?それとも、いわゆる「円墳」と「方墳」の「合体墓」なのではないかということが、ここでは関心がもたれるわけである!現時点では、ある種の運命共同体的な墳墓であり、その擬制的親族集団化を示すものではないかということである!?

その証拠(根拠)が、「円墳」と「方墳」の合体、そこにおける、例えば「高坏」・「特殊器台→埴輪」「貼石」「周濠」、そして「副葬品」等の、言わば関係氏族・一族(集団)の墓制の中核的要素の共存・融合性があり、したがって、まさにそれらが合成・合体されているのではないかということなのである?!もちろん、一方の「前方後方墳」も、ある意味、このような観点でみると、一つの合体墓と言えるのかもしれない?!

なお、「前方後円墳」は、7世紀前半の、「物部氏」の没落とともに、消滅していくという説もあるようであるが、それは、単なる偶然なのか?あるいは大いに関係があるのか?もし、関係があるのなら、「前方後円墳」の出現は、まさに「物部氏」と直接つながっており(「物部氏」主導・中心で、その墳墓は出来上がったもの?!)、墳墓自体は、一番「吉備」の要素が強いとされているので(「高坏」「特殊器台」<→埴輪>等)、その物部氏は、「吉備」(そこもある時期からのものであり、それ以前に彼らは、どこからかやって来た?!)の出だということにもなるわけである?!

そうなると、改めて、初期ヤマト王権は、「吉備」を中心として、出雲(族)(→蘇我氏、尾張氏等)によって、樹立されたものではないか!いわゆる「大和

三山」と言われるものがあるが、その「畝傍山」…蘇我氏（出雲系）・男性・八尺瓊勾玉（忌部氏？）／「耳成山」…物部氏・女性・八咫鏡（石凝姥いしこりどめ命？）／「(天) 香久山」…尾張氏・女性・草薙劍、というような関連付けもあるのである?!

これらは、その氏族達が、初期ヤマト王権を構成していたことを示すものと思われるが、もしそうだとしたら、何とも象徴的な三山構成ではないだろうか?!

ただし、もし、そうであるとしたら、例の「前方後方墳」勢力と「前方後円墳」勢力の関係はどうなるのか？確か「前方後方墳」は、最初「近江」に生まれ、当初は「東海」、さらには「関東」辺りまで広がったとされているが、それについては、「記紀」の崇神期に記されている「四道將軍の全国派遣？」と関係してくるようにも思われる?!

そして、それは、とりわけ、その中の一人「大彦」（第8代「孝元天皇」の子、「安倍氏」等の祖）の動きと関係していると思われるが、彼は、おそらく、日本海回りの出雲勢力？、否、件の「吉備・出雲連合？」の一大勢力と思われる?! 彼が、その「前方後方墳」の勢力であった？ということになるが、一方で、その息子とされる「武渟川別<sup>たけぬなかわわけ</sup>」の動きは、太平洋回りの「吉備・出雲連合？」勢力の動きを投影したものとも思われる（前方後円墳勢力?）?!

ちなみに、その、もう一方の「前方後円墳」の勢力との関係であるが、実は、その「前方後円墳」は、先行の? 「前方後方墳」と、いわゆる「円墳」が融合? したものと考えられる?! しかも、それは、大和で発生したものと考えられている（北部九州の「津古生掛古墳」が、一番古いという情報もあるが?）?!

とは言え、「前方後方墳」は、何故か? 例の「尾張氏」の象徴とも考えられ、一方で、「円墳」は、「物部氏」の象徴とも考えられている?! その辺りからも、関係氏族・勢力の動きや出自等が解明できるのではないかと?!

いずれにしても、それらに関わって、改めて、「記紀」をどう読み込めばよいのか? そしてまた、その編纂の意図とか、あるいはその関係とか? その具体（詳細）が、さらに分かってくるのではないかと? そこからも、「記紀」、とりわけ『日本書紀』の捏造とか、粉飾の痕跡等がかなり見えてくるということになる? そうということである?!

具体的には、3世紀後半以降に、いわゆる定型化した「前方後円墳」が出現してくるとされるが、これがヤマト王権の象徴であることは、多くの人の認めるところではあろう?! しかも、この前方後円墳が、いくつかの地域（部族・一族）の埋葬文化の寄せ集めであり、ヤマト纏向に多くの人々が集まり、緩やかな連合体を形成していった、その一つの形（証拠）とされるということである。

なお、その寄せ集めの要素とは、「葺石」が山陰地方の「四隅突出型墳丘墓」



の「貼石」、墳丘上に並べた「特殊器台型土器」と「特殊壺型土器」が吉備、「濠」が近畿地方の「方形周溝墓」の「周溝」、豪華な「副葬品」は北部九州の影響とされている！ただし、その前段階に、「纏向型前方後円墳」と呼ばれるものがあり、その原型は、岡山県吉備の「楯築墳丘墓」とされている！したがって、この間のリーダー格は、吉備だった?!そういうことでもある！

とは言え、実は、この前方後円墳より先に出現していたのは、先にも述べたように、前方後方墳の方であった?!その前身?である「方形周溝墓」の代表的なものが、かの滋賀県守山市の「伊勢遺跡」(例の「伊勢神宮」と関係がある?)なのであるが、ヤマト建国の直前、近江と伊勢湾沿岸を中心とした東海地方(尾張周辺)が急速に発展していた！そして、どうやら丹波(丹後を含む)から、大量の鉄器や先進の文物が、近江と尾張に流れ込んでいたということである！

何故、丹波・丹後(海部氏?)と近江、尾張がつながっていたのか。それは、弥生時代後期に出雲が発展していき、上記の「四隅突出型墳丘墓」(発祥地は、中国山地とされる!)という巨大な墳丘墓が山陰地方に広がっていくが、その過程で、北陸地方にも「四隅突出型墳丘墓」が伝播していく。

だが、その間の但馬・丹波にかけては、この埋葬文化が見られず、出雲から越後にかけての諸勢力は、互いに遠交近攻策を採り、出雲は越前や越中と、丹波・丹後は越後と手を繋いでいたとされている！

しかるに、この主導権争いの中で、丹波・丹後は、朝鮮半島との間に独自の航路を開拓し、鉄や先進の文物を取り入れるとともに、内陸部の近江や東海、そしてヤマトとも連携し、富を分散していた?!

そこで、それと連動して、琵琶湖沿岸の近江に、弥生時代を代表する巨大環濠集落が出現する。それが、前述の「伊勢遺跡」と考えられるが、実は、同遺跡は、弥生時代後期の倭国大乱の時代のもので、佐賀県の「吉野ヶ里遺跡」や奈良県の「唐古・鍵遺跡」と並ぶ、弥生時代最大級の環濠集落とされる?!だが、あまり知られてはいない！

### ○初期大和王権の構成

いずれにしても、古代史解明の鍵は、このヤマト王権の初期構成をまずはきちっと押さえ、それがどのように変遷していったのか、もちろんそこでは、半島勢力(大きくは、伽耶勢力と百濟勢力)が、どのようにその政権に入り込んできたのか、とりわけ百濟王統との融合関係が、どのように進んでいったのか?ということにある?!

「記紀」における天皇名で言えば、「崇神」「応神」「継体」「欽明」といったあたりが、その「ヤマ場」と推測されるが、もちろん「記紀」成立期の持統・藤原(不比等)コンビの頃の「ヤマト王権」の実態(実体?)も、それらと、やはりきちっと整合性を持たせた形で、いかに解明できるかであろう!?!その一つ

の鍵を握っているのが、こうした遺跡あるいは墓制のあり方の解明であることは、ある意味間違いないのではないだろうか?!

ところで、正式な? 「国史」としての『日本書紀』に、私書(秘書?)としての『古事記』は、可能な限りそれへの不満とか、隠された正義(正統性?)とか、言い換えれば真実を書き記そうとした?だが、それは、あくまでも、婉曲にということであった(攻撃されたら大変なことになるから?)、そういうことだったのではないか?!

なお、『古事記』は、撰者の多氏(「太安万侶」及び子孫の「多人長」)の思い、あるいは秘かな告発だった?そういうことであるが、それらについては、「天の書/地の書」あるいは「国外向け/国内向け」というような評価もあるようであるが、それは、あくまでも、結果的にそうなった?そのように思われる!

ただし、そうした「国史編纂」の必要性は、それ以前の「天武天皇」の時に意識されたものであるので、その内容自体は、その後の状況によって、かなりの加除修正はなされている?と言うより、持統・藤原体制になって大幅な改編?が施された?!極端に言えば、太(多)氏は、その辺りを危惧(立腹?)し、糾弾?したとも言える?しかし、それは、あからさまには言えなかった?だから、半ば私書(秘書?)として、それを書き記した?そういうことである?!

ちなみに、「多(大)氏」は、例の「ワニ(和珥)系氏族」の中心であったと思われるが(したがって、本来の「王権所有者」?)、徐々に政権から遠ざけられているようにも思える(→奈良盆地の「王墓遺跡群(大和・柳本古墳群)」の変容?)?!

いずれにしても、それらは、ある意味自家に都合のいい?寄せ集めの真実とも言えるものであり、全体を通しての史実ではない!したがって、そのすべてが真実だと思ってはいけない!改めて、そういうことになるわけである!だから、その他のツール、アプローチの方法が、一方で重要となるということである!

すなわち、そこにどのような史実が投影されているのかは、まずは分からないわけであるから、それを推測?する文献や史料に頼らざるを得ないということになる!もちろん、その土地の言い伝え等も、それなりの参考となるであろうし、「金石文」と呼ばれるようなものがあれば、ほとんど解釈の恣意を許さない?!つまり、誰かの書き換え等はないということであるので、かなりの有効な史料となる!

したがって、そこでは、どのような史実(物語?)があったのか?そこをきちっと突き止めているかどうか、改めて重要となるということであるが、そうすると、氏族・勢力的には、「北部九州」はもちろんであるが、「出雲」、「尾張」、「近江」、そして、「武内宿禰系」の「蘇我」、「葛城」、そして「紀(木)」氏等が、「記紀」の裏側に封じ込まれていることは明らかなのである?まさに

史実？としては、それは、どういうことであったのか？そこが知りたいということなのである！

### ○「物部氏」と「紀（木）氏」との関係

そこで、今、何とか、新たな突破口が見つからないかということで、それは、「物部氏」と「紀（木）氏」との関係ということにもなるが、例の「瀬戸内海航路」の争奪？戦のことを想像している！「藤井耕一郎」という人の解明によると、そこには、「山陽沿岸」のルートと「四国沿岸」のルートの二つがあり、前者が「物部系」、後者が「紀（木）系」だったのではないかということである！ちなみに、後者が、実は「武内宿禰系」を指しているということにもなる?!

具体的に言うと、最初は（大きくは）、「日本海側」と「瀬戸内海側」の、おそらくそこに関わる「海人族」同士の戦い（主導権争い）で、瀬戸内海側の氏族・勢力が勝利し、その後、その瀬戸内海側の氏族・勢力が、さらなる主導権争いを演じ、最終的には、山陽沿岸のルートを支配した氏族・勢力が、全体の覇を成した！もちろん、前者が、「高天原系」とされた氏族・勢力であったことは言うまでもない?!

もし、そうであれば、最初に述べた、「伽耶（新羅）系」と「百済系」のつながりというか、関係が、その二つのルートに関わる氏族・勢力と対応させられるのではないか？そして、もし、そうであれば、件の「武内宿禰（系）」の謎も、かなり解けてくるのではないか?!

おそらく、そういうことであろうが、そこに、かの「倭の五王」が絡んでくるのでもある?!かの「武内宿禰」のことは当然であるが、そこに「神功皇后（新羅系）」、「応神天皇（百済系?）」、そして「住吉大神（物部系?→尾張氏系津守氏）」、さらには、「気比大神（ツヌガアラシト→天日矛?）」等が絡んでくるわけである?!

したがって、そこでの「物部氏」と「紀（木）氏」との関係は、それらの錯綜？を、かなりの程度解きほぐすものであるようにも思われるのであるが、では、一体何故、「記紀」は、その部分を暈している（隠している？）のであろうか？

当然、その部分を知られたくないということであろうが、裏を返せば、その部分に大きな秘密（真実?）が隠されているということである?!実は、それが、「応神」の創出（→「神武」「崇神」「神功皇后」のトリプルスピンの?）であり、その部分の真実?が大きな鍵を握っているということである?!

すなわち、まだまだ明確に、そして、具体的には何とも言えない部分もあるが、一つは、「淡海三船」の暗示を介して?、そのことの可能性が追求出来るということである！もちろん、個々には様々な事実（←研究成果）が示されているわけであるが（古墳の分布や発掘物の検討等）、その全体的な俯瞰が難しいということである！

それについては、最後にも述べるつもりであるが、かなりの打開策？として、「兼川晋」という人と「石渡信一郎」(及び彼の後継者と自認されている「林順二」「仲島岳」という人達)、そして、「藤井耕一郎」という人の主張(研究成果)を整合的に受け入れること、そして、もう一つ、その土台・出発点(根拠の源)としての、「関裕二」という人の、まさに膨大な研究成果(著書)があることは言うまでもない！

まず、その中で、一番のポイントが、「応神天皇(第15代)」の正体(出身地とその系譜)と、言わば、その後の実質的な？政権者である「継体天皇(第26代)」の正体(出身地とその系譜)の解明である！そして、その文脈の中で、その両者が兄弟なのか、そうでないのか(百済系王族?)？あるいは、「応神」が、「百済系」なのか、「新羅系」なのか？そこら辺りが、もう少し解明されれば、「記紀」が暈している(隠している?)真実が見えてくるということである！

ちなみに、「九州倭国」(この場合は「豊国倭国」)の「(本来の?)継体」が「百済系(仇台系牟氏?)」であることは間違いないが、もう一人の？「(近畿北陸の)継体」は、例の「息長氏」が同調(加担?)して創出された天皇であれば、「新羅系？」ということになる?!そこに、「蘇我氏」と「藤原氏」の関係も関わってくると思われるのであるが、それらが、先に述べた、記紀神話、とりわけ「高天原神話」の内実(投影されているもの!)につながっているということにもなる?!

要は、持統・藤原政権(記紀編纂者)は、「乙巳の変」(645年)によって、蘇我氏(本宗家)を滅ぼし、「白村江の戦い」(663年)や「壬申の乱」(672年)、そして「天武」の治世を経て、悲願の「倭国(再?)統一」(701年の「大宝律令」制定→「日本国」の「倭国併呑」?)を果たすのであるが、その間の経緯は、当政権にとっては、あまり知られたくないプロセスであった?!端的に、彼らに、「正当性」「正統性」がなかったということである?!

ここでは、余談ではあるが、その「正当性・正統性」というのは、後(次)の政権者が、ある意味どのようなにも操作？できるものではないかということになるが(他ならぬ中国の歴代王朝は、そうしたことを繰り返してきた?→革命・讖緯思想→「国史」の編纂)、その状況に立ったのが、ごく近場のことであれば、その説得？には、かなりのエネルギーと時間を割いた?!

つまり、前政権とはまったく関係のない政権であれば、あからさまに、前政権の不当性(悪徳?)をあげつらうと思われる?!逆に、自らの「正当性」「正統性」自体が後ろめたいものであれば、その真実性を過剰に主張し、他方では、そこに可能な限りの不整合を散りばめる(全体が分からないようにする?!)！それが、「記紀(日本書紀)」の役割であった?!その時の「国史」の編纂というものは、ある意味そういうものにならざるを得なかった?!ということである?!

### (3) 何故、「記紀」は、真実を書かなかったのか？

ということで、仮説である？「二つの倭国」は、結局は（徐々に？）、後発の「近畿大和勢力」の勝利（併呑）に終わり、その後、「倭国」から「日本国」へと国名を変え、正式な律令国家体制へと移っていった！

とは言うものの、それは、一方では、例の「藤原氏の一人勝ち」の歴史でもあった（律令制の内実は、藤原氏にとってだけ？都合のよいものとなったということである！）！そして、その完全成就が、794年から始まる、「桓武天皇」（母親は百済系王族！）による「平安京」の時代だということである！

ここで、改めて、「記紀」（ここでは『日本書紀』！）は、何故真実を書かなかったのかであるが、その理由は、繰り返すように、彼らの政権（王権？）には、その「正当性／正統性」がなかったということである！

様々な氏族・人物を、ある時は弑逆したり（「乙巳の変」→蘇我入鹿弑逆）、ある時は騙したり（「乙巳の変」への参画呼びかけとその後の裏切り？→相手は「蘇我石川麻呂」／「入鹿」の叔父）、ある時は貶めたりして（濡れ衣を着させて殺人もした！例えば「長屋王の変」！）、政権の座を手に入れたということである?! だから、「書かなかった」というよりは、むしろ「書けなかった」ということでもある?!

これらの証拠?については、例の「関裕二氏」の膨大な論証（本）があるが、近年では、悪玉?（とされた）「蘇我氏」の見直し論も浮上しており（要は、「記紀」に記されているような悪行はなかったということ！むしろ、彼らは、積極的に、いわゆる「律令国家体制づくり」に邁進していたということ！しかも、彼らは、正統な王統であったということ?）、ここで言う「記紀」に隠された、本当のことが、少しずつ見え始めてきているとも言えるのである！

そういう意味では、もう一つの『古事記』も同じであるが、ただ『古事記』の場合は、その編纂者が、誰で、何の目的で書かれたのかということもあるが（一応は、「天武天皇」の命で、太安万侶が、『日本書紀』よりも早く書いたということであるが?!）、その扱いは、当然?『日本書紀』とは違う受け止め方が求められることは言うまでもない！

それについては、今のところ、『日本書紀』の叙述に、多少?不満を抱いていた（内心は怒っていた?）、おそらく正統な?古参豪族であった「多（太／大←意富／大生?）氏」が、持統・藤原政権に睨まれない（抹殺されない?）程度に、言いたいことは言わせてもらうというような立場で、しかも私的に書き記したものと受け止められる?!

ある意味、そうすることは、自家（勢力）の意地（誇り?）でもあつたらうし、どこかで、その真実を伝えようとしたものとも言えるのではないか?!もし、そうであったとすれば、『日本書紀』と『古事記』の叙述の違いは、別な意味

で、何か重要なメッセージとなっているということになる?!

つまり、それまでの「歴史」の捉え方（情報）の違いというよりは、これだけは、『日本書紀』の叙述に異を唱えたい（→本当は、そうではなかった!）、そういう思いや矜持があったのかもしれない?ただし、あからさまな批判や叙述否定は、決して行わなかった?!

その「文学性」はともかく、一方で、そうした「メッセージ性」があるとなれば、その違いの意味は、とてつもなく大きいと言わざるを得ない?すなわち、どういう史実?がそこにあったのかという、新たな解明の糸口・ヒントが、そこにはあるかもしれないということである?

## 6. 「歴史の勝者と敗者?」、その存在と実相?!

(1)勝者?としての藤原氏、中臣氏、息長氏、秦氏、賀茂(直)氏?!

○結託した?「藤原氏」と「中臣氏」?!

ここで改めて、問題としている「二つの倭国→日本国」の流れは、具体的には、どのようにあったのか?それが描ければ、「記紀」の構図(からくり?)も、より鮮明に見えてくるというものである?!そこで浮上してくるのが、「歴史の勝者と敗者?」という視点である!いわゆる「政権」を執った、あるいはそれに同調・加担した側と、それに敗れ去った、あるいはそこから落ちこぼれていった側の、双方の存在である!言わば、その攻防(盛衰)?の実相が、まさに、「記紀」に描かれているのではないかということである?!

ということで、ここでは、それとおぼしき?双方の氏族・勢力を同定し、さらに、それらの関係を、可能な限り抉り出し、その「全体像」をまとめてみることにしたい!要は、彼らが、どのように存在し、その互いの関係が、どのようなであったのかということであるが、「記紀」(正史?)とは、一面では、それを示すための「書(記録)」でもあったということである(「勝者」の言い分ということ!)?!

ということで、現時点では、その勝者側としては、「修正試作版」に示しているように、「藤原氏」「中臣氏」「息長氏」「秦氏」、さらには「賀茂氏(の一部)」を措定しているが、ここでは、それを受けて、どのような流れ・関係があったのか、今一度、整理しておきたいということである!

そこで、まずは、本命の「藤原氏」であるが、彼らが、最終的に政権を掌握し、幾つかの氏族・勢力と組んで(抱きこんで?)、その正統性や正当性を、「記紀」(この場合は、直接的には『日本書紀』!)に示しているということである!ちなみに、現在でも、その影響の下、彼らの後裔が残した足跡(栄光?)は、至るところに散りばめられてもいる!例えば、その名残(象徴)が、「藤原姓」、そして、その「藤」の一文字を持つ、多種多様な支族・姓氏の全国分布でもある(加藤・斎藤・佐藤 etc.)!

さて、そのような「藤原氏」であるが、その始祖は「中臣(藤原)鎌足」(おそらく、百濟王子「余豊璋」?←関裕二氏)であり、645年の「乙巳の変」で、当時の「中大兄皇子(後の天智天皇)」を担いで(唆して?)、時の権力者「蘇我入鹿」を弑逆したことは、あまりにも有名である(陰で、「秦氏(河勝)」が暗躍していたとも考えられるが?)!

その後、彼の子である(ではないという説もあるようであるが?)「藤原不比等」が、天武の死後、彼の正后「持統天皇」(天智天皇の娘)と組んで、世に言う「藤原の世」を創出していったわけであるが、改めて、ここではっきりさせなければならないのは、その「藤原氏」が、果たして、当初より我が国(倭国)に居

た「氏族」であったのかどうか？そしてまた、本当に、常陸の「(大) 中臣氏」の出であったのかどうか？そういうことである（実は、まだまだはっきりとはしていないのである！）？！

言い換えれば、これまで論究してきた「二つの倭国」の存在、そして、その二つの倭国を、近畿・大和において、最終的に「一つの倭国→日本国」としてきた「百済系」の氏族・勢力、その最終的な勝利者（独り勝ち？）が、まさに「藤原氏」であったということであるが（かの「桓武」の母親「高野新笠」は、まさに百済系氏族であったことは、つとに有名である！）、何故、彼（ら）が、自らの祖を、「(大) 中臣氏」としたのかということでもある！

そこで考えられるのが、一方の「中臣氏」の存在であり、その思惑である？多分？「藤原氏（不平等？）」は、自らの祖（「鎌足」）を、没落しかけそうになっていた？、あるいは政権中枢から追い出されそうとしていた？「中臣氏」の系統に組み込ませた？！そして、「中臣氏」側も、そのことを了解した（逆に利用した？）？！要は、両者の思惑（利害？）が一致した？そういうことでなかったかということである？！

ただし、滅ぼされた側の「蘇我氏」（の実祖？）の「稻目」（実は、「欽明」/「ワカタケル大王」？）も、ひょっとしたら？「旧来の蘇我氏？」（「武内宿禰」の後裔とされる「葛城諸族」）への組み入れがあったかもしれない（→これは、かの「上宮王家」の謎ともなる？）？！

多少の混乱をきたすかもしれないが、現時点での考察では、まさにそういうことになるのであるが、考えて見れば、そもそも、このようなことは、当時においては珍しいことではなく、いわゆる「氏姓制度（→「新撰姓氏録」）」とは、多分に、そうした性格（各氏族・勢力の遠謀深慮？）を有していた？！

また、そういう理解（解釈）をすれば、各氏族・勢力間の関係、矛盾（齟齬？）もかなり解決出来るということでもある？！つまり、渡来系の氏族・勢力（ほとんどが、実はそうなのであるが！）は、そうした力あるいは由緒のある氏族・勢力との接合（入籍？）を通して、自らのルーツ／アイデンティティ、あるいは勢威を挿入・確立しようとしたということである？！

ということで、本当は、「藤原氏」は（「蘇我氏」も？）、ある意味信じがたいかもしれないが、「百済」あるいは「旧伽耶地方」から渡来してきた氏族（王族？→扶余温祚系余氏？）であったのではないかということであるが、ある時期（5世紀前後？）から、彼らは、九州倭国（「筑紫倭国」）に入り込み（→「倭の五王」）、それまでの「物部氏」（「饒速日」勢力とされた？しかし、実はこれも、「旧伽耶地方」からの勢力？）が有していた「倭国皇統の枠組み」を活用（篡奪？）して、新たな王権（百済系倭国／「新物部・蘇我政権」？）を確立していった？！

したがって、それ以降の正統性・正当性は、多分に、その「百済系倭国／新



物部・蘇我政権」(最終的には、「上宮王家」?)にあり、その類族である「藤原氏」が、それを横取り、いい意味では継承した? そういう関係ではなかったかということである(かの「乙巳の変/蘇我入鹿・蝦夷の討滅?」とは、まさに、そのためのスタートでもあったということである?)?!

さて、改めて、そういうことになれば、「藤原氏」は、名門豪族の一つ(とされる?)「中臣氏」(「神道」の中心氏族←「占部<sup>うらべ</sup>氏」←「エブス(エビス?)氏」)の系統から出たと主張しているが、それは、まったくの捏造(嘘?)ということになる?!

すなわち、先に述べたように、人質として来日していた、百済王族の「余豊璋」が、同族?の「中大兄皇子(天智)」(彼も、元をたどれば「百済系王族」であったことになる!)を担ぎ上げ、当時の利害関係を同じくする「息長氏」や「秦氏」と組んで、「乙巳の変」を企てた(蘇我氏の「律令体制化」への抵抗・阻止?)?!

そして、663年の「白村江の戦い」(の敗戦)を機に、百済系の「筑紫倭国」(沸流系余氏→(倭の五王/倭(大倭)国)→温祚系余氏)の一部(天智勢力)が近畿へ移動し(→近江遷都!)、その後、「壬申の乱→天武(日本国皇統)の治世」を挟んで、新たな「倭国→日本国」を構築していったということである(これらは、ある意味、「関裕二説」と「兼川晋説」の融合?ということになるが?)?!

ただし、もともとの「倭(人の)国」は、半島南部の伽耶地域(まさに、『魏志』(「倭人伝」)にいう「狗邪韓国→金官伽耶国」は、その一つの国であった!)、そして、一部「百済」地域も含んでいたのであり、後に九州(筑紫・「貴(基肄)国」)に移り住んだ(乗り込んできた?)と考えられる、百済残国(本宗家沸流系余氏)の「兄王=藤<sup>とう</sup>=藤大臣<sup>とうのおおみ</sup>=応神(のモデル?)」も、実は、その「倭(人の)国」の一員であったのである?!

だから、ある意味「百済」は、(筑紫)倭国にとっては「身内(本家?)」なのであり、例の「倭の五王」が、当時の中国南朝へ主張した「七国諸軍事統帥権?(百済が入っていた!)」は、単なる絵空事ではなく、それなりの根拠があったというようにも理解されるのである!

ただし、それについては、何故か、「百済」への軍事統帥権?は認められなかった!それは、百済が、別の系統「仇台系」によって(「仇台百済」)、別途認められていたからと考えられるようであるが、実は、その「仇台系百済」は、例の「豊国倭国→継体王統?」(「筑紫倭国」の分家?そこに入質していた「昆支」「軍君」兄弟!)につながってもいるのである(兼川晋氏)?!

その意味では、それらについては、まだまだ、さらなる精緻な究明が必要ではあるが、こうした外来の氏族・勢力の、東アジア全体での移動や交流(征服や移民・植民?)の全貌から、倭国(→日本国)の歴史は見なければいけないのもある!

なお、このように、「百濟」は（もちろん「新羅」もそうである！）、実に悩ましい？存在なのであるが、その百濟王族自体は、前にも述べたように、北方の「扶余族（ツングース系）」とされ（高句麗も同じ！）、その名残・要素は、とりわけ「後期古墳時代」には顕著となっているということである（装飾壁画、武器・馬具等の埋葬）！それは、まさしく、そうした経緯によるものと思われるのである？！

改めて、この百濟系王族の末裔と思われる「藤原氏（不比等）」は、まさに「記紀」編纂の張本人（黒幕？）なのでもあるが、その「百濟」自体が、非常に複雑な系統、複雑な経緯を有しており、真にその動きと連動させながら、我が国の建国史を詳らかにしようとするならば、それだけでも、大変な労苦を伴うわけである？！

ちなみに、件の「余豊璋（中臣鎌足？）」は、「白村江の戦い」の際に、本国百濟に迎え入れられ、百濟国王？として、「唐・新羅連合軍」に立ち向かうことになっていたが、腹心の「鬼室福信」を謀反の疑いで殺し、結果的に、百濟滅亡に拍車を掛けたとされる？！当人は、南へ逃げたとか、北へ逃げたとかという話もあるようであるが、関裕二氏によれば、秘かに倭国に戻り、まさに「中臣鎌足」として、天智朝で活躍したということである？！

翻って、「記紀」のストーリー（直接は「神代」！）は、事実上は、3世紀後半の大和建国（纏向祭政都市の建設）から始まっていると考えられるが、その時（それ以降？）の各氏族・勢力の協力・反目・離反の状況を、まさに「神話」の形で書き記したものであることは、以前にも述べた通りである？！

すなわち、その「神話」の時期は、遙か？紀元前7世紀以前の話となっているわけであるが、それ自体は、大和建国までの歴史（前史？）ということではないということ（つまり、真実の歴史ではないということ！）である？！一方で、そのための「前史？」が、どうしても欲しかったということである？！

しかるに、その中で、藤原氏（不比等？）が全精力（悪知恵？）を注いで創り上げた「万世一系の皇統譜」において注目されるのが、彼らが籍を借りた（接ぎ木した？）「中臣氏」の祖とされる「天兒屋あめのこやね命」であり、「高天原」の司令塔とされる「高木（城）神→高皇産靈神」（『古事記』では「思兼（金）神」！）であるが、その双方の（神の）関係（役割）を捉えてみると、それが、「中臣氏」と「藤原氏」のそれによく似ている（相当している？）ことが分かるのである？！

何故なら、その「高木（城）神→高皇産靈神（「思兼（金）神」）」は、最高神の「天照大神」より権威（役割？）が上で、例の「国譲り」や「天孫降臨」の場面では、彼の意向（指示）で、物事が進んでいるように思われるのである？！

このことは、かなりの人が指摘する、藤原氏（不比等）が、「乙巳の変」以降、そして「天武」亡き後、彼の妻（皇后）「持統」（→天照大神？）を抱き込んで、

時の権勢を作り上げていった過程を、如実に示しているということでもある?!

繰り返しになるが、それが、記紀の「高木(城)神→高皇産靈神=思兼(金)神」が、例えば「天岩戸隠れ」の際に(「天照大神」が、「素戔鳴命」の狼藉に我慢が出来ず、「天岩戸」に隠れてしまって、世の中が真っ暗になってしまったという事件!)、周囲に相談を呼びかけ(知恵を働かし!)、無事に、「天照大神」を岩戸から引っ張り出し、再び、世の中が明るくなったということであるが、その役割が、まさに「藤原氏(鎌足・不比等)」の役割に投影されていると見做されるわけである?!

こうした話を、単なる「神話」と取るか(まさか真実と受け止める人はいないであろうが?)、やはりそこに、「藤原・持統政権」の権謀術策が働いていると取るのか、ロマンを求める人には申し訳ないが、もちろん前者だと思わないわけにはいかないのである(ある意味「分かり易過ぎ?」)?!最早、それは、単なる神話(寓話)ではない?!見事な、「藤原氏」のための演出であるということである?!

○「息長氏」や「秦氏」、そして、「賀茂(直)氏」の役割とは?

#### ・息長氏

ということで、最終的な勝利者?(独り勝ち)は「藤原氏」なのであるが、たとえ様々な権謀術策を駆使したとしても、ただ彼らだけで、すべてをうまく運ばせたとは、到底考えられない!そこに、その他の氏族・勢力の協力、抱き込みがあったということでもある?!最もその可能性があるのは、「中臣氏」であるが(氏の名跡を献上している?)、他には、「息長氏」や「秦氏」、そして、「賀茂(鴨)族」の一部の「賀茂(直)氏」であろう?!

ただし、この場合、「息長」、「秦」双方の氏族・勢力は、まさにセット(コンビ?)で把握した方がよいということでもあるので、ここではそのようにするが、一方で、そのように捉えると、まさに「応神」から「継体」、そして「欽明」、さらには「天智」へと続く「現皇室の系流」が、ある意味スムーズに理解されるということでもある?!

つまり、「息長氏」と「秦氏」は、ある時期からの「大和政権」を、陰(裏?)で支えて(動かして?)きたということであるが、文献的には、関係する記述が少なく、謎の氏族ともされている?!とは言え、その「息長氏」は、近江国坂田郡(現在の米原市のほとんどと長浜市の一部)を本拠地とした古代豪族であり(とするのが一般的な見解?)、「息長古墳群」(5世紀末~6世紀後半)を残した豪族であったことは確かである!

ただし、その「息長氏」は、近畿では後発の氏族・勢力ではあるが、実は、「神功皇后(息長足姫)」や「天日矛(ツヌガアラシト?)」といった、ある意味最上級の尊称?をもった人物の関係氏族・勢力である!しかも、「応神」以降、かなりの数の后妃を輩出している!

彼らは、「神功皇后（息長足姫）」、「応神」、「継体」、そして「欽明」へと続く政権を現出させ？、その外戚者として（子女を后妃に上げる？）、重要な役割（貢献）を果たしたということであるが（だから、『新撰姓氏録』では、いわゆる「皇別」とされる！）、どこから来て、何をしたのかである？！

その居住地（本拠地）は、美濃・越への交通の要衝でもあり、天野川河口にある朝妻津により、大津・琵琶湖北岸の塩津とも繋がっていた。ただ、同氏の末裔が、河内国に、近世まで在住しており、その地が、本拠地であったという説もあり、また、播磨・吉備などにも、「息長」を名に持つ人物がおり、播磨・吉備が本拠地であった可能性もあるということではある？！

いずれにしても、そうした「息長」姓が、各地に幾つかあるということは、彼らが、互いの移動の前後はともかく、それらの地に勢力を張っていたことは、疑いようのない事実だということになる？！

ただし、私は、その最初の出発点は、北東部九州（豊前）の香春岳周辺（「豊国」、いわゆる『隋書』に言う「秦王国」？で、5世紀末？「秦氏」と一緒に、畿内へ進出した？）が、一番相応しいと受け止めている！何故なら、そこには「香春神社」というものがあり、「辛国息長大姫大目からくにおきながおおひめおおめ命」という、極めて重要な？祭神（人物→女性？）が祀られているからである（おそらく彼女が、「神功皇后」のモデルだったのではないか？）？！

しかも、この「息長（息が長い？）」の名称発祥の由来は、上古からの鍛冶に関する技術から生じたとみられる（実際、香春岳周辺は銅の採掘場でもあった！）？！そしてまた、そこに、「辛国（韓国）」という名が冠されていることから分かるように、その住民（の先祖）は、朝鮮半島南部（加羅/伽耶）からということであるのである（なお、そこは、一般に「新羅系」とされているが、伽耶滅亡後、そこが新羅となっているからであろう？）？！

ちなみに、これに関わる大いなるヒント（根拠？）が、実は、例の「磐井の乱」（通説では「528年」とされているが、実際は「515年」？）の際に、息長氏系の「継体」が「物部麁鹿火あらかい」に言ったという、「（勝利後は、）自分は、長門以東を統治する！おまえ（麁鹿火）は、筑紫以西を統治せよ！」という言質である？！

つまり、それは、「（仇台系百済の）継体勢力」（+息長氏+秦氏？）が東（近畿）に移り、九州倭国は、豊国倭国（九州物部氏）が統治するという形になったというようにも取れるということである？！要するに、その「磐井の乱」に前後して？、北東部九州の「息長氏」や「秦氏」が、後の「（仇台系百済の）継体勢力」（+息長氏+秦氏？）として、近畿に移動していったということである？！

事実、その頃の近畿（河内）への影響・流入の痕跡として、伽耶系から百済系への須恵器の変化、河内平野（潟）の大規模灌漑、そして、古市／百舌鳥の

大古墳群（「群集墳」→誉田御廟山陵／大山陵）の出現等がある?!ここに、以前にも述べたように、豊国倭国（仇台系百済+息長氏+秦氏）の、筑紫（九州）倭国からの離脱と近畿（河内・近江）への進出があるということである?!

そしてまた、そこに、「軍君/男弟王→オヲド/彦太尊」への「継体(すり替え?)」（←「継体二人説」）と、一方で、倭国皇統(物部麤鹿火→尾輿→上宮王家→蘇我氏?)の九州（筑紫）温存、そして、その後の近畿移動?!という形が出来上がったということである?!

なお、「記紀」によれば、この「息長氏」は、第15代応神天皇の皇子「若沼毛二俣王」の子・「意富富杼<sup>おおほど</sup>王」を祖とするとされているが、かの「息長足姫（神功皇后）」や、彼女の父「息長宿禰王」（丹波の「彦坐王」の後裔!）の名からすれば、それ以前からの氏族（豪族?）であったことは間違いない?!

とは言え、その「意富富杼王」は、件の「継体（オヲド）」（通常のそれ!）の祖先（曾祖父?）とされており、その在地（近江）にある「山津照神社」（境内に「山津照神社古墳」あり）の主祭神が「国常立命」（?←意富富杼王）とされ、いわゆる「万世一系」の中核?ともされているように見える（「記紀」において、著しく配慮されているということか?）?!

また、繰り返すように、その姓<sup>かばね</sup>は、公（または君<sup>きみ</sup>）であり、同族に、「三国公」（→三国真人）・坂田公（→坂田真人）・酒人公（→酒人真人）などがある!ちなみに、「真人<sup>まひと</sup>」は、天武天皇の時の「八色<sup>やくさ</sup>の姓」の中で、氏族の最高位の名称であるとされるが、それが、この「息長氏」関係の氏族に与えられているわけである?!

とにかく、「息長氏」は、直接的には、九州からの?「応神天皇」と結びついているのであるが、前にも述べたように、彼らの出身地（本拠地）は、北東部九州（豊前田川）の「香春岳」周辺にあったことは間違いない?!しかも、そこにある「香春神社」（旧社）の祭神「辛国息長大姫大目命（神功皇后→豊比売命?）」は、近くの「英彦山」にも祠があったとされる「忍骨<sup>おしほね</sup>命」（天孫「瓊瓊杵<sup>にぎ</sup>尊」の長子?「忍穂耳<sup>おしほみ</sup>命」を連想させる?）の母親ともされている!

「記紀」における万世一系のなかに、（自らの意向で?）それとなく組み込まれているようにも思えるのであるが、かの神功皇后が、嫡系の「仲哀天皇」の皇后という立場で（万世一系の皇統譜に入れ込むため?）、「武内宿禰」や「住吉大神」との関係を示し（それが事実であったため?）、そこに、重要な存在の（造作された?）「応神天皇」を、彼女（と仲哀?）の子としているわけである?!

まさに、「応神」以降の、「百済系王族」による「大和（倭国→日本国）王権」の橋渡しの役割を、他ならぬ「息長氏」が果たした（ということを示している?）ということであるが、ただし、それは、記紀編纂時の政権（持統・藤原政権）が、そのように潤色（捏造?）したということであって、その政権の正統性?は、

むしろ「息長氏（「神功皇后）」）、そして、「武内宿禰」「住吉大神」の側にあったのかもしれない?!だから、そのこと自体は、秘匿されなければならなかった?!

しかも、その「息長氏」の頭領?であった「天日矛」（特定の個人ではなかったかもしれない?）は、実は「武内宿禰」であったかもしれないし、その分身?が、（出雲と関わる?）「事代主」というような形で、「記紀」に組み入れられているのかもしれない?!さらには、それが、「住吉大神」というような祭神にも、つながっていったものとも考えられる（→関裕二説?）?!

すなわち、彼らの後裔・関係勢力であった「息長氏」や「秦氏」は、河内・近江・越等に移動し、そこでの同族あるいは協力者達（大伴金村・巨勢男人等?）と組んで、「オヲド王/彦太尊」を擁立し、河内・近江、そして大和へ進出していった?!それが、「記紀」が言う「継体天皇」であり、その治世であった?!

一方、残った「筑紫（九州）倭国」は、最初「磐井」（「武」?）の子の「葛子」が継いだ。その後、「荒山大連」（「物部鹿火」の類族?あるいは本人?）の子の「尾輿」に移り、さらにその後、その実権は、弟の「目連めのむらじ」（蘇我稻目?→欽明/ワカタケル大王?!）に移り、物部/蘇我による倭国皇統（百濟温祚系余氏）が、九州に残った形となった?!

上宮王家と呼ばれる「一族」が出てきたのも、ここからであるが、実は、隋に使いを送った（600年）、有名な「日出処天子・天足彦あまたらしひこ」も、この王である（決して、通説の「聖徳太子」ではない!）?!ただし、彼ら一族も、後に近畿大和（飛鳥地方）へ移動した?!

以上のように、捉えようによっては、まさに驚天動地のような話（情報?）となるが、これについては、例の「香春神社」の社前の、「第三座豊比売命は、神武天皇の外祖母、住吉大明神の御母にして」という説明が、改めてクローズアップされてくる?!そして、もし、それが、「記紀」が描く「日向三代」の内実?を示すものであるとしたら、ある意味とんでもない自白?であることにもなるわけである?!

つまり、問題は、その「第三の岳の祭神」である「豊比売（比咩）命」のところであるが、すなわち、彼女が、「神武天皇」の外祖母であり、また、「住吉大（明）神」の御母ということであれば、その「住吉大（明）神」は、少なくとも母系的には「ワニ（族）→和珥氏」ということになる?!

当初、私は、「神武天皇の外祖母、住吉大明神の御母」と書かれているので、「住吉大（明）神」とは、「（「日向三代」の）ウガヤフキアエズ」のことと受け止めていたが、それは間違いで（彼は、「神武」の父親なので、不思議だとは思っていた?）、実は、「神武天皇の外祖母」とは、（「神武天皇」の母親の）「玉依姫」の「母親」ということになるわけである!

そうならば、その「玉依姫」と、姉である「豊玉姫」（ホオリ／ホホデミ／山幸彦の妻→彼女は「ワニ（族）」であった?!）の「父親」は、かの「海神（豊玉彦）／安曇族？」であるので（少なくとも、「豊玉姫」がそうであるので!）、「住吉大（明）神」も、「海神（豊玉彦）／安曇族？」の子で、彼は、彼女らの兄弟か、別の父親との「異父兄弟」ということになる（もちろん、「豊比売（咩）命」が、彼・彼女らの「母親」である!）?!つまり、「住吉大（明）神」には、「海神（豊玉彦）」あるいは「ワニ（族）」の血が流れていたとも考えられるのである?!

さて、そうなると、改めて、「海神（豊玉彦）」と「豊比売（比咩）命」は夫婦?ではあるが、「住吉大（明）神」が、彼らの子なのか?それとも、「豊比売（比咩）命」と別の男性との子なのか?ということにもなる!もし、後者であれば、当然「豊比売（比咩）命」は、二人の男（部族勢力）と関係を持っていたということになる（ちなみに、「玉依姫」は「カモ族」につながる?また、「豊玉姫」だけが、「海神（豊玉彦）」の子である可能性もある?）?!

もちろん、常識的には?前者であるとは思われるが、いずれにしても、「海神（豊玉彦）」は、いわゆる「安曇族」、「豊比売（比咩）命」は「ワニ族→和珥氏／多氏?」（←少なくとも、娘?「豊玉姫」が「ワニ（族）」であるようなので!）と考えられるので、このつながり?は、「安曇族」と「ワニ族→和珥氏／多氏?」の関係を暗示している?そして、「住吉大（明）神」も、その関係であることは、これまた明らかであろう?!

しかし、一方で、その「住吉大（明）神」は、「隼人」の血筋も受けていると考えられるので、「海神（安曇族）」と「住吉大（明）神（隼人族?）」が、そのような血縁関係（「豊比売（比咩）命」を介して!）でつながっていることは、ある意味当然なのかもしれない?!何故なら、「海神（安曇族）」と「隼人族」は、東シナ海／玄海灘における「大海人族?」として協力・活躍していた?!

すなわち、「隼人」（ハヤヒト?）とは、別の?「航海神」を祖に戴く、操舵に巧みな「海人系氏族」であることは間違いなく（「応神」以降?、朝廷の警護や河川航行での先導役を務めている!）、そのことも含めて（「記紀」では、ある意味虐げられているようではあるが?）、彼らの存在の大きさ?が示されている?!その証拠に、「隼人」の祖ホデリ（ホスセリ）／海幸彦が、天孫「ニニギノミコト」の三子神の中の長男とされている!

翻って、『日本書紀』では、「阿多の国つ神『事勝国勝ことかつくにかつ神は、是伊弉諾尊の子なり。亦の名は塩土老翁しおつちのおきな』とあり、阿多の国津神、すなわち、阿多隼人の祖神が塩土老翁＝シオツチの神と明記されている」ということである（宮島正人氏）。実は、その「塩土老翁」は、ここで言う「住吉大神」とも考えられており、そうならば、彼は、限りなく「隼人族」と結びつくこととなるわけである?!

ただし、その「住吉大神」を祭神として祀っている「住吉系神社」（大阪、下関及び福岡市には、それぞれ本社のな？「住吉大社／神社」がある！）の祭主は、「物部系？」の「尾張氏」と同族の「津守氏」とされている！果たして、その「津守氏」が、ここで言う「隼人系」の氏族なのかどうか？残念ながら、そのことについては、今のところよく分からないが（だが、そうした氏族系譜については、後々の造作によって、かなりの変異が見られる！←『新撰姓氏録』）、「住吉大神」（住吉族？→津守氏）が、一方で、「武内宿禰」「神功皇后」「応神天皇」と関わりながら、瀬戸内海航路を牛耳っていたことは確かであろう？！

とは言え、この辺りの事情（史実？）は、かの「倭の五王」の時代（5世紀）の頃と、ほとんど？重なっており（したがって、一番厄介な時代？）、それらとの関係性（整合性）が、改めて問われるところではある！すなわち、そこに、「伽耶」や「百濟」との関係が、どのように絡んでいるのかということである？！

だが、そのことを、他ならぬ新羅系の「息長氏」が、自らに関わる歴史？として書き記していること自体は、別な意味で不思議なことではある？！それは、先述の、香春岳の「香春神社」の「社前書」のことであるが、「武内宿禰」や「神功皇后」のことはともかく（彼らは、身内であるので当然である？）、「神武天皇」や「豊比売（比咩）命」、そして、何より「住吉大（明）神」までも、自らの事績・関係性？と関わらせて書いているのである？！

つまり、「辛国息長大姫大目命」はともかくとして（「新羅」から持ち込んだ、彼らの祖先神？）、「忍骨おしほね命」（天孫ニニギノミコトの父親→「忍穂耳命」？）や「豊比売（比咩）命」までも、その身内としているのである？！まるで、「記紀」における「高天原神話」を熟知しているかのようなようである？！とすれば、ひょっとしたら、そのストーリーの元話は、他ならぬ彼らの内にあったということか（否、彼らが、創作した？）？！

まあ、これについては、これから、改めて考え直して（追求して）いくことになるだろうが、この時点で、「記紀」の編纂（その原案づくり？）においては、藤原氏（不比等）だけでなく、その利害共有者（理解者／協力者？）であった「中臣氏」、そして「息長氏」、さらには「秦氏」が、大きく関わっていたということである（特に、後二者は、いわゆる「記紀」編纂を先行あるいは潜行させていた？）？！とりわけ、ここの文脈では、「息長氏」の関与が大きいということである？！

#### ・秦氏

次が、改めて、藤原氏との関わりが深いと見られる？「秦氏」についてである！もともと彼らも「豊前」の出身（そこへの入植者）であり、「息長氏」と友好関係があったことは、ほぼ間違いない？！すなわち、彼らは、渡来人とはされながらも（辰韓／新羅系、厳密には伽耶系帰化人？しかし、「百濟」からの大量移住者ともされている？←「弓月君（融通王）」）、早くから？北部九州（豊前→秦王国？）



に入植し、その後、瀬戸内海、播磨（明石）、河内、大和、そして京都（山城）へ移動し（ただし、移動経路が、単純にそうであったのかどうかは、まだ確定はできない？）、最終的には、藤原氏（桓武）の平安京遷都（794年）を、その経済力（そして宗教力！）で実現させている？！

しかも、その影響力（発言力？）が、甚大なものであったことは、容易に？推測されるわけであるが、もう一つ、そこでは、「カモ族」（の主力？→「建角身命」→「賀茂県主」＝下鴨神社/上賀茂神社）と繋がったりして（経済的支援？）、政治の表舞台ではなく、どちらかと言えば、裏舞台？（経済・文化、そして宗教の面）で活躍した氏族のようである（例えば、「伏見稻荷大社」や「松尾大社」、あるいは「太秦広隆寺」等の創建、「修験道」、さらには「能楽」等への貢献もある！）！

とにかく、この秦氏は、朝鮮半島からの大量渡来（移民？）、そして、その後の、蘇我氏（聖徳太子？）、あるいは欽明天皇への献身的協力も（なかでも「秦河勝」！）、古代史解明にとっては、避けては通れない氏族なのである？！それ故に、謎（陰？）もまた多い氏族ということでもあるが、ポイントは、何故、歴史（政権）の表舞台に顔を出していないかということでもある？！そこには、何か、大きな原因（背景）があったのではないか？！

そんな、ある意味とんでもない？「秦氏」であるが、改めて、彼らは、朝鮮半島経由ではあったが、漢民族系の帰化人で、秦（中国）から、我が国に渡来した氏族ともされている（秦の「始皇帝」の末裔？←『新撰姓氏録』）？！最終的？には、上にも挙げたように、葛野郡（現・京都市右京区南部・西京区あたり）を本拠地とし、養蚕、機織、酒造、治水などの技術をもった集団であったわけであるが、注目されるのは、そこにある「木嶋坐このしまにいます天照御魂神社」である！

その祭神は、「天照国照天火明命」（天火明命）、「天照大神」、「天日神命」などとされているようであるが、いずれにしても、それらは、すべて「太陽神」である（本来は一つか？）？！

ただし、これらの祭神をもつ神社の多くには、現在の祭神が「天火明命」（物部・尾張氏等祖神？）とされることに基づき、その神を、特に「尾張氏」の奉斎神とする説もあり、その説の中で、この地には、元々尾張氏系の人々がいて、「天照御魂みむすび神」を奉斎していたが、「秦氏」の進出・開拓とともに、その在地系祭祀も継承されたとされているようでもある？！

それはともかく、そこで注目されるのは、「秦氏」と「賀茂（直／県主）氏」の関係（話）である！すなわち、そこでの関係（話）は、大和での、「神武」の正後の「姫踏鞴五十鈴ひめたたらいすず媛」が、「三嶋溝杭」（大山祇？）の娘（勢夜陀多良比売せやだたらひめ）が、上流から流れてきた「丹塗り矢（大物主神？）」に感精して生んだ子であるとされているが、そのモチーフと、まさに「瓜二つ」の話（関係）があるのである！

ちなみに、その「丹塗り矢」伝承は、本来は、「鴨族（賀茂氏）」にあったのではないか?!何故なら、その二つの物語?に関係しているのは、「鴨族（賀茂氏）」であるからである?!しかも、それは、「丹生」（硫化水銀／辰砂）採掘族の伝承であるようである?!

ということで、ここでも、どうしても、もうひとつ気になってくるのが、例の、遠く離れた九州豊前の「秦王国」の存在である（そこには、「秦氏」が、数多く蟠集していた!）?!すなわち、この「秦氏」の、改めての謎は、あの「物部氏」と同じように、その根拠地?が、九州（豊前）と近畿（河内）にあるということである?!どちらが先かと言えば、多分前者が先だと思われるが（地勢的に見て?）、ここにも「二つの倭国?」の影?が見え隠れするのでもある?!

しかるに、この「秦氏」は、5世紀末（実際は3世紀末?）に、伽耶（多分?辰韓/月氏国?）から、氏の祖「弓月の君（融通王）」が、120（or127）県の民を率いて大量渡来したことから始まるとされているが、要は、「豊前の秦氏」と「畿内の秦氏」が、一体どのような関係にあったのかということである?!しかも、「豊前の秦氏」は、多分、北部九州で、「息長氏」と合流・合体?したとも考えられる?!

だが、「記紀」は、「物部氏」や「蘇我氏」、さらには「尾張氏」や「海部氏」もそうであるが、「秦氏」あるいは「賀茂氏（族）」の存在、そして、彼らの関係を真正面から披瀝することが出来なかった?!つまり、隠している?否、彼らに、大いに助力（経済的支援?）をもらったにも拘らず、裏切り、尻尾切り?をしたりして、彼らを、歴史の表舞台に登場させることをしなかった?!逆に言えば、彼らの方が、氏族・勢力としての正統性・正当性を有していたのかもしれない（貢献度が高いということ?）?!そういうことである?!

なお、ここで、さらに「秦氏」関係の話題（証拠?）を一つ挙げておくと、かの「秦河勝」について、ある意味恐ろしい?推測（事実?）がある!それは、例の関裕二氏のものであるが、645年の「大化の改新（正確には「乙巳の変」!）」において、「中大兄皇子」と「中臣鎌足」らが、時の権力者「蘇我入鹿」を惨殺?した事件である!実は、その実行犯が、他でもない「秦河勝」であったのではないかということである（ただし、『日本書紀』には、その実行犯が、具体的に誰であったかは示されていない!ただ、「韓人」とだけ示されている!しかし、「秦氏」であれば、当然、そのように表記することが可能である!）?!

すなわち、律令国家づくりに邁進する蘇我氏の動きを（「日本書紀」では、彼らの「専横」とされてはいるが、近年では、「そうしたものではなかった!」という評価に変わりつつある!）、時の守旧派勢力（藤原氏、秦氏等?）が阻もうとしたのが、その事件であり、その実行犯が「秦河勝」で、彼は、これを境に、歴史の表舞台から姿を消し、播磨の坂越に身を隠したのではないかということであ

る?!

秦氏が、経済的権益を大いに得ていたことは間違いないことであるが、ある時「秦河勝」が、それまで支援してきた「蘇我氏（本宗家）」を裏切って、「中大兄皇子」と「中臣鎌足」側についたのではないかということである?!

ちなみに、それをきっかけとして生まれた? 「聖徳太子信仰（創出?）」の背景には、そうした経緯（真相?）があり、時の政権（奪取?）側には、かなりの「後ろめたさ」があり、そして、その社会的非難（「祟り」?）に抗うために、藤原氏や、他ならぬ秦氏が、並々ならぬ努力（懺悔?）を惜しまなかった?! こうした証拠? は、他にも数限りなくある（「法隆寺」等の建設! これもまた、「関裕二氏」の所説に拠るが!）?! ということである?!

#### ・「賀茂（加茂・鴨・迦毛）族」→「賀茂（直）氏」

最後が、改めて、「賀茂氏（族）」であるが、彼らは、実は、「（初期）大和王権」のキーマンの存在（主役?）だったのではないか?! そんな思いが、改めて強く沸き起こってくるのでもある?!

と言うのも、賀茂氏（族）は、「神武（皇祖?）」、そして「三輪／大神<sup>おおみわ</sup>氏」（「大物主」勢力）、さらには、先に見てきたように、「息長氏」や「秦氏」と、強くつながっていると思われるからである?! すなわち、賀茂氏（族）は、もう一つの? 「大和建国の功労者?!」であり、絶対に「大和建国」に参画している?! だが、その「様相は複雑怪奇?!」なのである（それは、「（カモ）タケツヌミ」と「アジスキタカヒコネ（迦毛大神）」と「事代主」の関係からも分かる?）?!

ということで、ここで改めて、「賀茂氏（族）」とは、いかなる氏族・勢力（部族）であったのか?! すなわち、その存在（活躍?）、他の氏族・勢力の、彼らとの関わりが気になってくるということである! 例えば、その「カモ族」の始祖? とされる「（カモ）建角身<sup>タケツヌミ</sup>→八咫鳥<sup>ヤタガラス</sup>」は、南九州の「曾」の出身であるとか、あるいは、彼がそのモデルとなっていると思われる? 「神武」の東征先の重要寄港地? 「吉備」には、「カモ」の名が群集している?! そしてまた、奈良、京都をはじめ、全国各地に「カモ」の名が残されている?!

さらにまた、祭祀に関わる「日」と「火」の関係から、大和（三輪）・伊勢・丹後、そして出雲の関係が浮かび上がってくるのであるが、実は、吉備の「賀茂西遺跡」が、「手焙形土器」（「火」の祭祀用?）の発祥の地（「カモ族」の出発地?）であった?! したがって、本来（最初?）の「火」の勢力が、この「カモ族」であった、あるいは、その「カモ族」を中心として、「火」の勢力（→前方後方墳勢力?）が形作られたということである?!

そこで改めて、以前私が想定したように、初代「神武」が、後の「応神」の創作? のために必要とされた仮想の天皇であり、そのモデル（ダミー?）が、「カモタケツヌミ（八咫鳥）」であったとすれば、事実上は、彼（→賀茂氏（族））

が、実際の（「記紀」に示された）「神武」の事績を担ったことになる?!

つまり、(南部)九州から、宇佐→(遠賀)→吉備経由で、「東征(実際は移民?)」してきた「賀茂氏(族)」が、大和「葛城」の地で、まずは「三輪氏族」(「出雲(大国主/オオナムチ命)」と結びつけられた?「大物主」勢力)と合流・合体し(→葛城王朝?)、そこに、後から乗り込んで来た「饒速日→吉備(物部?)勢力」と、三輪山で大同団結し、それが、まさに「(初期)大和王権」を形づくることになったということである(纏向/三輪王朝)?!

ここでは、その中心(結び役→主役?)となったのが、「賀茂氏(族)」であったということであるが、一方で、その「賀茂氏(族)」は、その後の「大和王権」の推移の中で、協力者?という面(→皇別)と敵対者?という面(→地祇)に分かれた(大きく二つに分かれたということ?!)?!

その理由(原因)は、おそらく、近畿に移動してきた「吉備・饒速日勢力」(物部氏?)の一部(饒速日の子の「ウマシマデ(ジ)」勢力か?)が、他の勢力と組んで、賀茂・三輪政権から離脱した(裏切った?)?!そして、彼らが、纏向に、新たに「前方後円墳勢力」を形成した?!もちろん、そこには、「ワニ族」(富/多氏→前方後方墳勢力?)から離反した「尾張氏」が合流したということである?!

要するに、この流れは、「記紀」からすれば、「賀茂氏(族)」は、大和建国に携わった氏族・勢力ではあったが、その後「皇別」、そして、「神別」の「天神系」と「地祇系」に分裂したということになるが、その顛末?が、「(カモ)タケツヌミ」と「アジスキタカヒコネ(迦毛大神)」、そして「事代主神(恵比寿様?)」の関係ということにもなるのである?!

ただし、彼らは、いずれも、「賀茂氏(族)」であったことは間違いないのである?!だが、まだまだ、その詳細は、今一つスッキリとしない?!だから、上手く描けないのでもある?!

とは言え、例えば、「三輪氏族(大物主系)」に属する「地祇系」の「賀茂(臣)氏」(→「葛城系賀茂氏」)は、第10代天皇「崇神」の時に登場してくる「大田田(多直<sup>おおただ</sup>?)根子」の孫「大鴨積<sup>おおかもつみ</sup>」を始祖とし、奈良盆地の西の大和国葛上郡鴨(現在の奈良県御所市)を本拠地とするとされるが、これは、「三輪氏族」と「賀茂氏(族)」(の一派?)が、大和葛城で合流・合体?して出来た氏族・勢力ということであろう?!

すなわち、ある時期からそこに蟠集していた(出雲系?)「賀茂氏(族)」は、先に?、山背(城)に向かっていた「賀茂県主系」(こちらは、後に、「秦氏」や「息長氏」と組んだことは間違いない→上賀茂神社・下鴨神社!)と、葛城に残った「賀茂君・朝臣系」(「賀茂(臣)氏」→「高鴨神社」・「八重事代主神社」等)に分かれた?!

その後、葛城に残った勢力は、「三輪氏(大物主神)」と組んで「大和建国」に

参画したが、何らかの理由で、「アジスキタカヒコネ系」と「事代主神系」とに分かれた（多分？、「事代主神系」の方が積極的に参画した?!）?!

ちなみに、大和（橿原）で「神武」の皇后となった「媛蹈鞬五十鈴媛ひめたたらいすずひめ命」は、三輪山（「大物主神」）を祭る巫女だったと思われるが、その婚姻は、「神武」（賀茂氏（族）?）が、大和の出雲勢力（「大物主神」→「事代主神」系）と合流・合体?したことを物語っている?!そして、その皇后の出身が、製鉄と深い関係がある氏族（出雲族?）だったということになる?!

その意味で、「初期大和王権」は、「製鉄族（山の民）」と「海人族（海の民）」の合流・合体の産物であった?!そして、その「海人族（海の民）」が、まさに「賀茂氏（族）」であったということでもある?!

この間、「吉備」の（を經由してきた?）「饒速日」（物部?）勢力（後から来た?「伽耶」勢力?太陽信仰族?→後の「崇神」に投影?!）が、先住の「葛城勢力」（「事代主系」と「アジスキタカヒコネ系」）を分断?させ（逆に、この時点で、両系統が出雲と結びつけられたのかも?）、「饒速日」の子の「ウマシマデ（ジ）」が、「大和王権」（「物部氏族」の政権?）を確立させたということでもある?!だから、「賀茂県主系」は、山背（城）に向かった（逃げた?）?!

いずれにしても、以上のように、「息長氏」「秦氏」「賀茂氏（族）」が、まさに「大和王権」の、真実の鍵を握っているということは明らかなのであるが、まだまだ、その具体に辿り着いているわけでは決してない?!否、むしろ新たな疑問（謎）も、出て来ている次第なのである?!

(2)敗者?としての物部氏、蘇我氏（武内宿禰系）、和珥（邇）氏／多（太）氏、大伴氏、そして、賀茂（臣）氏?!

○王権の「正統性」の淵源は、吉備から来た?「饒速日にぎはやひ」勢力?それが、「物部氏（尾張氏／海部氏を含む）」?!そして、それを引き継いだ「蘇我氏」?!

さて、翻って、その「新たな疑問（謎）」であるが、端的に、「藤原氏」自体はともかく、その「藤原政権」が、ある意味全力を挙げて?、その存在と関係をもみ消そう（否定しよう?）とした?「物部氏」と「蘇我氏」のことである!しかも、その両者の素性（役割?）が、先の「賀茂氏（族）」の素性（役割?）からもたらされたのではないかということでもある?!

どういうことかと言うと、「物部氏」と「蘇我氏」の両者とも、いわゆる「古代豪族」で、まさに「大和王権」の中心であった（ように示されている?）わけであるが、実は、彼らも、「藤原氏」と同じ「百濟系」（百濟を經由してきたという意味?も含めて!）であったということである?!

そして、ここがミソであるが、その双方の氏族の祖先を、3世紀以降の、実際の大和王権を樹立・形成してきた、別の氏族・勢力の系統に潜り込ませ（組入れ?）、その双方を、古代から続く名門豪族として位置づけているのではない

かということである?!そして、その、別の氏族・勢力が、他ならぬ「賀茂氏(族)」なのではないかということである(否、もしかすると、「海部氏」かもしれない?)?!

したがって、そうなると、我が国古代史の解明において、「物部氏」と「蘇我氏」は、事実上は、百済からの?後発渡来(→「倭の五王」?)の氏族・勢力ということになり、それ以前の、彼らの存在と活躍?は、別な角度(氏族・勢力)からの分析・理解を求めるものとなるということになる?!

つまり、それ以前の存在(活躍?)とは、彼らが、その系譜に結び付けた氏族・勢力の存在(活躍?)ということであり、その限りにおける分析・解釈が必要だということである?!例えば、「物部氏」の場合は、「饒速日→ウマシマデ(ジ)」から「物部麁鹿火」まで?の系譜と実績、そして、「蘇我氏」の場合は、「蘇我石川宿禰」→「蘇我満智」(「木苮もくら満致」?←百済「木苮氏」))から「高麗<sub>こま</sub>」まで?の系譜と実績である?!

しかるに、今のところ、物部氏(「物部麁鹿火」まで?)のそれは、百済本国と北部九州(とりわけ遠賀川流域?)、蘇我氏(「高麗」まで?)のそれは、百済本国と北部九州(とりわけ嘉瀬川流域?)のそれというようにも考えられるが、要は、「欽明期」から、百済系の「物部・蘇我体制」が確立されたということである?!

とにかく、そのように捉えることによって、「九州倭国」と「近畿倭国(→「日本国」)」の並立・統合(移動)、そこにおける「物部氏」「蘇我氏」の介在、そして、その関係を、かなり無理なく?理解することができるということである?!なお、「藤原氏」が、例の「中臣氏」に入り込んだ?ということは、先に確認したことである?!

ちなみに、改めてどうして、まさに、このような大胆な考察(推理?)を為すことが出来るのかと、ある種の失笑?まで買うかもしれないが、「系譜入籍(捏造?)」については、同じ百済系?の「藤原氏」がそうしているのであれば、「物部氏」や「蘇我氏」だって、そうしているのかもしれないのである?!

彼らも、いわゆる「渡来系」であったことは間違いなく(ただし、古代氏族・勢力は、いずれも、ある意味、何らかのそれであることは言うまでもない!)、その「渡来系」が、自らを、上古より続く、この国における由緒ある氏族・勢力とするためには、一方では、先来・先住の氏族・勢力に、系譜上乘かかる必要があった?!もちろん、「継体天皇」のように?、人質→養子・婚姻等によって、正当に(正統に?)、その系譜に入り込むこともあった?!

ところで、後の?「物部氏」や「蘇我氏」の本拠地は、当初九州にあり、その中心は、いわゆる「倭<sub>たい</sub>国」(←「大倭国」?)であった?!その「倭<sub>たい</sub>国」(「大倭国」)の九州残存(本当は正嫡?!)勢力が、「倭の五王」の最後の「武」(倭王?「磐井」)の後裔であり、しかも、かの有名な「日出処天子」を自称した「アメタリシヒコ」(決して、大和の「聖徳太子」ではない!)の皇統であった?!

だが、その「磐井」皇統は、もう一つの倭国の皇統である「豊の倭国」（櫛魯国?!）、具体的には、そこに入り込んでいた「（本来の）継体（ホムタ（チ）ワケ?）」に、その実権を奪われていた（→517年?の「磐井の乱」）?!

ただし、その双方の皇統は、元々は、邪馬台国の解体（滅亡?）後?、百済から渡来してきた「残国の兄王」、すなわち「藤→応神?」（だが、まだまだ、彼が誰であったかは特定できない?!）の末裔であり、その「藤→応神?」と、出雲、否、伽耶・新羅?系の「神功皇后→宗像三女神?!」／「武内宿禰（諸族）」が、ある時期共闘して創り上げたのが「倭<sub>たい</sub>（大倭）国」であった?!百済王統が、直接倭国皇統に入り込んできたのが、まさにこの時でもあったということである?!

繰り返すが、百済王統は、本宗家・沸流系余氏（残国の兄王「藤」あるいは「讚」? →「応神」?）、温祚系（弟筋!）余氏（「倭<sub>たい</sub>国」→「筑紫の倭国」→「済」→「興」→「武」・磐井?）、そして仇台系（沸流系分枝!）余氏→牟氏（「倭<sub>たい</sub>国」→「豊の倭国」→「軍君」・男弟王?→（本来の）「継体」）の三つに分かれる?!もちろん、百済本国も、これらによって分国統治されていた?!

ちなみに、本宗家・沸流系余氏の残国の兄王（「藤」／「讚」? →「応神」?「記紀」では「ホムタ（チ）ワケ」とされている?）が、列島（倭）に移り住んだ（拠点を移した!）ことにより、百済本国は、温祚系余氏が統属していた?!だから、当時の倭国（途中から温祚系余氏となっていた筑紫倭国!）は、執拗に、本国の「百済」を気にかけてきた?!しかし、その倭国（筑紫倭国）自体の命脈は、いわゆる「白村江の戦い」（百済再興のための、唐・新羅連合軍との戦い!）で、事実上は尽きた?!

なお、百済残国の兄王（「藤」／「讚」? →「応神」?）が、出雲（伽耶・新羅?）系の「神功皇后→宗像三女神?!」・「武内宿禰」（「事代主」とか「住吉大神」とかにされているが?、実は、彼は、任那／新羅から来た「ツヌガアラシト／天の日矛」であった?!）と、ある時期共闘して創り上げたのが「倭<sub>たい</sub>国」であった?!

つまり、その「神功皇后→宗像三女神?!」・「武内宿禰」（「天日矛」?!）は、「倭国大乱」、その後の「邪馬台国」騒乱（卑弥呼から台与への政権移行）の前後に、全国に移り住んでいた先住倭人（呉・越人や半島南部の倭人、いわゆる「海人族」）の近畿大和の建国の後、播磨・丹後・越前に勢力を創り、その力も借りて、九州倭国に乗り込んで来ていた?!それが、「倭<sub>たい</sub>国」でもあった?!

しかし、いずれにしても、問題は、そのことを、最終的な勝利者としての「藤原氏」、「中臣氏」、「息長氏」、「秦氏」、そして「賀茂氏（一部）」が、どのような記紀（国史）編纂の構想を描いたのかである?!別言すれば、それぞれが、自家の活躍・功績をどのように、そこに組み込んでいったのかということであるが、百済系の「藤原氏」「秦氏」と伽耶・新羅系の「息長氏」、そして

土着（先来？）の「中臣氏（安曇族かも？）」、「賀茂氏（族）」が、どのように、矛盾なく「万世一系」の皇統譜を案出していけばよかったのかということでもあった?!

そこに考え出されたのが、まさに「応神」であり、彼が、「百済」と「伽耶・新羅」を融合させた、ある種の「統合王？」として位置づけられたということではないか?! 言い換えれば、「息長氏」の顔を立てながら（実際は、「天日矛」や「神功皇后（息長足姫）」の存在・活躍があったことは事実であるので!）、百済系王族（「残国兄王・籐とら」→本来の「応神」?）をそこに入り込ませ、矛盾なく「万世一系」の皇統譜を創り上げたということである?!

こうしてみると、「記紀」による我が国の建国史（国史）は、途中まで九州倭国の一員であった「豊国倭国」（の主勢力）が、近畿大和に移動し、最終的には、これもまたそこに移動してきた、本家筋の「九州（筑紫）倭国」の一員であった「天智系」の氏族・勢力と、それに協力、加担した氏族・勢力が、その歴史を綴った（捏造した?）ものとも言えるのである?!そして、その物語（捏造?）の「一大結節点」が、まさに「応神」ということである?!

だからこそ、そこには、旧伽耶系の要素も残しながら、百済系と新羅系の要素が入り混じっているのでもある?!ある意味、分からないはずなのである?!「記紀」が示した「倭国（→日本国）史」とは、まさにこうしたものであるのである?!

以上のように、「記紀」（基本は『日本書紀』）が描く我が国の建国史（701年までの歴史）においては、「百済系（沸流／仇台系＋温祚系）」王族の九州渡来・近畿進出と連動して、「秦氏」（こちらは、元々は「中央アジア系」?）や新羅系の「息長氏」が、大きな関わりを有していたことは明らかなのである?!

ただし、この「百済系（沸流／仇台系＋温祚系）」王族と「秦氏」や「息長氏」との関係は、「筑紫倭国」（邪馬台国→多氏?→百済沸流系余氏→温祚系余氏）から独立?した「豊国倭国」（百済沸流系余氏→仇台系余氏→牟氏→秦王国?）での話である?!

要は、例の「磐井の乱」（本当は、「豊国倭国」の、兄筋?「筑紫倭国」への造反?）によって、「(筑紫)倭国」に揺さぶりをかけた「豊国倭国」（本来の?「継体」政権）の勢力が、「宇佐」（「宗像」も入る?!）を拠点にして、近畿・大和方面に移動した（当初は、「息長氏」は琵琶湖西岸、「秦氏」は山城方面）?!

それが、おそらく?「応神」「神功皇后」「武内宿禰」「住吉大神」、そして「継体」（「記紀」上の「継体」政権）等の物語として描かれているということである?!「応神」「神功皇后」等の創出、描き方は、まさに、そのことを如実に示しているということである?!

ちなみに、後（本国百済の滅亡後）の、倭国における「百済系王族」同士の反



目は、最終的に政権を執った「温祚系余氏」と、当初実権を握っていた（「継体」系）の「仇台系余氏→牟氏」（ただし、こちらは、もともとは「本宗家沸流系余氏の流れ」？）のそれであった（余談だが？、宮崎県の旧「南郷村」・百済の里に、関係する？百済王族の逸話があるが、彼らは、「仇台系余氏→牟氏」であったのではないだろうか?!）?!

それでは、改めて、いわゆる「敗者？」としての氏族・勢力としては、どのように描けるのであろうか？ここでの中心は、やはり「物部氏」であるが、彼らは、初期大和王権の中核であった?!そして、その「正統性」の淵源は、吉備から来た？「饒速日にぎはやひ」勢力にあった?!通常の解釈からすれば、そのように理解される?!

つまり、（「記紀」によれば、）その「物部氏」の始祖とされる「饒速日命」は、天皇家（←神武）よりも先にヤマトに舞い降り、そこを統治していたとされるが（→纏向祭政都市）、彼らは、「吉備」勢力であったということである（→関裕二氏説。ちなみに、神武（一行）もまた、吉備経由で来ている!）?!

とは言え、その「物部氏」は、あまりにも古く、そして巨大過ぎる?!我々は、それらを一括りにして「物部氏」と呼んでいるわけであろうが、本当に、それでよいのか?!例えば、「内うち物部」「外そと物部」というような呼称や、その氏族・勢力の全国分布があるようであるが、これらは、改めて、どういうことを指しているのか?!

しかも、その「内物部」「外物部」とは、どの時点での呼称なのか、今のところ定かではない?!王権の内部で活躍する（と関係している？）氏族が「内物部」、王権に敵対する（大和から遠ざかった？具体的には東国）氏族が「外物部」と呼ばれているようであるが、これは、「初期大和王権」の分裂？を意味するのか?!

だが、それはともかく、「物部氏」は、直接の先祖は、上にも述べた、「神武」より先に大和に降臨（渡来）していたとされる「饒速日命」と、いわゆる「神武東征？」に最後まで徹底抗戦したとされる、大和の土着？の「長髓彦」（「鴨族」か？）の妹「三炊屋みかしきや媛」との間の子の「可美真手（宇摩志麻治）命」とであるとされる?!

そして、その「可美真手命」は、尾張氏の祖「天香具山」と共に尾張・美濃・越を巡り、その後は一人で、播磨、丹波を経て、石見国に入ったとされる（一方の「天香具山」は、何故か？越後の「弥彦神社」に祀られている!）!

ちなみに、「長髓彦」（勢力）を殺した（滅ぼした？）のは、実は、饒速日命の息子の彼で、最後は石見（現在の島根県大田市）の「物部神社」に逼塞したということであるが、これは、可美真手命の物部氏（内物部?）が、「出雲」を見張っているということか?!

そこで、翻って、その「物部氏」の系譜は、「修正試作版」に載せたように、

『先代旧事本記』（平安時代初期に成立？物部氏伝承記？偽書説もある？）の「天神本記」に示されている？！

それによれば、「神武東征」より以前に、河内河上哮峯<sup>たけるがみね</sup>に「天磐船」に乗って降臨した「物部氏」の始祖の「饒速日命」は、船長：「跡部<sup>あとべ</sup>首」等の祖・天津羽原／梶取：「阿刀造」等の祖・天津麻良／船子：「倭鍛師<sup>やまとかぬち</sup>」等の祖・天津真浦／「笠縫」等の祖・天津麻占（忌部氏？）／「曾曾笠縫」等の祖・天都赤麻良／「為奈部」等の祖・天都赤星を乗組員として、いずこからともなく（直接は「吉備」からであろうが？）現れたということであった？！

しかも、上記の乗組員（船長・梶取ら）は、別に？「物部造」等の祖・天津麻良／「笠縫部」等の祖・天曾蘇／「為奈部」等の祖・天津赤占／「十市部首」等の祖・富富侶<sup>ほほろ</sup>／「筑紫弦田物部」等の祖・天都赤星とされ（彼らは、「五伴緒いっとものお」「五部人」とも呼ばれる→物部氏系幹部？）、多少違った顔触れも紹介されているということであった？！

ちなみに、彼らは、「二十五部の天物部（内物部？）」とともに、主として、近畿（河内）と北東部九州（遠賀川流域／企救半島部）に勢力を築いていたと思われるが、最後の「天都赤星」は、「天津甕<sup>みか</sup>星（北辰→北極星）・天香香背男<sup>かかせお</sup>」とも呼ばれ、確か「大和王権」にとっては、かなり厄介な存在であったらしい（九州系と思われるが、途中で袂を分かつ？！→疎まれる？！）？！

ただし、彼らは、「記紀」における、有名な？「五大夫<sup>まえつきみ</sup>」（「阿倍臣」の遠祖：武淳川別／「和珥臣」の遠祖：彦国葺／「中臣連」の遠祖：大鹿嶋／「物部連」の遠祖：十千根／「大伴連」の遠祖：武日→とされる！）のモデルかもしれない？！すなわち、「阿倍氏」「和珥氏」「中臣氏」「物部氏」「大伴氏」が、いずれも「初期？大和王権」の、有力メンバーであったように描かれているということである？！多分、「記紀」の思惑（主張）が、そこには投影されているのであろう？！

だからこそ？、彼らは、「天孫降臨神話」において、皇孫「瓊瓊杵尊<sup>ににぎのみこと</sup>」の降臨に従った五神、すなわち、「天児屋命<sup>あまのこやねのみこと</sup>」「太玉命<sup>ふとだまのみこと</sup>」「天鈿女命<sup>あめのうずめのみこと</sup>」「石凝姥命<sup>いしこりどめのみこと</sup>」「玉祖命<sup>たまのおやのみこと</sup>」と、それぞれ関連させられているわけでもある？！

そこで、改めて、「記紀」は、「物部氏」の立場・役割をどのように描いているのかであるが、そこに、物部氏の真の姿が投影されているということである？！結論からすれば、皇統譜的には、一番丁重に扱わなければならない氏族であったということである？！

例えば、『日本書紀』によると、出雲（葦原中国）へ派遣された「天稚彦<sup>あめわかひこ</sup>」の死後（誅滅された？）、「高皇産靈<sup>たかみむすび</sup>尊」が諸神を集めて、次に遣わすべき神を決めようとした時（「国譲り」の顕在化）、選ばれたのが「経津主<sup>ふつぬし</sup>神」（物部氏）であった（→最初に王権を奪取したのは、「物部氏」である

ということ?!) !

すると、そこに「熯速日<sup>ひはやひ</sup>神」(「甕速日<sup>みかはやひ</sup>神」の子)の息子「武甕槌<sup>たけみかづち</sup>神」(尾張氏?)が進み出て、「経津主神だけが大夫<sup>ますらお</sup>(雄々しく立派な男)で、私は大夫ではないというのか?」と抗議した。こうして、経津主神(物部氏)に武甕槌神(尾張氏?)を副えて、葦原中国を平定させることにしたということである(→協力したのが「尾張氏?」であるということ!)。まさに、これは、物部氏と尾張氏が協力して、出雲を攻略したということを物語っている?!

一方、『出雲国造神賀詞』(「出雲国造氏」による)では、「高御魂<sup>たかみむすび</sup>命」が「皇御孫命」に地上の支配権を与えた時(「国譲り」の成就?)、出雲臣(国造氏)の遠祖「天穗比<sup>あめのほひ</sup>命」が国土を観察し、再び天に戻って地上の様子を報告して、自分の子の「天夷鳥<sup>あめのひなとり</sup>命」を、「布都怒志命」(経津主神)を副えて派遣したとされているということである!

他方、『古事記』(「神八井耳命」の後裔の「多ノ太氏」による?)では、「経津主神」が登場せず(物部氏・可美真手命を認めていない?)、「思金<sup>おもいかね</sup>神」が、「天尾羽張<sup>おはぼり</sup>神」もしくは、その子の「建御雷<sup>たけみかづち</sup>神」(尾張氏)を送るべきだと、「天照大御神」に進言する。天尾羽張神が、建御雷神の方が適任だと答えたため、建御雷神が、「天鳥船<sup>とりふね</sup>神」を副えて、葦原中国へ天降ったとしているということである?!

とにかく、ここには、初期大和王権(高天原?)の、「出雲(葦原中国?)」からの王権奪取の経緯が透けて見えるということであるが、しかし、これが、大和政権樹立前後の話(経緯)なのか、それとも、その後の大和政権の大きな推移を示すものなのかは定かではない(おそらくは後者?)?!とは言え、「物部氏」が「大和政権」の樹立者で、「尾張氏」がその協力者であったということ、を、「国譲り神話」の中で描いているということだけは間違いないということである?!

しかし、その後、この物部氏が、「蘇我氏」と手を結んでいることも明らかである(「入鹿」の母は物部氏!→鎌姫)!したがって、例えば、「蘇我馬子」と「物部守屋」が仏教導入を巡って争った、そして、それを機に守屋(本宗家)が滅んだという通説(俗説?)は、本当は間違っているということでもある(「記紀」のウソ?)?!その証拠に、その本宗家の、左大臣「石上(物部)麻呂」は、藤原京までは活躍している(その後、失脚はしているが!→物部氏の最終没落?)!

だが、そうだとにしても、途中?の、(九州時代?の)「麩鹿火<sup>あらかい</sup>」と「尾輿<sup>おこし</sup>」の関係や、尾輿の弟の「目連」(稲目?)との関係等、まだまだ不分明なところが多いのでもある?!さらなる究明が、改めて必要となってくるということであるが、それにしても、繰り返すように、北東部九州(遠賀川流域/企救

半島部)にも、その「物部氏」の分派?が蝟集しており、あたかも近畿(特に河内)と九州を、(瀬戸内海を挟んで?)支配しているようにも見えるのである?!

そこで、どちらの物部氏族が、時代的に早いかということが分かれば、この物部氏族の移動のルートや支配の構図が見えてくるのかもしれない?!だが、私自身は、北東部九州(遠賀川流域/企救半島部)の物部氏族が先にあったと考えていることは、先の「修正試作版」で述べた通りである(確か、かの、故森浩一氏も、そのように指摘されていた?!)!

ついでながら、大和は、最初?「(出雲神)大物主」が造成したとされるが、その時期は、改めて、一体いつのことであったのか?!もちろん、神武(東征)の前であったわけであるが、要は、ここでの「饒速日命」の降臨と、どちらが先にあったかということである?!そして、それは、一方では、その「大物主」勢力の大和進出のこと、それ自体であったのかもしれない?!

つまり、それは、別々の事績(事件?)ではなく、ある見方からすれば(例えば、「物部氏側」からとか、「三輪氏側」からとか?)、どちらかの事績(事件?)として描かれているということである?!であれば、これを、「前方後円墳」勢力(龍王信仰族)と「前方後方墳」勢力(太陽信仰族)とに、置き換えてみることも出来るかもしれないのである?!

**○直近、かつ直接の敗者?は「蘇我氏」!「蘇我氏」は、一番隠しておきたかった氏族・勢力!**

いずれにしても、そうした政権の攻防の中で、残念ながら、歴史の闇に葬られた氏族・勢力が、「物部氏」「蘇我氏」、そして「和珥氏/多(太)氏」、さらには「大伴氏(→吉備氏:上道臣/下道臣氏)」であったであろうが、その中で、最も意を用いられたのが、悪逆な手段(刺殺?)で、その政権を奪取した(「乙巳の変」)、いわゆる「蘇我氏」の扱いであった?!もちろん、それは、「蘇我氏」と密接な関係がある「物部氏」も、同様ではあった?!

だが、直接的な標的は、やはり「蘇我氏」であった!何故なら、「蘇我氏」は、九州倭国皇統(ひいては、葦原中国の王統、つまり倭国全体の王統?!)の正統な継承者(「本宗家」、まさに「上宮王家(聖徳太子家系?)」であったからである?!

ということで、改めて、記紀編纂者側(藤原氏)が、一番隠しておきたかったこと、それは、「蘇我氏」のことであり、「蘇我氏の正統性」であったことは、例の(蘇我氏の怨霊を恐れた?)「聖徳太子」の捏造?からも明らかであるが(「聖人」と描くことによって、彼の子・「山背大兄皇子」を絶滅させたとする「蘇我氏」の悪?を、循環遡及的に糾弾することができる?!)、その「上宮王家」の顔触れや実体からも、容易に分かることである?!

何故なら、その「上宮王家」が、他ならぬ「(大和)飛鳥」の地に、(九州倭国の?)新たな都を築いていたと推測されるからである(遷都?592年?)?!実際、

そう捉えると、同じ九州倭国（出身 or 移動？）の「天智」の怪しげな行動が（彼は、近江に遷都し、いわゆる「（九州）倭国年号」を使用していた！）、改めてはっきりしてくる（ただし、ここでは、そのことは、詳しくは繰り返さない！）？！

それでは、改めて、一体何故、九州倭国（の一部！→上宮王家）が、近畿に移動したのかということであるが、大きくは、二つの契機（あるいは三つ？）があったのではないかと！一つは、例の「白村江の戦い（663年）」で、唐・新羅連合軍に敗れて、九州倭国が、一時期占領されそうになった時（実際、そうだった？）。

もう一つは、それに遡って、「応神」（本当は、百濟本宗家沸流系余氏・「残国」兄王こと藤？）、または、その後裔が、近畿（河内）に進出した時期である？！いわゆる「倭の五王」の時代で、彼らは、「応神（藤）」の後裔である（→「古市・百舌鳥古墳群」）？！

なお、百濟本宗家沸流系余氏は、392年、当時の高句麗によって滅亡させられている（第一次百濟滅亡）！その後復興された百濟（熊津）は、実は温祚系余氏（沸流系余氏の弟筋？）で、筑紫倭国（百濟檐魯国？血筋は、最初は、百濟本宗家沸流系余氏であった？！）は、「倭の五王」の「済」の時、沸流系余氏から温祚系余氏へと、血統が移っていた（兼川晋氏）？！

しかしながら、これも、百濟王族（仇台系余→牟氏）「軍君／男弟王」が、その後の百濟王家筋（温祚系余氏）の（筑紫）倭国の磐井（武？）を、物部麁鹿（火）と共に滅ぼした（528→515年？「磐井の乱」）？！

ちなみに、百濟には、上記とは違う、もう一つの王統（仇台系）があるが、その血統を汲む「継体」こと「軍君・男弟王」が、（筑紫）倭国の檐魯国「豊国倭国」の王統を取得し（494年？）、その後、「磐井の乱」において、筑紫倭国を凌駕したということである（517年に、「豊国倭国」を建元している？→九州年号！）？！

ただし、その筑紫倭国（温祚系余氏）は、そのまま存続し、件の「白村江の戦い」で、唐・新羅連合軍に敗れて、一時期唐に占領されて？、その後（701年）、主権国としては、名実共に消滅したということである（「日本国」への併呑！）？！

一方、その後、「豊国倭国」の主力？（百濟仇台系余→牟氏＋息長氏＋秦氏）は、近畿（近江・越を含む）に移動し、新たな「日本国」を樹立させた？！その中心が、「上宮王家→蘇我氏」（「稲目」、実は「欽明」から？）であり、したがって、645年の「乙巳の変」とは、さしずめ、筑紫倭国（温祚系余氏）の皇統を引き継いでいた「中大兄皇子（天智）」（勢力）が、先に移動していた「豊国倭国」の王統（沸流系→仇台系百濟＋息長氏＋秦氏）である「上宮王家→蘇我氏」を滅ぼし、本来の「筑紫倭国」（温祚系余氏）を再興した？そういう事件と言えるかもしれない？！

ただし、以上のような理解は、まだまだ広がってはいかないであろう？！現時点では、おそらく「珍説・奇論」の類いとされるかもしれない？！しかしながら、そのように理解すると、まさに「二つの倭国」の最終段階が鮮明に見えてくる

のであり、そこにおける「(九州)倭国」と「(近畿)日本国」の同時存在が、一つの線(面?)で捉えられるのである?!

とは言え、以上、このように見てくると、少なくとも二つの、新たな(別の?)疑問が生じてくる?!つまり、一つは、絶対にその動きと連動している、「武内宿禰」の後裔氏族とされる「葛城氏」や「蘇我氏」等、まさに「武内宿禰/葛城諸族」の扱いです。しかも、「蘇我氏」は、その諸族の「中心」である?!

しかも、「蘇我氏(上宮王家)」が、「欽明(物部目連?→蘇我稲目?→ワカタケル大王?)」からスタートしたとするならば、それ以前の「蘇我氏」、引いては、「武内宿禰」後裔氏族全体(の出自)がまったく混乱してしまうのである?!そしてまた、それに関わっては、「記紀」が示す、それ以前の、近江・越からの「継体」(彦太尊)の出現(素性)も、説明出来なくなるのである?!

そして、さらに、もう一つは、その「蘇我氏」と「物部氏」の関係であるが、例えば、「蘇我氏」と「物部氏」は、ある時期からは同族であり、「欽明(物部目連?→蘇我稲目?→ワカタケル大王?)」以降の「蘇我氏」が、その百済系氏族(王族?)となれば、その兄の「物部尾輿」も、当然百済系氏族(王族?)となる(もちろん「麴鹿火」も?)?!それでは、あの古代重要氏族の最筆頭である「物部氏」は、一体、どのように理解されればよいのかということになる?ある意味、大変困ったものになるのである?!

ただし、そうは言っても、そこに、ある「からくり?」があれば、それはそれで解決できることとはなる?!すなわち、そこに考えられるのが、おそらく「藤原氏」が行ったであろう、「中臣氏」への入籍?(そこに系譜をつなげる or 創るということ!)と同じ手法で、「蘇我氏」、厳密に言えば「欽明(物部目連?→蘇我稲目?→ワカタケル大王?)」が、「葛城諸族」への入籍を行ったということである?!そしてまた、初発の皇統?を有する「物部氏」と、何らかの関係を結んだということである(これは、かなりの確度で言えることである?)?!

だから、彼らは、「上宮王家」を名乗ることが出来たのである(事実、「入鹿」の母は、物部氏であった!?)?!そして、それは、まったくの作り話ではなく、何らかの結びつき、血縁関係が出来ていたからこそ、可能となったということである?!また、ここで言う「物部氏」(九州倭国の方?)も、そういう関係であったということである?!いずれにしても、新たな(創られた?)「蘇我(我、蘇り?)氏」が、そこで生まれたということである?!

具体的に言う(類推する?)と、「葛城諸族」とは、4世紀頃に西北部九州(肥前)に突如出現した「貴(木/基肆)国」の勢力?で、その後(逆かもしれないが?)「大和葛城地方」に移動・蟄集した勢力、まさに「武内宿禰」後裔諸族としてまとめられた?氏族達であった(彼らは、「紀ノ川」沿いを往来していた?)?!例えば、「葛城襲津彦」も、その中の一人であった?!ただし、彼らは、実在の諸

族であったことは言うまでもない?!そうでなければ、系譜をつなげることが出来ないからである!

では、実際の、その諸族とはどういう氏族であったのか?現時点では、おそらく「ツヌガアラシト(氣比大神)」ないし「天日矛」(二人は同一人物?)の末裔達であり(大加羅 or 新羅からの渡来とされる!)、その諸族たちは、第8代「孝元天皇」(第10代「崇神」の祖父?)から枝分かれしたとされている?!

だから、「神功皇后」や「応神」の物語は、そこの関わりで生まれたものと思われるが、事実、近畿・大和では、彼ら諸族の政權?が作られていた(「葛城王朝」?)?!そこに、「豊国倭国」の王統(沸流系→仇台系百濟+息長氏+秦氏)が進出してきたということである?!

つまり、「記紀」で言うところの「継体」政權であるが、ただし、それは、「九州(の「継体」)」を「近畿(の「継体」)」に被せる(まさに継体させる!)ことで、一つの線にされたということでもある(このようにしか考えられない!←兼川晋氏)?!

ということで、ここでは、かの「欽明」から、実質的な?「蘇我氏」が始まるということであるが、その蘇我氏達の先祖とされた(創られた?)「武内宿禰」諸族は、どのような皇統?であったのか?!だが、当然?それが見破られないように、蘇我氏自体は、「(武内宿禰)→蘇賀石河宿禰→満智宿禰→韓子宿禰→馬背(or高麗)宿禰→稲目宿禰」というような系譜が与えられている(ただし、これについては、『古事記』は触れているが、『日本書紀』は触れていない!なお、ここでの表記は、平安時代初期の『紀氏家牒』によるものである!)?!

ちなみに、このことについては、「稲目」以前の人物は、実在していないというのが通説のようでもある?!ただ、「満智」については、渡来した百濟高官の「木満致もくまち/木苧もくら満致」と同一人物ではないかともされている?!とは言え、年代の相違によって、別人とされてもいるようである?!しかし、私は、(記紀の)年代の相違はあまり当てにならないとも思うので、それは、一面では本当のことではないかとも思っている?!そういうことである?!

さて、いずれにしても、(実際の?)問題は、「稲目」からの「蘇我氏」のあり方(突然の活躍!)であり、しかも、その先祖が、「武内宿禰系」諸族であるとされていることである?!要は、その「武内宿禰系」諸族と「欽明」以降が、「継体」を挟んで一本化されているということであるが、その「武内宿禰系」諸族とは、本当はどういうものであったのか、そこが問われなければいけないということになる?!

しかし、「記紀」は、そのところを暈したり、はぐらかしたりしているのである?!であれば、実際は(逆に?)、その「武内宿禰系」諸族に、倭国(倭→大倭?)からの「正統性」が備わっているということにもなるのである?!

ということで、最初に予期？していたことであるが、実は、この「武内宿禰系」諸族の、倭国（倭→大倭<sup>たい</sup>国？）での真相が、「記紀」では消されているのであり、そこが、実際の「真実の鍵？」を握っているということでもある?。「記紀」は、そのことを一番隠しておきたかったのであり、全力を挙げて?「蘇我氏」を悪役に仕立て上げたのでもある?!何故なら、その「蘇我氏の真相？」から、自らの出自や、それまでにしでかして来た数々の陰謀が、白日の下に晒されるからである?!

ここに至って、「記紀」に隠された、百済系王族の「倭国への入り込み」の陰に、伽耶・新羅系の、つまり先着?諸族の「王権所有」の可能性が浮かび上がってくるのであるが、それは、「崇神」に託された、吉備の円墳勢力（→物部氏）のことではない?!何故なら、それ自体は、大和建国期（3世紀頃）の話であるからである（「崇神」は、それをはぐらかすためのダミーだったのかもしれない?）?!

それはともかく（残念ながら、ここでは、これ以上踏み込むことは無理である!）、では、それは、一体いつ頃のことなのであろうか?無理なく考えれば、例の4世紀（後半?）の、西北部九州に突如出現した「貴国（木ノ基肆国）」の勢力?ということになる?!事実、近くの久留米市の「大善寺」や「高良大社」、佐賀県の「武雄市」等には、その中心人物?「武内宿禰」にまつわる話が多々ある?!

しかも、その「武内宿禰」は、第8代孝元天皇の子?「屋主忍男武雄心命 or 比古布都押之信命」と、その昔?神武一行を支え・導いたとされる「珍<sup>うず</sup>彦」（海部氏?）と繋がる?、紀伊の「菟道<sup>うじ</sup>彦」（紀直ノ木国造の遠祖）の娘・山下「影媛」との間に生まれたとされているのである?!

ただし、それについては、『古事記』と『日本書紀』では、若干親子関係等が違うようであるが、いずれにしても、重要なのは、彼が、そこ（「貴国（木ノ基肆国）」）で、大和王権?から、謀反の疑いをかけられたということである?!つまり、九州（倭国?）を我が物にしようとしていることを糾弾されたということであるが、しかし、よく考えてみると、実は「謀反」ではなく、むしろ、正当な?王権を敷こうとしていたということではなかったのか?!

もし、そうであれば、この「武内宿禰系」諸族は、近畿・大和の皇統に繋がっていった可能性があり（ちなみに、「武内宿禰（天日矛ノツヌガアラシト?）」自身の最後の拠点（の一つ?）は、「但馬の出石」である!）、「蘇我氏」が、その皇統を引き継いだということであれば、それこそ「藤原氏」は、その存在と関係をひた隠しにしなければならなくなるわけである?!

余談?ではあるが、「武内宿禰」かもしれない?「天日矛」という、「太陽信仰」族にあっては、まさしく最高級の名前を彼が有していることは（渡来人とされている人物であっても!）、彼が、いかに重要な（高貴な?）存在であったかを、ある意味如実に示すものでもある?!また、「伊弉諾・伊弉冉」が「国生み」



で用いた「天沼矛<sup>ぬぼこ</sup>」は、そこから出て来たのかもしれない?!

### ○和邇(珥)氏(族)／多氏は、初期大和王権の中心勢力だった?!

次に、やはり「和邇(珥)氏(族)／多氏」は、改めて押さえておかなければならない?!繰り返すように、『古事記』は、おそらくこちら側からの視点であり、「初期大和王権?」は、まずは、この「和邇(珥)氏(族)」が中心であったと考えられるからである?!そして、その中に、「多氏(「神八井耳」勢力)」がいたということである?!

ところで、先に(「修正試作版」、北部九州、とりわけ有明海沿岸部(筑紫国?)の氏族・勢力についてみてきて、そこにおける「三沼君氏」の存在(活躍?)に注目したが、しかし、そこでは、多分?その一郭(南東部?)にあったであろう「邪馬台国」と、その後の「筑紫(筑後)倭国」の関係までは、ほとんど言及できなかった?!

ちなみに、そこで紹介した宮島正人氏には、その「邪馬台国」の後裔氏族が「筑紫君氏」であり、その「筑紫君氏」が「三沼君氏」であったというような前提?があったようにも思われるが、ひょっとしたら、「三沼君氏」は「伽耶系」(「崇神」のモデル?)で、それが、「百濟系」(「倭の五王」→「沸流系余氏」)の「藤(藤?)大臣」に取って代われ、彼らが、新たな「筑紫君(氏)」となった?!実は、私は、そのように捉えているのである?!

そこで、その「筑紫君(氏)」の変遷の中で(それ以前に?)、おそらく、いわゆる「倭国大乱」と呼ばれる、西日本全域の動乱(2世紀末)の中で、東(近畿)から西に動いた氏族・勢力がいたわけであるが、私は、その氏族・勢力こそが、「多氏」(「神八井耳」勢力の一部?)だと捉えているわけでもある?!

そして、この「多氏」は、ここで言う「和邇(珥)氏(族)」の仲間(一派?)であるが(この和邇(珥)氏(族)全体が、いわゆる「前方後方墳勢力」、そして「手焙形土器(火)勢力」である?!)、彼らは、近畿(多分?近江)で分流したのではないかと考えているのでもある(そのことが、神武の、大和での子、すなわち「神八井耳」と「神沼河耳(第2代綏靖)」の関係話となっている?)?!

ということで、この「ワニ／和邇(和珥・和爾・丸邇・鰐等)」という奇妙な名前をもつ「古代氏族」が、「多氏」を初めとして、その存在と活躍が大きかったであろうことは、ある意味よく分かるのであるが、何故か、彼ら(多氏を含めて!)は(も?)、「記紀」(特に『日本書紀』)においては、歴史の表舞台から遠ざけられているようにも思われるのである?!

したがって、ここでも、『日本書紀』編纂者達が、何かを隠している?そういうことであるが、だから、その後裔の「多氏(太安万侶→多人長)」が、『古事記』によって、婉曲ではあるが、その隠された部分を示そうとした?!今の私には、そのように思えるのでもある(『古事記』は、実は、そうした性格を有するもので

もある？なお、例の「因幡の白（素）兔」における「ワニ or サメ」とは、彼らのことか？）？！

つまり、かの「倭国大乱」の時に、近畿から西に動いた（文物の移動を伴って！）氏族・勢力、それが、後の「多氏」の先祖であるとされる「神八井耳」の勢力であり、その彼は、例の神武の、大和での長子であったが、何故か、次子の「神沼河耳（第2代綏靖天皇）」に政権を任せ（敗北した？）、大和（政権）を去ったわけである？！

そして、その一部の勢力が九州に来て、九州山地沿いを手中に収め、「火（肥）の君」、「阿蘇の君」、「大分の君」等として、九州（とりわけ中南部九州）に勢を張ることとなった？！そういうことである（多分？このことが、後の「景行天皇」の九州遠征・熊襲征討の話の基となっているのではないか？ちなみに、宮崎／日向の「諸県君」牛諸井は、その「景行天皇」の子とされている？！）？！

要は、（九州での）倭国大乱？において、「奴国」を中心とする「倭国連合」を解体させ（中核の、安曇族の「奴国」を四方に追いやり、一方で、力をつけていた、隣の「伊都国」（「五十猛」勢力？）と連携し、そこへの「一大率」の常駐によって、全体に睨みを利かせ？）、新たな「倭国→邪馬台国連合」を出現させたのは、吉備（→出雲経由？）から出て、近畿（近江）で集結した「ワニ族→前方後方墳勢力」の一派、すなわち「神八井耳→多氏」であり、「火の勢力」（「手焙形土器」→鬼道？→卑弥呼？）であったのではないかということである？！

だから、かの強大な「奴国」や「伊都国」も、その傘下に収めることが出来た？！まさに、「邪馬台国連合」とは、そういうものであったということである？！

これもまた余談？ではあるが、例の「豊玉姫（「海神」の娘／「ヒコホホデミ（山幸彦）の後）」が出産の時、火に包まれながら、ワニの姿になって「ウガヤフキアエズ」を生み、そして、その子育てを、（義理の？）妹の「玉依姫」に頼んだという話は、「豊玉姫」、すなわち「ワニ族」と「天皇家（この場合は、「カモ族」？）」の関係を暗示しているのではないかということでもある（←日向神話？）？！

なお、その2氏の頂点に立つ人物が、「天日矛」や「神功皇后」、さらには「継体天皇」と関係のある「彦坐ひこいます王」であり、この謎に包まれた人物群（「武内宿禰」という人物に集約させている？）こそ、「記紀」編纂者、すなわち「藤原政権」が、その真実の姿を隠そうとしたことなのである？！

さらに、この「和邇（珥）氏」は、もう一つの「息長氏」とは、非常に近い関係にあったとされ、天皇家では、少なくとも第15代「応神天皇」以降は、「和邇腹」と「息長腹」を、特に、血脈維持の上で大切にされた節があるという評価もある？！このことは、まさに、私が追求している「我が国古代史の闇」という部分でもあるが、そこに、「和邇氏（族）」との関係が、大いに絡まっているということである？！

しかるに、この「和邇氏（族）」は、政治上では、それ程活躍していないように思われるのであるが（「蘇我氏」「葛城氏」「物部氏」「大伴氏」等とは比べようもない?!）、その「和邇氏（族）」の一人？「難波根子建振熊」だけは、その活躍が、「記紀」には示されている！しかも、第10代「崇神天皇」から第25代「武烈天皇」までの血脈に、母方として最も深く関係しているということである?!

しかし、第30代「敏達天皇」までに、9ないし10名の女性が、「記紀」に、その妃として記録されているというが、これらの妃の子が天皇になった事績は、「崇神天皇」以降は全くないということでもある?!これだけ多くの女性を妃として天皇家に出した氏族は、後の「藤原氏」を除けば存在しないということらしいが、それは、果たして偶然なのか（第15代「応神天皇」以降、「敏達天皇」までが最盛期のようなのである?）?!

そこで、翻って、以前に紹介した藤井耕一郎氏の『タケミカヅチの正体オミ姓氏族対ムラジ姓氏族』（河出書房新社、2017年）によれば、「前方後方墳勢力」（手焙形土器勢力→火（日?）の勢力）によって駆逐された「環濠集落勢力?」のシンボルである「巴形銅器」が、弥生後期に出現し、弥生終末期には一旦消滅したということであるが、古墳時代の前期後半（4世紀頃）に、再び形を変えて復活するということであつた（しかも、「朝鮮半島南部」と「大和」で！ただし、「大和」が中心であつた!）?!

元来、「和邇氏（族）」は、「安曇氏」や「海部氏」と同じく「海人族」とされているようであるので（直接は、「海部氏」と同族?したがって、「尾張氏」も?→それが、「天火明命」関係?!）、私の、これまでの一連の推察とも相俟って来る?!

故に、「記紀」、とりわけ『日本書紀』においては、この「和邇氏（族）」のことは、あまり重要な扱いはされていないということであり、逆にそれが、実は、甚だ大きな存在・活躍であつたことを、陰画的に示しているということでもある?!要は、その逆であつたということである?!

くどいようであるが、『古事記』は、ここで言う「和邇氏（族）」の一派である?「多（太）氏」によって、「正史」である『日本書紀』と併行しながら、秘かに?書き記されたもので（「太安万侶」→「多人長」による?）、時の藤原政権に睨まれない程度に?、自らの祖先・勢力の活躍（栄光?）を、言わば私的に?示したものではないかということである（これだけは、言わせてもらうというスタンスで!）?!

### ○初期大和王権と同格意識を有していた「大伴氏」?!

最後が、「神武東征」に随行した古代豪族「大伴氏」であるが、彼らは、初期大和王権と同格意識を有していたことは確かであり、その意味で、おそらく、

最初の纏向「吉備勢力」の中心であったことは間違いないであろう?!もちろん、その類族であった「久米氏」も同じである（その活躍は、例の「神武東征」の中で、大いに示されている!）?!

その証拠?が、彼らの大和での根拠地が、「神武天皇」が即位したとされる「橿原」の地の、すぐ隣であったということである!ある意味、「神武一行」は、その「大伴氏」「久米氏」の集団であったと言えるのかもしれない?!

ただし、彼らは、その後徐々に、時の政権に疎んじられ（それは、かの「雄略天皇」の時に最大となる?→彼による「吉備潰し?」→「葛城氏」と手を結んだがために?）、「記紀」からすれば、あまり表面には出したくない存在となっていた?!おそらく、これは、後から来た、九州からの「倭の五王」（百濟勢力）による、「吉備系」「武内宿禰系」諸族の排斥を意味しているものと思われる?!

ちなみに、この辺りの真相については、まだまだよく分からないが、吉備に残っていた一族（本家?）は、例の「皇別氏族」にも位置づけられており（「鴨族」の一部もそうである!）、その後裔である「吉備氏」（上道臣/下道臣/笠臣氏等）が、その自覚と自負を有していたことは、ほぼ間違いないであろう（巨大な「造山古墳」「作山古墳」の造営等）!しかも、この「大伴氏」は、例の「継体天皇」の擁立においては、「物部麁鹿火」と共に、「大伴金村」のリーダーシップによって、それが実現されたとされている!

だが、その後の、百濟への「任那割譲事件」による失脚（失政）によって、その存在が滅却されている?!したがって、「大伴氏」、とりわけ、その本家であった「吉備氏」の怒りは、本当は、甚だ大きかったものと思われるのである?!  
**(3)そこにおける三輪（大神）氏、尾張氏/海部氏、賀茂（臣）氏の位置づけ?!**

○「三輪（大神<sup>おおみわ</sup>）氏」は、「初期大和王権」（纏向遺跡）の中核か?

次に、ここでは、上述のような氏族・勢力とは、少し立場や役割を異にしたと思われるが、同じように、「記紀」において、その存在と活躍が遠景に退かされ、本来は、初期大和王権の樹立者/立役者であったと思われる「三輪（大神）氏」、「尾張氏」、「賀茂（臣）氏」のことを、少しまとめておきたい。

まず、かの「倭国大乱」後?に、いわゆる「近畿大和（奈良盆地）」の三輪山麓（纏向）に突然現れた「初期大和王権?」のことであるが、そこにおける「三輪氏（三輪王朝?←「大物主」政権）の実体?」についてである!それは、同じ時期（否、少し早い時期?）に、北部九州に出現していた「邪馬台国」（新たな「倭国」の盟主・親魏倭王→女王卑弥呼・台与）とは、絶対に?違うものである!

彼らは、いわゆる「大神<sup>おおみわ</sup>神社」をまつる、大和国磯城地方の氏族とされるが、彼らは、まさに「大物主神」の後裔として、同神の祭祀をつかさどった有力氏族であった（それが、いわゆる、崇神時代の「大田田根子（多直根子?）」の話となっている?）。そして、彼らは、「龍蛇信仰族」でもあった!とにかく、彼

らが、三輪山を神奈備山として、大和纏向に最初に政権を立てた氏族・勢力であったことは、おそらく間違いない事実であったろう（→三輪王朝）?!

ちなみに、その「三輪氏」あるいは「大三輪（大神）氏」は、もともとは北部九州に居たと考えられるが、それと「宇佐氏（八満宮）」／官司・「大神おおが氏」、さらには「宗像氏（神社）」等との関係も見逃せないであろう!?!ただし、残念ながら、この北部九州における「三輪氏族」のことについては、まだまだ十分な考察が出来ない?!今後の課題の一つである!

### ○大和王権の「キャスティング・ボード」を握っていた?「尾張氏」!

次に、「尾張氏」についてであるが、彼らは、言わば大和王権の「キャスティング・ボード」を握っていた氏族・勢力と言えるのかもしれない（「前方後方墳勢力」と「円墳勢力」の野合の橋渡し?→「前方後円墳」時代の到来）?!

とは言え、彼らは、「物部氏」、「海部氏」、そして「紀氏」とも同族とされ（京都府宮津市の籠かごの神社の『勘注系図』（国宝指定）／『先代旧事本紀』の「尾張氏系譜」<巻五>）、広い意味での「大和王権」を形成してきた氏族・勢力であったことは、おそらく間違いない（同氏の拠点であった「熱田神宮」に、例の「三種の神器」の一つ「草薙の剣」が奉斎されていることが、何よりの証左である?）?!

いずれにしても、彼らの氏族・勢力（の先祖?）は、ある時期、ある理由によって、九州から近畿（大和）に移動し、そこから東海・近江・北陸等へと、拡大・拡散していったのではないか?!もし、そうであれば、さらにこれらは、とんでもない話へと広がっていくことにもなるわけである?!

と言うのも、もしある時期に（この場合は、「倭国大乱」後の「邪馬台国」の台頭・消滅?）、これら尾張氏／海部氏（の先祖）等が、北部九州から丹後・北陸あるいは東海へ、正確には大和（葛城・高尾張）を經由し、その後、それぞれ当地へ移動したということであれば、そこでの矛盾はなくなる?!そうすると、倭国大乱の真相や、消えたとされる、その後の邪馬台国の残像が見えてくることにもなるからである?!

とにかく、この「尾張氏」は、かの「大和三山」の一つ、「天香久山」の存在からも分かるように、我が国古代史の解明の大きな鍵を握っていることは間違いないのである?!しかし、これもまた、先の「三輪氏」同様に、北部九州における存在も確認できるようであるが、こちらはまだ、十分な考察が出来ない状態である?!これもまた、今後の課題の一つである!

### ○「賀茂（臣）氏」は、葛城に残った「賀茂族」の一派（「加毛大神系」）?!

最後が、「賀茂（臣）氏」についてである!彼らは、葛城に残った「賀茂族」、すなわち「加毛大神系」であるが、彼らは、かの「事代主神系」と、どこかで袂を分かち、後の「三輪山（纏向）」政権から離脱していった「賀茂族」の一派だと考えられる（血統的には、こちらの方が、正統であったのかもしれない→それ

については、例の「雄略天皇」の逸話／「一言主神」との邂逅話が、思い起される?)?!

なお、その「事代主神」と、神武天皇の正后「媛蹈鞞五十鈴姫」の祖父? 「三嶋溝櫛みしまのみぞくい耳」(大山祇おおやまつみ?)の関係は、まだよく整理がつかないが、前にも確認したように、その「事代主神」は、「大国主神」(出雲神→大国・大黒様)の子神(→恵比寿神)で、奈良葛城地方の地主神ともされる?!

彼が、三嶋溝櫛耳の娘の「玉櫛媛」と結ばれているということは(これが、例の日向三代の神話、とりわけ「ヒコホホデミ(山幸彦)」と「豊玉姫」の婚姻話に投影されている?!)、それは、例の、吉備から近畿・大和に移動、集結した前方後方墳勢力(河内・近江・山城回り→淀川水系)と前方後円墳勢力(河内・生駒回り→大和川水系)の関係を指しているのではないかということである(これは、葛城勢力と瀬戸内海勢力が協力関係にあったことを意味する?!)?!

要は、「鴨(賀茂/加茂)氏(族)」は、初期大和王権の有力な構成メンバーであり、三輪山(纏向)の「大物主勢力」の一翼を担っていたが、いつしか、京都山城に移動していた「賀茂(直)氏」(「タケツヌミ命(八咫鳥)」を祖とする)と分かれ、後者の「賀茂(直)氏」(→「上賀茂神社/下鴨神社」)は、かの「秦氏」と組んで、飛ぶ鳥の? 「藤原政権」に与した(とりわけ「平安京」への遷都において!)!それとは袂を分かった彼らの方は、「地祇系」とされたということである!

ちなみに、その「鴨(賀茂/加茂)氏(族)」の出立地であった「吉備」においては、「吉備加茂氏」が、当地の「吉備氏」と同様に、「皇別氏族」と位置づけられていた(途中から、「地祇系」されたようでもあるが?)?!そういう意味で、この「鴨(賀茂/加茂)氏(族)」と「吉備氏族(上道臣/下道臣氏等)」の理解は、甚だ難しいものだとも言える?!

## 7. これから期待されること

### (1) 虚心坦懐な史実解明と再構成

さて、以上を受けて、最後に、「これから期待されること」と題して、さらなる史実解明に向けて必要な事項（共通理解されるべきこと！）を、幾つか挙げておきたい。そこで、まずは、「虚心坦懐な史実解明と再構成」である！なかなか自説や自派の言説を曲げてまでの歩み寄り？は、多くの人にとっては難しいのであろうが（ある意味当然である！）、今後は、おそらく、それなくしては、事実上の進展（解決？）は図られないであろう？！

というのも、これも、「おそらく？」で申し訳ないが、史実解明のネタ（ピース）自体は、既にほとんど出尽くしていると思われるからである（不要なものも、もちろんあろうが？）？！

要は、いかにして、みんなが総力を挙げて、それらを「整合的に」取捨選択し、再構成していくのかということになるが、そうは言っても、現実の膨大なネタ（ピース）を、どのように整理・整頓（取捨選択？）すればよいのかは、そう簡単なことではない？！

### ○絶対におかしい（矛盾する？）ことは、定説（史実？）とすべきではない！

ということで、ここでは、少なくとも、（心ある？）多くの人々が合意（納得）できるであろうことを挙げ、その打開の一途としたいのであるが、まずは、「そこに、絶対におかしい（矛盾する？）ことがあれば、そのことは定説（史実？）とすべきではない！」ということである！

何故なら、ある不明点（矛盾？）を抱えながら、そのことを「定説（史実？）」としてしまったら、それを下に組み立てられるネタ（ピース）の全体像が固定化され（歪められ？）、まるで違った（嘘の？）歴史が描かれることになるからである？！

その代表的なものが、「『中国史書』から見て、絶対におかしい（矛盾する？）ことは、定説（史実？）とすべきではない」ということである！何故なら、常識的に、「中国史書」は、それ自体は嘘の内容ではないからである？！もちろん、他国である故に誤認や誇張等はあるにしても（僻遠の地ならなおさら？）、そもそも嘘を書く必要はないからである？！

例えば、その典型が、かの『隋書（倭／倭？国伝）』の、600年の遣使記事に関わる部分であるが、そこに示されている「倭王」は、絶対に「（女性天皇）推古」ではないし、ましてや、（摂政？の）「聖徳太子」でもない！明らかに、その人物は男性であり（阿毎多利思北孤→天足彦？）、「倭（倭？）王」であるわけである（摂政ではない！）！

ちなみに、それ（違うということ！）を認めたら、推古天皇や聖徳太子の实在そのものが危うくなる？それは、近畿大和（一元）説の瓦解につながる？それ

だけは避けたい？そういうことになるのであろうが、そういうことは、他ならぬ史実解明にとっては、ほとんど無関係である！それこそ、虚心坦懐な史実解明と再構成を行えばよいだけの話なのである！

また、通説では、『宋書』等に記されている「倭の五王（讚・珍・濟・興・武）」のうちの「武」が、第 21 代の「雄略天皇」であるとされているようであるが（ほとんどの人が、それを「定説」としている？）、果たして、その「雄略」は、実在の天皇なのかということも含めて、実は、まだはっきりしていないのではないか?!倭王「武」とは、第 29 代の「欽明天皇」なのではないか、あるいはまた、「九州倭国」の王（「筑紫君磐井」?）ともされている?!

ただし、その中国史書の記述が、全く信用できないもの（嘘または誤認?）であるのならば、その限りではない?!したがって、その見極めは、真に慎重に行われなければならないが、基本的に、中国側（それぞれの政権王朝）には、意図的な嘘や誤認を書き記す必然性（必要）はない?!また、例の中華思想の矜持?からしても、そうした造作は、ほとんど考えられない?!だが、「記紀」には（朝鮮史書も然り?）、そうした要素（可能性）はかなりある?!何故なら、それ自体を、自らが作成しているからである！

例えば、「記紀」は、持統・藤原体制が、「天武天皇」のための?「国史」を編纂したように偽り（発端はそうであった?）、一方で、自らの祖先である「百濟温祇系余氏」の、「倭国→日本国」への進出（移動）の歴史を、我が国の歴史（国史）とした?ということもある?!それは、ある意味真実であったからであるが、しかし、知られてはまずいところは隠し、量し、場合によっては「事実」を変形、捏造し、そこに、彼らの「万世一系の皇統譜」（日本国史）を創り上げた?!そう考えられるのであり、実は、その根拠も多々あるのである（関裕二氏）!

いずれにしても、これらは、ほんの一例に過ぎないが（だが、実際の影響は、甚だ大きい!）、ことほど左様に、これまでの常識や定説とされているものが、本当は、まだまだ、確定がなされ得てはいないということである。上述の「聖徳太子」、あるいは「仁徳天皇」等の実在、併せて、彼らの事績や陵（「大仙陵」等）のこと等、数え上げればきりがないのである?!

**○地名・氏族名等の「音価（読み）」から、それらの関係や動きが見えてくる?!**

次が、「地名・氏族名等の「音価（読み）」から、それらの関係や動きが見えてくる?!」ということである！例えば、よく指摘されるのが、北部九州と近畿大和における地名及び氏族名（群）の類似・類縁性である。

ちなみに、南部九州（都城地方?）にも、そうしたことが指摘されていたようにも記憶しているが、いずれにしても、これらについては、一方で、それなりの不純物（時代的な懸隔あるいは偶然?等）もあり得るので、かなり慎重に扱わなければいけないであろう！



それはともかく、そこでは、地名・氏族名の類似・類縁性だけでなく、山や川等の名前が、その方位、なかには順序性まで伴って近似しているということが注目されるわけである?! たまたま一致しているのかもしれないし、もちろん時代的・年代的には、まったく該当しない代物もあるであろう?!

したがって、慎重さは求められるが、やはりそこには、ある集団・氏族等の思い(「郷土意識」「同族意識」等)が、色濃く込められているのではないか? そういうことであるわけである(それは、現代でも同じである!)?!

ところで、問題は、例えば元の出身地の名前をそのまま使用したり、その元の地名の前に「新」をつけたりする場合であるが、それらは、ある人物・集団の移動や直接の類縁関係を示すものであり、それらが残っている地域は、そのことを大切にしてきた、あるいはそのことは、誰しもが至極当然のように思ってきたのではないか? そういうことである?!

そして、実は、その最たるものが、「ヤマト」という音価(読み)なのではないかということでもある(上古音の「甲類」「乙類」の問題もあるようではあるが?)?!

ただし、その「ヤマト」については、まずそれが、いわゆる「邪馬台国」の音価(読み)から出てきているものかどうか? つまり、それが、「ヤマト(国)」と呼ばれていたかどうかである(もちろん、本来の使用漢字が「臺→台」であったのか、「壹→壺」であったのかということも含めて)?! ちなみに、「邪靡堆」という表記もある<『隋書』(倭→倭?) 国伝>!

それともう一つ、「倭」、「大倭」、「大和」、「日本」、これらが、すべて「ヤマト」と表音されていた(時代があった?! )という事実もあるが、いずれにしても、「ヤマト」という音価(読み)が、非常に重要で、何か「不可侵の」、あるいは「憧憬・崇敬のシンボル?」みたいなものが、その音価(読み)には込められているということである?!

もし、そうであれば、それは、何故か?! 一つの推論としては、読みや使用漢字の問題はあるが、件の「邪馬台国」がその鍵を握っているのではないか?! そして、当時の政権(藤原政権)は、その事実は知っていたものの、そのことを表には出せなかった、あるいはどこかに後ろめたさがあり、そのこと自体は壮言大書できなかつた?!

要するに、「邪馬台国」は、ある時期(「(漢倭) 奴国」の後)の「倭国」の盟主であり、大陸(「魏王朝」)から王権の正統性・正当性を授与された(→「親魏倭王」)、「由緒正しい」あるいは「高貴な」、そしてまた、その当時の「栄華や誇り」を彷彿とさせる、まさしくその音価(読み)を使用した人々の、言わば「ふるさとの存在」であったのではないか?! ただし、その直系の後裔達は、残念ながら、後の政権(藤原政権)から放逐された? 人々であったろうことは、その後

の流れから分かることではある?!

その他、例えば、アスカ、カモ、ソガ、ミワ、ヒノクマというような、地域・氏族名が挙げられるが、地域名と氏族名の同一は、その地域の者、あるいはその地域の出身者・縁戚者ということであり、そういう意味での、例えば「(大和) 飛鳥」ということになるのである(ただし、この「(大和) 飛鳥」は、我が国で2番目の飛鳥と呼ばれる所であったようで、最初の飛鳥は、大阪・河内にあった! しかも、他にも、「飛鳥(あすか)」と呼ばれる地域は多々あったらしい?)?!

なお、それらの地域は、蘇我氏、東漢氏、秦氏等の、いわゆる「渡来系氏族」の拠点ということでもあるようである?!ということは、当然彼らが、その土地々に移動していった(入植?)ということに他ならない?!

翻って、その「蘇我氏」や「秦氏」といった古代氏族であるが、彼らは、中国大陸ないしは朝鮮半島からの渡来氏族なのではないか、あるいは、それらと密接な関係があるのではないかとということもある(中央アジアの出身というようなことまで含めて?)!

そして、そこには、シュメール人の出自、彼らとユダヤ人(アシュケナージ派)との交わり、そして何よりも、かの栗本慎一郎氏が覚醒を促そうとする、北方の、いわゆる「草原の道」(「絹の道:シルクロード」ではない!)、及びそこで生じたであろう多種多様な民族・文化の発生・接触・交流(もちろん過酷な興亡?!)の余波や直接の影響が、極東の最果て「日本」にも、及ばないはずはない!

むしろ、それこそ多種多様に、流れ込んできたのではないか?!そういうことでもある(その証拠や痕跡として、例えば、神社の「鳥居」や「山伏」のいで立ち、菊の御紋、聖徳太子の人物像、秦氏の素顔 等々がある?)?!

なお、これらについては、さらなる余談とはなるが、改めて我々は、かの「四大文明」の中で一番古いのが、確か「メソポタミア文明」であり、その最初期、つまり、その基盤を創ったのが「シュメール(人)」と習っているはずである?!それは、それでいいが、実は、そのシュメール(人・文明)は、今の中央アジア・南シベリアから移動していったものであるということでもある(栗本氏)?!

## (2) とりわけ重要な課題の洗い出し

次が、そうしたもののうちで最も緊急なものは、「とりわけ重要な課題の洗い出し」であろう!もちろん、何(どこ)が重要な課題であるかは、これもまた千差万別であろうが、私なりに、それを示すと以下のようなものである!

### ○「倭国大乱」の真相解明

まずは、2世紀末の「『倭国大乱』の真相解明」であろう!そこに、大きな謎の解明のスタート(問題の萌芽)があると思われるからである?!と言うのも、それが、北部九州(「奴国」?)の、(鉄の支配による)一極集中から、吉備、出雲、河内(大和を含む!)、近江、丹波、そして、東海、関東(東北の一部を

含む?)の諸族・勢力の集散離合を経た、もう一つの極(新たな→別種の倭国)を出現させるものであったと考えられるからである?!

そして、もう一つ大事な様相は、それをきっかけとして、北部九州の勢力状況も変わり、筑紫平野一帯(有明海沿岸部ないしは内陸部?)に勢力を張ってきた、いわゆる「邪馬台国」(→「親魏倭王」の国)が、「奴国」や「伊都国」を押さえ(その様相は、両者、少し違うかもしれないが?)、その覇権を握ったということである?!

従来は、その「所在地論争」だけが独り歩きをし、どこの部族・勢力なのか? どういう経緯で、そこに建国されたのか? というようなアプローチ(論争)は、ほとんどなされてこなかった?!

ということで、改めて、その「倭国大乱」とは、そもそも、どういうものであったのかということであるが、一言で言えば、それは、吉備・出雲、河内・近江、東海、そして九州にまで広がった、渡来系倭人の各部族・勢力間の攻防と言うことが出来るであろう?!

さらに突っ込んで言えば、吉備からの「手焙形土器」(火・龍蛇信仰)勢力→「前方後方墳勢力」による「環濠集落(銅鐸/巴形銅器)勢力」への攻撃・駆逐の動きであったとも言えるであろう(その証拠の一つとして、例の「吉野ヶ里遺跡」の実相がある!→攻撃された後に、件の「前方後方墳」が造られている!)?!

それは、鉄の支配の問題でもあったと思われるが、一方では、「朱/辰砂(硫化水銀)」の勢力でもあった「吉備勢力(「楯築遺跡」/「賀茂遺跡」等を残した!)」によるものであった?!

そして、多分?それが、「記紀」において記されている「神武東征」のモチーフともなったのではないか?!

そして、そこには、「神武(日向勢力→タケツヌミ命?)」や「塩土翁(珍彦/棹根津彦・椎根津彦)→倭宿禰→海部氏?」(豊予海峡/瀬戸内海勢力)、さらには、「饒速日(→物部集団)」(北部九州から畿内へ進出)や、その後の吉備勢力である「大伴氏→道臣(吉備氏)」との関係、すなわち、「瀬戸内海ルート」の覇権争い等の実相が関わってくるのである?!

### ○「邪馬台国」の所在地確定?

次が、何と言っても、改めての、「邪馬台国」の所在地確定であろう!何故なら、この所在地論争が、かなりの無駄、あるいは徒労?をきたしているからである?!

逸早く、この問題をクリアして、多くの人が、安心して(無駄な労苦を脱して?)、必要な史実解明を、鋭意行えるようにしなければいけないのである(それを阻むような、妙な既得権益集団や、その背後集団がいるようであるが?)!

私としては、「邪馬台国」自体は、まさに、この「倭国大乱」後に、新たに台頭してきた国だと考えているので、その出自/経緯については、その乱の内実を解明していけば、ある意味自ずと分かってくるのではないかと思っている

が、まだまだ明確な答えは得ていない?!いわゆる「南方系（呉越?）」の勢力とも考えられるが（何故なら、かの卑弥呼の「鬼道」については、「五斗米道（初期道教?）」の一つかとも言われている?）、今のところ、何とも言えない?!

○その後、九州はどうなったのか?!その中で、（九州の?!）邪馬台国は、どうなったのか?!

次に、近畿・大和に見え隠れする「九州（勢力）」の影・匂い?（「東遷説」「東征説」も含めて!）、あるいはその時期の出土物の類縁性（例えば、後の「三種の神器」と呼ばれるもの）、さらには地名群の類似性（大和への移植?）等が、そこにはある?!

また、「海部氏」のように、海人族（九州から出たとされる「安曇族」や「住吉族」等）との関連も、移動ルートや具体的な関わり具合はよく分からないが、大きな歴史の流れ（枠組み）でみると、その時の「西から東へ」は、かなり整合性を持って受け入れられるのではないか?!

A D 57 年の、後漢からの「倭国国王」への金印賜受、107 年の「倭国王帥升」等の後漢への遣使、それ以降の、70~80 年間の男王の統治（→「帥升王統」? 何代かは不明?）、そして、180 年頃に「倭国大乱」が起き、北部九州では、最終的には、30 余国を束ねた「邪馬台国」を盟主に、「卑弥呼」が共立され、魏に遣使したりもした。しかし、不仲であった隣国（南の）「狗奴国」との争いの中、卑弥呼は死に、少しもめた後、その宗女「耆与」が共立された。

その後、この邪馬台国、ひいては倭国全体の消息（情報）は、歴史の闇へと消えていった。再び、倭国の消息（情報）が中国の史書に登場するのは、かなり後の、5 世紀に入ってからである!（→『宋書』倭の五王のこと）。

一方で、かの『勘注系図』や『先代旧事本紀』から、「海部氏」や「尾張氏」、「紀（木）氏」、そして「物部氏」等は同族であり、彼らは、まずは九州で「邪馬台国」を形成し（倭国大乱）、その後、ある理由で近畿に移動し（「狗奴国」との闘いまたは新来集団の進出?!）、そこから、大和・山城・近江・北陸・東海等へと拡散した?!

単純に言えば、邪馬台国は、海部氏、尾張氏、物部氏等の国であったとも考えられるということである?!なお、彼らに放逐?!されたのは、それまでの倭国盟主であった「奴国」（ならば「安曇族」もか?）であったかもしれない?!

ところで、そこで鍵となるのが、同時代の人物である「卑弥呼」や「台与（耆与）」のことである!何故なら、彼女らの「邪馬台国」は、まさに、その「倭国大乱」後（直後または一部並行?）に台頭?してきた、新たな「倭国」の盟主国であるからである!要するに、それが、近畿（大和）であろうが、北部九州であろうが、その大乱の影響によって生まれた強国（新興国）と考えられるのである!

もちろん、私は、「(邪馬台国) 北部九州説」の立場であるので(「近畿(大和) 説」自体はあり得ない!)、その「大乱」と「邪馬台国」の関係がどうなるのかということが、最も気になるところとなるのであるが、それが、いわゆる「手焙形土器/前方後方墳勢力→前方後円墳/銅鏡勢力」による、「環濠集落/青銅器(銅鐸) 勢力」への攻撃ということであれば(藤井耕一郎氏による)、多くの謎や不明点が、一気に解明出来るように思われるのである?!

ということは、北部九州の「吉野ヶ里」にも、この「手焙形土器/前方後方墳勢力」は押し寄せてきたということであるが(同遺跡の人達は、その後、忽然とどこかへ消えていったということらしい!)、問題は、その勢力と「邪馬台国」の関係である! その時期に、「邪馬台国」が台頭してきたということであれば、当然? それは、その「手焙形土器/前方後方墳勢力」の後ろ盾(干渉?) で出てきたということとなり、卑弥呼や台与(壺与) は、その一族ということにもなる?!

なお、例の、卑弥呼が行ったという「鬼道」が、もし、その「手焙形土器」と関係するものであったら(呪術用であったことは間違いない! 「鏡」も必要とする?)、その蓋然性は、かなり高くなるであろう?!

ただし、その「手焙形土器/前方後方墳勢力」の勢威は、不思議にも 80 年間位であったらしく(170~250 年位。20 年間隔で、1~4 期に分かれるらしい!)、しかも、例えば「吉野ヶ里」への攻撃は、その最盛期の 3 期(近畿近江から東国と西国に向けて同時に進出していったらしい!) であったということである!

だとすると、すぐに 4 期が来て、さらに、その「手焙形土器/前方後方墳勢力」を凌駕した、おそらく同族(吉備出身 or 経由)の「前方後円墳/銅鏡勢力」(多分、そこに、本来は「手焙形土器/前方後方墳勢力」であった「尾張氏」が加わった?!) が、さらに加わり、「卑弥呼」と「台与(壺与)」の交代劇(その間再び小乱があった!) に、その影響があったとも考えられる?!

また、この時期、筑後川上流の日田地域に、まるで「筑紫の勢力(邪馬台国?)」を見張るような居館があったらしく(「小迫辻原遺跡」! そこでは、出雲系や近畿系の土器等が発見されてもいる。また、そこでは、とても古い「鉄剣」も出ているらしい!)、ここにも、出雲と筑紫の関わり(「大国主」の国づくり?) が垣間見られるのである?!

ちなみに、これに関わって、例の「出雲の国譲り」で活躍する「タケミカヅチ」(「中臣氏」の祭神←本来は「甕/甕みかの神」←手焙形土器/「火」の呪術用?) と「フツヌシ」(「物部氏」の祭神←本来は「剣」の神←素戔鳴命の「天村雲の剣」?) は、そのプロセスを象徴する創造神であるとも考えられる?!

このように、「手焙形土器/前方後方墳勢力」の、一方での「西方進出・移動」の話は、史実としての「東から西への文化的移動」とも符合し、しかも、

それは、神武天皇の、大和？での実子・長兄「神八井耳」一族（→「筑紫の君」「肥（火）の君」「阿蘇の君」「大分おおきたの君」等？）の九州進出とも絡まってくる話のようでもある？！

なお、「神八井耳」は、一方で「多氏」の祖ともされているが、「記紀」では、弟の「神沼河耳」（第2代「綏靖天皇」）に皇位を譲ったようにも書かれているが、実際は、勢力争いに敗れたものとも推測されることは、前にも述べた通りである？！

## ○「二つの倭国」の証拠固め

### ・「九州（倭国）年号」の存在証明？！

次が、以上を踏まえた、大本命の？「『二つの倭国』の証拠固め？！」である！もちろん、それについては、「兼川晋氏」達（九州王朝論者）の、真摯な追求（発見）が基礎となることは明らかである！それが、「九州（倭国）年号」の存在であり、とりわけ、そこにおける「大化」「大宝」、否、実は、その創始年号と考えられる？「継体」という年号のもつ意味である！そして、そこには、例の「大化の改新」（乙巳の変）とは、本当は何だったのか？というようなことも、導き出せる謎？を有しているのでもある？！

ある意味？歴史の証人でもある「二中歴」（「九州年号」）の存在、そして、そこから見えてくるものが何であるのかということであるが、それはさらに、九州の、二つの「倭国」（筑紫倭国と豊国倭国）の存在（並立？）と、その後者の「豊国倭国」の関係（の推移）を、いかに辿ればよいかということにつながっていく？！何故なら、それが、まさしく「二つの倭国」の、新たな形を形づくるものなのでもあるからである？！

ちなみに、そこでは、端的に、その最初の「継体」（年号）をどう捉えるかが、重要な観点となる？！と言うのも、その「継体」（年号）が、今明らかにしようとしている、二つの「倭国」の存在の鍵を握っていると思われるからである？！そして、それは、「二人の継体？」（兼川晋氏）の種明かしともなる？！

### ・「（九州）倭国」の実体解明？

改めて、それは、どういうことか？！それは、実は「継体（天皇）」には、更の名「彦太ひこふつ尊」があり、その「彦太尊」が、九州倭国（豊の倭国）の「継体（という人物）」と、どこかで擦り合わされて（接ぎ木？されて）いる？！元々は、前者は別人であったが、九州倭国（豊の倭国）の「継体」に糾合され、そこから新たな？皇統譜が創られているということである？！

そしてまた、その、近江・越に繋がる「彦太尊」に、九州東部から近江・越に移動していた？「息長氏・額賀氏」の思惑・作為が絡まっているとすれば、その可能性は非常に高くなってくる？！擦り合わされた「継体」は、他ならぬ近江・越の人物に、仕立て上げられなければならなかったということである（「応

神」を産んだ？「息長氏」の意向？）?!

すなわち、そこに、「百済系王族」の渡来と、彼らによる「倭国」と「日本国」の統合・統一の過程?があり、その過程に、二つの九州倭国（「筑紫の倭国」と「豊の倭国」）の並立→「豊の倭国」の「継体」（「軍君」・仇台系牟氏→男弟王?）による、「筑紫の倭国」（温祚系余氏→武・磐井）からの政権篡奪?（「磐井の乱」）、そして、その「豊の倭国」からの「大和倭国→日本国」の流れがあるということである?!

一方、皇統を乗っ取られた側の九州倭国（筑紫の倭国）は、「倭の五王」の最後の「武＝磐井」で終わり、「豊の倭国」、すなわち真の?「継体」と、彼と共闘した（指示された?）「物部麁鹿火<sup>あらかい</sup>」の影響力（支配力）が強まった?!

そして、そこから、次の?当主の「物部尾輿<sup>おこし</sup>（筑紫物部 13 世）」と蘇我系の「堅塩<sup>きたし</sup>姫」の間の子・「15 世大人<sup>うし</sup>連（用明）」から始まる「上宮王家」、そして、その実質的な頭領となった「蘇我本宗家」（直接は、尾輿の弟「稻目」から?!）が台頭し、それが、ある時期から（最終的に?）大和「飛鳥」に居を移し、倭国（→日本国）を移動させた（実質的な創始!）?!

それ以降の動きが、いわゆる「乙巳の変→大化の改新」等であるということであるが、九州倭国（「筑紫の倭国」）は、一応 8 世紀初頭までは、その命脈は保ってはいた?!

いずれにしても、そもそも、その出発点?としての「応神」とは誰か?!そして、その後の「継体」、「欽明」、さらには「敏達」とは、どういう人物、いかなる関係だったのか?!これらについては、上述のように、かなりの錯綜（混乱?）が見られるのであるが、その錯綜（混乱?）の要因が、実は、ここにきて俄然注目されることになる、いわゆる百済の「檐魯<sup>たんろ</sup>制」にあるとしたら、それなりに首肯されることにはなる?!

つまり、ある時期から、我が国の皇統が、まさに百済系の王統によって形成されてきたのであれば、倭国・日本国においても、その百済の統治体制、すなわち「檐魯制」なるものが、厳然と存在していたのではないか?!それが、上記の「筑紫の倭国」（温祚系余氏→武・磐井）であり、「豊の倭国」（温祚系余氏→仇台系牟氏：「軍君」→男弟王?→継体）である?!ただし、問題は、その二つの「倭国」の、実体的な関係だということではある?!

ちなみに、「檐魯」とは、新たに開かれた土地のことを指し、「檐魯制」とは、その檐魯の統治に王族の子弟を任命する制度である。もともとは、中国の周の時代に「魯」国で発達した制度らしいが、その「魯」国は、「殷」の遺臣が配置された国であるため、殷の制度だったとも言える?!具体的には、王家の親族が、地方の有力都市や新たに獲得した土地に領主として派遣されるものであり、「それらの領主は王族だけに、王位継承権をも持つ」ということである!

まさに、ここが重要なのであるが、そうすると、百済の王族（「伽耶」の領主もそうだった?!）が、その檀魯国・倭国／日本に領主として派遣され、場合によっては、その王子が、倭の大王（天皇）の養子として派遣されたりしたのではないかと？ということである（ちなみに、それらが、「記紀」においては、「人質」と表現された？）？！

とにかく、この百済（正確には「百済人」?!）の「檀魯制」が、当時の倭国・日本国においても導入され、その親族国家群（?）が、列島内にも幾つか出来し、そして、最終的には、大和（飛鳥）に、その統一（統合?）政権が樹立された?!もし、そういうことであれば、これまでの謎や疑問は、ほとんど氷解するかもしれないのである?!

なお、その「檀魯国家?」としては、筑紫（九州飛鳥・基肆?→太宰府?!）、豊（→秦王国?）、吉備、播磨、河内、さらに越、常陸（多分?）、そして大和（飛鳥）が該当するであろう?!したがって、そこでの実権の移動?が具体的に分かれば、史実解明の大きな枠組みが、一気に手に入ることになる?!実際、そういうことなのだが…?!

#### ○「二つの倭国」と「倭の五王」の関係（事実?）解明

次が、そうした「二つの倭国」と「倭の五王」の関係（事実?）を、改めて、どのように解き明かせばよいか?!そこに、問題（課題）は収斂する?!すなわち、「邪馬台国所在地論争」や、それに関わる「九州王朝説対近畿大和王朝説」のような、言わば「二者択一的論争」では、真の我が国の建国史（古代史）は描けないのではないかということである！

そこで、最終的には、「二つの倭国」と「倭の五王」の関係（事実?）が、もう少し説得力のある解明となれば、それこそ、かなりの真実に近づけるような気がしているわけであるが、要は、それが、「百済」あるいは「百済系」だけの話なのか？それとも、「伽耶・新羅系」の関わりがあつての話なのか？まさしく、そこが大きなポイントとなると考えているわけでもある！

ただし、現在、そこではっきりしていることは、その大きなポイントの中心に居るのが、「応神」であり、それを取巻く「神功皇后」であり、「武内宿禰」であり、「住吉大神」であるということである?!だから、そこら辺りを、改めて精緻に（総合的に）捉えていく、そうした努力が必要なのである！

ちなみに、その際、そこでは、かの有名な「仁徳」とか、「雄略」とかというような天皇?は、どのようになるのかということがあがあるが、多分?彼ら自体は創作上の人物である?!また、例えば、例の「聖徳太子」のような人物（蘇我馬子 or 入鹿?）も、そういうからくり?であった?!とは言え、重要なことは、必ずそのモデルとなった人物（勢力）はいたはずであるし、そこに、どういう意味を持たせているのかである?!



とにかく、すべてを鵜呑みにしたり、すべてを否定したりすることは、史実の？解明を見誤るということになるということである！そこで、私が最もポイントだと考えている、この「二つの倭国」と「倭の五王」の関係（事実？）は、単なる私の思い込み（入れ？）ではなく、中国史書（『宋書』『（旧）唐書』）にも示されている事実であり、そこに多少の誤認・逸脱等があったとしても、それ自体は信用されるものであるということに立脚しているわけである！

### ○百済系勢力の倭国進出の実相～最後の「筑紫君薩夜麻」をどうみるか？～

最後に、このことについては、あまり誰も深く言及していないようであるが、例の「白村江の戦い」にて、唐の捕虜となり、数年後、太宰府へ帰国したとされている「筑紫君薩夜麻さつやま」をどのように見るかである！彼は、「（九州）倭国王？」とも考えられるが、たまたま戦場で捕虜となったのか、それとも、言わば「戦争最高責任者？として？、改めて捕縛されたのかは、よく分からない？！

しかし、彼が、最後の、「（九州）倭国王？」であったならば、その「白村江の戦い」の様相（位置づけ）そのものが、大いに変わってくることは言うまでもない？！すなわち、彼が、最後の「倭国王」であり、そして、まさに、「九州倭国」が、対外的には、その倭国全体を代表する存在であったということになるからである？！

ちなみに、一般に（通説としては）、「白村江の戦い」は、近畿（近江）の（に移っていた？）「中大兄皇子（天智天皇）」が引き起こしたものとされているが、実は、その主体は、「（九州）倭国（百済温祇系余氏）」であり、（その類族であった、当時の「百済」王統を再建しようとした？）「中大兄皇子（天智天皇）」は、その一族であったがために、一応は、参戦せざるを得なかった（九州朝倉への駐屯？）？！

要するに、近畿に移動し、生き残った？「中大兄皇子（天智天皇）」が、「（九州）倭国（百済温祇系余氏）」王統を継承し、近畿（近江）に、改めて「（九州）倭国（百済温祇系余氏）」政権を確立した？そういうことではなかったのかということである（それを証明するように、近畿（近江）にも、例の九州年号が記録されていたり、また、旧（九州倭国）時代の「評こおり」という表記が、残存したりしてもいた！）？！

そうなると、かの「壬申の乱」は、「（筑紫）倭国（百済温祇系余氏）」王統と「近畿倭国←（豊国）倭国（百済仇台余→牟氏）」王統の戦い？であったということにもなる？「壬申の乱」それ自体は、後者の「天武側」の勝利に終わり、その政権が続いたが、最終的には、「（九州）倭国（百済温祇系余氏）」王統、すなわち「持統・藤原政権（→「藤原氏」）」が勝ち残り（巻き返し？）、そのための（そこから見た？）「倭国史→『日本書紀』」を書き上げた？！そういうこ

とになる?!

ただし、その編纂に当たっては、その陰謀（流れ?）に乗った氏族・勢力、例えば「息長氏」「秦氏」「賀茂（直）氏」（こちらは、「百済系」ではない!むしろ「伽耶・新羅系」?）と、その対抗勢力、あるいは「都合の悪い?」氏族、例えば「蘇我氏」「物部氏」「紀（木）氏」「海部氏」「尾張氏」「出雲臣氏」、そして「賀茂（臣）氏」「大伴氏」等を、歴史の闇に葬った（こちらの側の氏族・勢力が、むしろ正統であった?）?!

したがって、こうした視点で、「記紀」を読み込み、個々のエピソード（事績・事件）を繋ぎ合わせてみる!まさに、そうしたアプローチが必要となってくるということである?!そうすれば、真の古代史（建国史）が、紡ぎ出されてくる!そういうことである?!

### (3) 鍵を握る、幾つかの有望な知見・アプローチ

そこで、それらのアプローチを力強く牽引するものとして、改めて、以下の人達の論、研究成果が、大きくクローズアップされてくるであろう?!ここでは、先の「修正試作版」等で紹介した幾人かの人達の研究成果（論究）を概略し、今後、それらを、どのように生かして（繋げて）いけばよいかの展望を試みて、本論稿を閉じることとする。

#### ○「関裕二氏」の数々の論証（関係本掲載不能!）

まずは、繰り返すように、「関裕二氏」の数々の論証がある（その関係本は、数限りなくあり、ここでは掲載不能である!本当である!）!端的に言えば、膨大な証拠提示による、「藤原氏（体制）」による「蘇我氏（系）」の抹殺と、その糊塗（懺悔?）の事実の提示である!

これほどまでの、誠実な（ある意味嫌と言うほどの?）論証（仮説及び証拠提示）は、他の人の追随を許さないであろう!そして、多分、これがなかったら、私の、この無謀な?「古代史の旅」もなかったであろう?!ただし、一部納得のいかない部分もある!

例えば、「卑弥呼（邪馬台国）」の所在（地）自体は北部九州（山門）であるとされているようであるが、彼女が、近畿大和の邪馬台国の女王であることを、魏に対して「偽僭」している?そして（だから?）、その宗女の「台（臺）与一豊」が、近畿大和から九州に派遣され、彼女を殺して、次なる邪馬台国女王となったということであるが（→「邪馬台国偽僭論」※ただし、もともとこういう説も、江戸時代からあったらしい!本居宣長?）、私は、今のところ、この「偽僭説」自体は、どうしても納得することが出来ないのである!

要は、その時代の「（魏への）偽僭の必要性（蓋然性）」が、まったく感じられないということであるが、おそらく、それは、後の?「神功皇后（息長足姫）」の事績（活躍?そして不遇?）を、かの「台（臺）与」に被せているのではな

いか？そして、それは、彼としては珍しい誤謬なのではないか?!

何故なら、明らかに、「台(臺)与」は、「魏志倭人伝」に記載されている、3世紀後半の「邪馬台国女王」であるが、彼女が、一応は4世紀後半と考えられる「神功皇后(息長足姫)」と同一人物であるはずはないのである(「応神」や「武内宿禰」等を考慮すれば、当然そういうことになる!)?!尤も、「神功皇后」と「息長足姫」が別人であれば、もちろん、この限りではない?!ただし、そうなれば、別の意味で、大変な史実判明となる?!

○「兼川晋氏」による「九州王朝(九州倭国)」の实在とその実体の解明(『百済の王統と日本の古代<半島>と<列島>の相互越境史』不知火書房、2009年)

そうした中で、その北部九州の実態(九州倭国の状況)が、言わば「まとまって」示されているのが、「兼川晋氏」の論証(仮説及び証拠提示)である!しかも、それは、後の近畿大和への覇権の移動の推移や背景がよく分かるものなのである(少なくとも、私にはそのように見える?!)!

ただし、その中で極めて残念なのは、その近畿大和への覇権の移動の推移や背景の具体については、直接は言及されていないことである(それが、執筆のスタンスでもある!)!「百済王統」が、その後の倭国、そして日本国の皇統に深く関わっていることは、ある程度分かっていたことであるが、その母体?としての「九州王朝(九州倭国)」との具体的な関係(までも?)が、本当に驚きの連続の中で示されているのである!

とりわけ、謎の「九州年号」とされるものからの、推論と論証の数々は、やはり、無視できない史実(北部九州の覇権国家の存在)を確信させるものである!すなわち、北部九州における「二つの倭国」(百済系)の存在と、そこにおける「豊国倭国」(檐魯国)の自立(乗っ取り?)、そして、そこでの「九州年号」の存在(王朝の实在の証拠)!さらには、『宋書』等に示されている「倭の五王」の活躍と、近畿・大和への覇権拡大 等々?!

例えば、「評こおり、ひょう」とは、古代朝鮮および古代日本での行政区域の単位だそうであるが、『日本書紀』は、「大化の改新」の時に「郡こおり」が成立したと記すが、「郡」という用語が用いられるのは、「大宝律令」制定(701年)以降であり、それ以前は「評」を使っていたということである(それを示す「木簡類」が見つまっている!)。いずれにしても、その後の、この兼川晋氏の言説及び本の評価は、どうなっているのだろうか?!

○「石渡信一郎氏(及び林順治・仲島岳氏)」による新旧2つの渡来集団(伽耶系と百済系)と百済王族の進出(扶余系?「昆支(応神)」「軍君」(継体)の兄弟支配→「倭の五王」)の解明(石渡信一郎『応神陵の被葬者はだれか』三一書房、1990年)／林順治『応神=ヤマトタケルは朝鮮人だった 異説日本国家の起源』河出書房新社、2009年／仲島岳『古代天皇家と「日本書紀」1300年の秘密』応

## 神天皇と「日十大王」の隠された正体』 2017年、WAVE 出版)

次は、これらは、結果的には？、上記兼川晋氏の、4世紀後半からの百済王族（三つの系統あり）の渡来と倭国支配説と同じということになるが、「応神」と「継体」となった、二人の百済王子（「昆支」と「軍君（男弟王）」）に着目して、彼らの末裔達が、その後の倭国（→日本国）を創出してきたということが指摘されている?!

しかも、伽耶（加羅）と百済からの、新旧2つの渡来集団が、古代日本国を建設したという指摘（仮説）は傾聴に値するし、私も、大枠はそうであったと考えているので、重要な本であることは言うまでもない！だが、兼川氏のような（邪馬台国→倭国九州説）ではないことが、私には、甚だ残念ではある！

それはともかく、そこでは、いわゆる河内王朝？を象徴する「古市古墳群」と「百舌鳥古墳群」の、それぞれの主墳？「誉田御廟山古墳（伝応神天皇陵）」と「大仙古墳（伝仁徳天皇陵）」が、築造時期、形式等の関連で、「昆支＝応神」と「軍君（男弟王）＝継体」の兄弟のものではないかとされ、「大仙古墳（伝仁徳天皇陵）」は、実は「継体天皇陵」ではないかとされている！これは、通説を大きく覆すものであるが、その説明を見ると、その蓋然性は高い?!

そこで、彼（ら）と「兼川氏」との最大の違い？は、「応神」を「昆支」とするかどうかであるが、「軍君（男弟王）」を「継体」とすることは同じである！そこが、何とも悩ましく、恨めしいのであるが、共に、「応神」が百済王族であることは一致している！ただし、もう一人の重要人物である「軍君（男弟王）」が、九州にいた（とされる）「継体」（第一継体？）なのか、それとも近江・越から出た（とされる）「継体」（第二継体？←彦太尊）なのか（兼川氏）、そこも、両者の間ではくい違っている?!

とは言え、「継体」の人物特定、それ自体は出来ているのであり（二人の説は一致している！）、そこから、「昆支」＝応神、「軍君（男弟王）」＝継体で、「昆支」と「軍君」が兄弟ということになれば、謎は簡単に解けるとということにもなるわけである?!

その意味で、改めて鍵を握るのは、百済王子「昆支」（もちろん、「軍君」も！）なのであるが、とにかく私は、「応神」、そしてまた「継体」（以降の天皇）は、すべて百済系の人物だと想定しているので（そうとしか考えられない！）、現時点では、誠に悔しい？二つの説のズレということなのではある?!

### ○「藤井耕一郎氏」による「倭国大乱」の実相、「吉備」「出雲」の実体解明?!

（『タケミカツチの正体 オミ姓氏族対ムラジ姓氏族』 河出書房新社、2017年）

次が、「藤井耕一郎氏」による「倭国大乱」の実相解明である?!

これについては、今再び検討中であるが、改めて、我が国の建国の初期構図が、かなりのリアリティ（本当らしさ!）をもって見えてくるのではないかとということであ

る！これほどまでに、かの「倭国大乱」（「邪馬台国」前夜？2世紀末）の様相（原因・背景、そして、その全貌までも？）が、具体的に示されている？！

具体的には、北部九州の鉄の支配によって苦境に立たされていた「吉備勢力」（足守川流域／吉備の穴海→吉備津）は、「出雲」に進出し、そこから「播磨」を経由して「河内」に進出していった！その「河内」で、淀川→琵琶湖方面の勢力（手焙型土器／前方後方墳勢力→「和珥族」）と大和川→奈良盆地方面の勢力（銅鏡／前方後円墳勢力→大物主・三輪政権）に分かれ、当初は、前者の勢力が勢威を誇ったが（東海・関東方面まで進出）、途中で、彼らは袂を分かち、最終的には、後者の方が政権を取ったという構図である！

多分、これらが、「記紀」に示される「伊弉諾・伊弉冉→三貴子→天照大神と素戔嗚命の誓約→素戔嗚命の高天原追放→出雲の国譲り→天孫降臨神話」のモチーフとなっている？！つまり、その一連のプロセスは、まさに2世紀末の「倭国大乱」の様相を示しているものと思われるのである？！果たして、この本の評価は、どうなっているのでしょうか？！

○「菊池秀夫氏」の『邪馬台国と狗奴国と鉄』（彩流社、2010年）。古代九州の勢力関係（特に「製鉄」）の解明と「日向勢力」の大和移動の可能性（「神武東征」の元ネタ？）！そこにおける「鴨族（カモタケツヌミ命）」の存在？！

次が、「菊池秀夫氏」の『邪馬台国と狗奴国と鉄』（彩流社、2010年）であるが、今の熊本県中北部にあったと（推測？）される「狗奴国」の存在に注目され、当地方の菊池（市）と「狗古智卑狗（彦？）」の関係、阿蘇地方の製鉄（褐鉄鉱）の推移、そして何より、「魏志倭人伝」において、「邪馬台国の南にある狗奴国」が、確かにそこ（熊本県中北部）にあったのなら、「狗奴国の北にある」のは邪馬台国ということになる！そういう解明であるが、実に見事な背理法的証明である！

他には、当時の九州勢力の分布を、全体的に（关系的に）示されている！日向灘沿岸勢力の存在と動きが、例の「神武東征」を彷彿させるもののようにも思えるが（日向の曾に降りたとされる、例の「タケツヌミ命」、すなわち「八咫鳥」＝「鴨族」のことが、ここでは彷彿とされる？）、他の人は、どのように受け止められているのでしょうか？

実際、その中で、特に注目されるのが、「狗奴国」と思われる地域における「鉄」と、それに関わる諸勢力の分布並びに移動という部分である！これは、従来よく分からなかった、弥生から古墳時代にかけての九州北部と九州中部の関係、そして、その九州中部（阿蘇地方や大分県の大野川流域）と九州南部（宮崎県！）との関係が、ある人々・勢力の移動としてつながり（最終的には近畿大和にも?!）、単なる「狗奴国」探しだけではなく、いわゆる「神武東征」や「九州勢力」の東への移動が、考古学的な根拠も伴って、大きな動的・面的な理解と

して捉えられるのではないかということである?!

ちなみに、弥生時代の末期、九州には大きく五つの勢力があった（北部九州の女王国連合の国々／熊本県北部の菊池川流域／熊本県中部の白川流域／大分県西部の大野川流域／宮崎県中部の勢力。ただし、その大野川と白川流域、大野川と菊池川流域の勢力には関連性があり、この三つの勢力は同一のグループとされる!）。

そこに、鉄器の出土分布と密度の関係や大型武器の出土状況を重ねると、さらに大きく三つのグループに分かれ（九州北部：玄海灘沿岸、響・周防灘沿岸、筑後川流域・筑紫平野の地域／九州中部：白川・菊池川・緑川流域、大野川・大分川流域の地域／九州東南部：日向灘沿岸の地域）、そこで、女王国連合の国々と菊池川流域の勢力は交戦していたので、菊池川流域の勢力は狗奴国の一部（中心人物は狗古智卑狗→菊池彦?!ただし、その中心は白川流域）。その九州中部と九州東南部は近畿・大和と関連性があり（特に宮崎県中部・一ツ瀬川流域には、二か所から庄内式土器?!、日本最古と推定できる前方後円墳、日本で2番目に多く鉄製武器を出土→川床遺跡。）、九州東南部の東遷しか考えられないという。

幾つか異論・反論もないわけではないが、以上の枠組み（筋!）は、当初の、近畿・大和における北部九州の影や匂い、さらには神武に関わる「タケツヌミ」の存在と動きを絡ませてみると、さらに大きな（正確な?）史実解明の枠組み（筋!）を提示してくれるかもしれない?!そういうことである!

#### ○「斎藤忠氏」の『消された日本建国の謎』（学研パブリッシング、2013年）

最後が、「斎藤忠氏」の論説であるが、先著の『あざむかれた王朝交代日本建国の謎』『盗まれた日本建国の謎』も含めて、かなり難解で、強引?なところもあるが、例えば「701年」の持っている意味、すなわち正式な「日本国建国」（一般には「大宝律令」で認識!）の意味を抉り出されている。

そして、そこにおける「ヤマヒト」と「アメ（ウミ）ヒト」の相克という全体の視点も、いわゆる伽耶／新羅勢力や百濟勢力といった、半島南部の動静も含めた、倭国の成立とその具体的展開という点で、実に興味深いものである。まさに、括目に値するものである?!これらの著作物の評価も、その後、どうなったのであろうか?!

#### ○最後に

以上、何人かの人達の論説の紹介と、それのもつ意義を、私なりにまとめたが、ある意味、それらは、恣意的で、私の読書の、単なる結果なのかもしれない!

しかし、このように、残っているということは、それなりの確からしさがあるのであり（自分で言うのも烏滸がましいが!）、私としては、それらが、改めて、我が国古代史（建国史）解明の道標／道先案内人の役割を果たすであろうことは間違いないと断ずる次第でもあるのである?!本当に、凄いものである!

<参考文献>※再掲

- ① 関裕二『新史論／書き替えられた古代史』(①～⑤) 小学館、2013年～2016年／『古代史 不都合な真実 12の古代文書が暴く「日本書紀」の嘘』 実業之日本社、2018年／『神武天皇 vs. 卑弥呼 ヤマト建国を推理する』 新潮社、2018年 等※同氏の著作は膨大であるので、ここでは、そのまとめのものを揚げた。
- ② 兼川晋『百済の王統と日本の古代<半島>と<列島>の相互越境史』 不知火書房、2009年
- ③ 藤井耕一郎『タケミカツチの正体 オミ姓氏族対ムラジ姓氏族』／『サルタヒコの謎を解く』／『武内宿禰の正体 古代史上最もあやしい謎の存在』 河出書房新社、2017年／2015年／2012年
- ④ 菊池秀夫『邪馬台国と狗奴国と鉄』 彩流社、2010年
- ⑤ 石渡信一郎『応神陵の被葬者はだれか』／『蘇我馬子は天皇だった』／『古代蝦夷と天皇家』／『蘇我王朝と天武天皇』 三一書房、1990年／1991年／1994年／1996年
- ⑥ 林順治『日本古代国家の秘密-隠された新旧二つの朝鮮渡来集団』 溪流社、2015年／『日本人の正体』 三五館、2010年／『応神=ヤマトタケルは朝鮮人だった 異説日本国家の起源』 河出書房新社、2009年
- ⑦ 仲島岳『古代天皇家と「日本書紀」1300年の秘密 応神天皇と「日十大王」の隠された正体』 WAVE 出版、2017年
- ⑧ 斎藤忠『あざむかれた王朝交代 日本建国の謎』／『盗まれた日本建国の謎』／『消された日本建国の謎』 学研パブリッシング、2011年／2012年／2013年
- ⑨ 直木孝次郎「特別試論 『古事記』『日本書紀』の成立過程』『別冊歴史読本 『古事記』『日本書紀』の謎』 新人物往来社、1995年
- ⑩ 石井進・笠原一男・児玉幸多・笹山晴生『詳説 日本史』 山川出版、1999年
- ⑪ 埴原和郎「日本人の形成」『日本列島と人類社会』(岩波講座 日本通史第1巻) 岩波書店、1993年
- ⑫ 栗本慎一郎『栗本慎一郎の全世界史-経済人類学が導いた生命論としての歴史-』 技術評論社、2013年
- ⑬ 龜山勝『安曇族と徐福 弥生時代を創りあげた人たち』 龍鳳書房、2016年
- ⑭ 吉留路樹『倭国ここに在り』 葦書房、1991年
- ⑮ 吉田一彦『「日本書紀」の呪縛(シリーズ<本と日本史①>)』 集英社、2016年
- ⑯ 宝賀寿夫『古代氏族の研究⑬ 天皇氏族-天孫族の来た道』 青垣出版、2018年
- ⑰ 宮島正人『「倭」の神々と邪馬台国 志賀島・宗像・八女』 海鳥社、2018年
- ⑱ 斎藤・関野・片山・武光 他『大論争 日本人の起源』 宝島社、2019年
- ⑲ 坂本貴和子・渡辺英治『ロマンで古代史は読み解けない 科学者が結ぶ、地図と陰陽』 溪流社、2018年